

言葉

と
その周辺を

3

きわめる

活動報告書

言葉

と
その周辺を 3
きわめる

活動報告書

目次

… * ————— *

まえがき	成田 節	
マレーシア・シンガポールの言語	野元裕樹	1
「中国語好み」の表現 —名詞的表現と動詞的表現	加藤晴子	29
ハンガリー語： 日本語と似ているところ、違うところ	大島 一	51
フィリピンの言葉は繰り返す	長屋尚典	71
スペイン語のバリエーション —接触する言語と文化	高垣敏博	95
講座概要		

まえがき

東京外国語大学語学研究所が1994年度から開講している公開講座も2015年度で21回を数えました。2011年度に東京外国語大学オープンアカデミーのプログラムとして本学本郷サテライトで実施した公開講座から、その内容を受講者だけではなくできるだけ多くのみなさんに共有していただこうとブックレットとして刊行することにしました。2012年秋の『言葉とその周辺をきわめる』、2013年秋の『言葉とその周辺をきわめる2』に引き続き、今回は「その3」として2014年秋の講演内容をお届けいたします。

本ブックレット『言葉とその周辺をきわめる3』は当日の講演内容を文字起こししてまとめたものです。6回の講演の内「シンガポール・マレーシアの言語」、「中国語好み」の表現 -名詞的表現と動詞的表現」、「ハンガリー語：日本語と似ているところ、違うところ」、「フィリピンの言葉は繰り返す」、「スペイン語のバリエーション -接触する言語と文化」の5回分が収められています。

各章末には各講師によるコラムもあります。講演とは別の観点からそれぞれの言語や文化を眺めることができると思います。またそれぞれの講師が薦める文献も紹介されています。本ブックレットが、言語と文化についてさらに広く深く知るための手助けとなれば幸いです。

語学研究所長

成田 節

平成 26 年度 東京外国語大学オープンアカデミー

東京外国語大学語学研究所 企画

『言葉とその周辺をきわめる -3- 』

2014 年 10 月 7 日 (火) 第 1 回

「マレーシア・シンガポールの言語」

東京外国語大学講師

野元 裕樹

このたびは「言葉とその周辺をきわめる -3-」を受講いただきありがとうございます。このシリーズは 1、2 とやっているんですが、1 から引き続いて受講されている方も何名かいらっしゃるようで、ありがとうございます。それから初めての方ですが、この講座は全部で 6 回あってそれぞれ違う言語の話をするんですが、それぞれの言語についての前提知識は特に必要ありませんので、気軽に聴いていただければと思います。

1. はじめに

今日は「マレーシア・シンガポールの言語」というタイトルでお話させていただきます。の中で、マレーシアあるいはシンガポールに行ったことがある方はいらっしゃいますか？かなりの人数いらっしゃいますね。ではあまりお話することもないかもしれませんが、今回は特に言語にしばってお話したいと思います。観光で行くとガイドさんに任せたりして、あるいは英語ができる方ですと現地の人も英語で対応してくれますから、実際にマレーシアやシンガポールの人々がどのような言語でしゃべっているかということがわからないと思います。今日はそのへんをわかっていただけるとありがたいです。

今日の予定ですが、まずマレーシアとシンガポールの言語状況ということで、言語自体の中の話ではなくて、あくまで「～語」という外側だけの言語の話をして、その次に言語自体のことを見るという形で進めます。私が一番きちんと話ができるマレーシアのマレー語の話をします。このあたりは文法の話になるので、少し難しくなってくるかもしれません。

2. マレーシア・シンガポールの言語状況

まず位置です。日本から南下すると、台湾、フィリピンとありまして、さらに南下するとマレーシア・シンガポールのエリアになります。忘れがちなんですが、マレーシアは西マレーシアと東マレーシアとがあります。「西マレーシア」「東マレーシア」という呼び方のほかに、「半島マレーシア」「サバ・サラワク」という呼び方もあります。半島の南の下にシンガポールがあります。マレーシアに比べると非常に小さくて、東京 23 区くらいの大きさしかありません。ただ、言語学的に起こっていることは非常に興味深くて、いろいろお話することがあります。研究も、マレーシアの言語の研究に比べるとシンガポールの言語の研究の方はかなり進んでいます。

2.1 歴史的背景

歴史的背景です。東京外国語大学の東南アジア課程の ―今は学部改編で「課程」はなくなってしまったんですが、東南アジアの言語・地域を選んで入学した― 一年生が自分の選んだ地域とか言語だけではなく、広く東南アジア一般のことを知ろうという目的で使う教科書を参照しました。歴史、文学、政治、経済とか自分の興味のない部分を含めて東南アジア全般のことを知るための本です。『東南アジアを知るための 50 章』という本で明石書店から最近出たばかりです。2,000 円ほどです。言語の章もありますので、興味がおありの方はどうぞ。

さて、マレーシア・シンガポールの地域はイギリスに支配されていました。イギリスの東インド会社というのがマラッカやペナン島を領有していました。1819 年にシンガポールがイギリス領になります。当時イギリスはマラッカやペナンやシンガポールという都市をポイントポイントで支配していたんですが、次第にもうちょっと広いエリアを支配するようになります。1824 年頃です。マレー半島やボルネオ島北部つまり現在マレーシアと言われているあたりです。ボルネオ島南部はオランダ領でした。イギリス領になったというこのことが、マレーシア・シンガポールの言語状況に非常に大きな影響を及ぼします。なぜかという、イギリス領なのでまず英語が入ってきます。加えて、イギリスの政策として、鉱山や農園の労働者として移民を大量に入れたということがあります。移民元の主な場所としては中国の南部地域、香港や台湾の対岸、インドの南側、ジャワ島―ジャワ島は今はインドネシアですが― それらの地域から多くの移民が現在マレーシアと呼ばれている地域に入ってきました。かなり大量な移民でしたので、

現地に同化するという形ではなく、それぞれのグループを作り多民族社会が形成されました。話を先取りすると、自分たちの言語を維持するわけです。タイにも移民はいるんですが、タイ人になってしまつて言葉もタイ語になってしまうんです。マレーシア・シンガポールは少々違ってまして、移民の言語がそのまま根付くという形になっています。第二次世界大戦後の 1948 年に独立します。どのように独立したかという、マレー半島の諸州がマラヤ連邦になります。シンガポールはイギリスの直轄領のままです。マラヤ連邦のほうに先にイギリスから独立します。1963 年になると、マラヤ連邦にシンガポール、ボルネオ島のサバ州とサラワク州というのが入ってマレーシア連邦というのができます。ですから、今回の話で、マレーシアとシンガポールを同時に扱うわけです。今の若い人は、マレーシアとシンガポールはずっと以前から違った国だと思っている人がほとんどですが、今日の受講者の方々と、シンガポールがまだマレーシアと一緒にあった時代をご存知でしょう。そういうわけで、マレーシアとシンガポールは状況的にも同じような感じですので一緒にお話することにしました。1965 年にシンガポールはマレーシアから独立しました。現在までマレーシアとシンガポールという 2 つの国の体制が続いています。歴史的にはいろいろなものを共有していて、同じような部分が多いです。

2.2 人口・民族構成

一つずつ国を見ていきます。マレーシアの人口と民族構成です。2014 年に 3000 万人になりました。2013 年にはまだ 2900 万人ほどでしたが、今年になって 3000 万人を超えました。人口はかなりの勢いで常に増えています。人口構成ですが、マレーシアだからマレー人が多いかというとそうでもなく、人口の約半分がマレー人です。22.6%が華人で、だいたい 5 分の 1 から 4 分の 1 です。「華人」というのは英語で言うと Chinese です。マレーシア・シンガポールのことを話す時に、よく学生が「中国人」と言うのですが、中国人ではありません。彼らのアイデンティティーは「マレーシア人」「シンガポール人」です。ですから、Chinese の訳としては「華人」という言い方をします。言葉のほうも同様で、「中国語」と言うと中華人民共和国になってしまうので、「華語」と言います。マレーシア人の華人の方も自分たちのことを「中国人」とは絶対言いません。「華人」あるいは英語で Chinese と言います。言葉のことも「華語」あるいは「漢語」と言うのが普通です。11.8%は先住民です。マレーシアの地には必ずしも当初か

らマレー人がいたわけではありません。特にボルネオ島にはマレー人ではなくその他の先住民族が住んでいました。イバン人とかカダザン人とかビダユ人とかです。「ブミプトラ政策」というのが地理の教科書に登場しますが、マレー人とボルネオ島などに住んでいるマレーシアの先住民は優遇されています。6.7%はインド系の人たちです。その他 8.9%のうちの 0.9%は、本当にわずかのユーラシアンの人たちです。ユーラシアンというのは、ヨーロッパとアジアの混血の人たちで、マラッカのことをご存知の方はわかりだと思います。マラッカはオランダに支配されたりポルトガルに支配されたりしていて、主にポルトガル人と現地人一現地人ととっても実はジャワ出身の奴隷のような人たちですが— との混血の人たちです。その他 8.9%のうちの 8.0%は誰かということ、これはおそらく外国人労働者です。マレーシアは非常に多くの外国人労働者が合法違法に入っていて、例えば、ミャンマー、バングラデシュ、インドネシア、フィリピンからの移民労働者がかなりたくさんいます。違法な人たちがかなりたくさんいるので、8%どころかおそらく 10%くらいは外国人労働者だと思います。

シンガポールはマレーシアと比べるとだいぶ事情が違います。マレー人は 13.3%しかいません。シンガポールはマレー半島の南の下ですからマレーの地なんですけど、結局大部分が移民により成り立っています。74.2%が華人ですから台湾みたいなものです。もともと現地人がいたんですが移民たちがほとんどになってしまったわけです。9.2%がインド系、その他が 3.3%います。人口は 500 万人くらいですが、毎年増え続けています。なぜ増えているかというと移民を常に受け入れているからです。シンガポールの出生率は日本より低いのですが、移民がいるので常に人口は増えています。

2.3 国語・公用語

これも、マレーシアとシンガポールではかなり違います。マレーシアはシンガポールみたいなのかな？とよく勘違いされます。ですので、シンガポールからお話しますと、シンガポールは特に公用語が有名です。公用語は、英語、華語（北京語）、マレー語、タミル語の 4 つです。「華語（北京語）」としているのは、Chinese というのは中国語という意味ですが、中国語には広東語や福建語や上海語とかいろいろあるからです。中国のことを研究する人たちはこれらを全部方言として扱います。私は中国の研究者ではなく単なる言語学者でして、客観的に言語学的に見ればお互いに通じないのでこれはそれぞれ別々の言語です。ただ親族関係には

ありますので、「華語諸語」と私は呼んでいます。北京語というのは北京あたりで話されているもので、例えばNHKの「中国語講座」でやっているものは北京語と言います。ですから、NHKの「中国語講座」は本当は「北京語講座」なのですが、そういう番組タイトルにしてしまうとおそらく受講者が減ってしまうでしょう。英語で言うと北京語は「マンダリン・チャイニーズ (Mandarin Chinese)」ですが、現地人は「マンダリン」と呼んでいます。タミル語というのはインドの言語です。

一方、マレーシアの公用語はマレー語だけです。よく「英語も公用語でしょ？」と間違われます。マレーシアは、定年退職された方が年金を使って優遇的に長期のビザを使ってセカンドライフをすごす話をよく耳にします。そういう場合に、「英語を使えば大丈夫」みたいな言い方をされますが、英語は使われてはいますが、マレーシアの公用語ではありません。マレーシアの公用語はマレー語です。

国語はマレーシアもシンガポールも同じで、マレー語です。国語と公用語の違いはあまり注意されませんが、国語はいわゆるシンボルですので、みんながみんなしゃべれる必要はないわけです。例えば日本の花みたいなもので、その花がみんな好きだとか、その花をみんながうちで育てているとか、そういうことはありません。マレー語がその国を象徴していますという意味です。ただ、シンガポールのほうは、国語であるマレー語がしゃべれる国民はほとんどいません。シンガポールの華人 74.2%という人たちでどのくらいマレー語がしゃべれるかといえば、1%いるかいらないかだと思います。ですから、シンガポールの国民は国語がしゃべれません。ただ、公用語はどれかはしゃべれるわけです。公用語というのは、公的なところで使わなければならないと定められた言語です。ですから、学校では公用語を用いることになります。役所では公用語がしゃべればなんとかなるわけです。例えば英語ができなくてもタミル語ができればなんとかなります。もしタミル語しかしゃべれない人が役所に行って役所で対応できなければ、それは役所に問題があることになります。つまり法的規制があるわけですね。全てのサービスを4つの言語で平等に提供するというのがシンガポールがやっていることです。マレーシアでは役所ではマレー語で対応できればいいわけです。日本で英語を公用語にするかどうかという問題は、このあたりに関わってくるわけで、日本が英語を公用語にした場合は、シンガポールを見習わなければならないということです。ですから役所に行って英語ができない人がいると困るわけです。公用語のステイタスを与えるということは、つまりそういうことで、全てのことを

全ての言語で同じようにできるようにすることです。例えば、私はシンガポールに1年ほどいたんですが、マンションの総会のお知らせも4つの言語でされます。もし日本の公用語が日本語と英語の2言語になったら、仮に英語話者が一人いなくてもこのような文書も2言語で用意しなければならないんです。(ところで、私は言語学者なので、ちょっと気になることがあります。それは言語の数え方です。どうやって数えますか？車なら1台2台ですね。言語はどのように数えるかというと、普通は1ヶ国語、2ヶ国語と数えます。「何ヶ国語しゃべれますか？」のような言い方をします。いつも気になるんですが、「～ヶ国語」というのは「国語」なんですね。日本の国語は1つなので1ヶ国語でいんですが、でもこの数え方は、国語になっていない言語も数えていいわけですよね。最後の手段は「つ」です。1つ、2つです。「4つ言語をしゃべれます」でいいと思います。あるいは、言語の場合は「1言語、2言語」「何言語しゃべれますか？」でいいですね。)

マレーシアは1言語体制です。国語も1言語、公用語も1言語。以前マレーシアでタクシーに乗ったらおもしろい掲示がありましたのでお見せします(図1)。



図1 タクシーの中の掲示(マレーシア、クアラルンプール)

タクシーに乗ったらこういうことをするなという看板です。マレーシアはイスラム圏ですのでこういう注意看板があります。HARAP BERSOPAN「行儀よくしてください」と書いてあります。JANGAN MELAKUKAN PERKARA SUMBANG DI DALAM TEKSI ですが、JANGAN MELAKUKAN=するな、PERKARA SUMBANG=忌まわしいこと、DI DALAM TEKSI=タクシーの中で、ということです。

このように1言語のものもあれば、駅に行くとマレー語と英語の2言語表記のものもあります(図2)。2言語表記のものはマレー語が大きく太く書いてあって、英語のほうは下に小さくちょろっと書いてあったりします。



図2 駅の標識（マレーシア、クアラルンプール）

それから道路標識では、マレー語一言語だけでも、2つの文字が並んでいることがあります。一つはローマ字、もう一つはアラビア文字です。マレー語表記に用いられるアラビア文字は、ジャウィ文字 (Jawi) と呼ばれています。これはアラビア語ではなくてマレー語です。日本語をひらがなで書いたりローマ字で書いたりできるのと同じで、マレー語をローマ字で書いたりアラビア文字／ジャウィ文字で書いたりできるわけです。それから、マレーシアでは携帯はプリペイド式のものをを使うんですが、プリペイドカードの宣伝をお見せします (図3)。マレーシアでは毎月の契約で携帯を使っている人はあまりいなくて、使う分だけ買ってSUICAみたいにチャージするというをやっています。これはクランタン州というマレーシアのタイに接している北部の州です。ここはイスラーム教が非常に崇拝されている地域で、敬虔なイスラーム教徒が多いところです。ここではやはりアラビア文字を出したいんでしょうか、アラビア文字が大きく表記されています。



図3 街の看板（マレーシア、クランタン州）

それからペナン島のジョージタウンで撮った看板の写真です（図4）。何語が使っているかということです。一番多いのは英語のようですが、華語もかなりの部分を占めています。ペナン島というのは、華人が非常に多い島です。ペナン州全体はそれほど華人が多いわけではありませんが、ペナン島には非常に多いです。MEGA HOME という広告は明らかに英語ですね。英語、華語、英語、華語と表記されていてどこにマレー語が出てくるのかと思ったら、上の方に一行おまけ程度に存在します。やはり先ほどの公用語の法的規制です。看板は公的なもので、マレー語を入れないといけないんですね。



図4 街の看板（マレーシア、ペナン島）

シンガポールに行くと4言語になるわけです（図5）。一番上は英語で、2番目は華語、3番目はマレー語、最後がタミル語です。タミル語の文字はタミル文字です。



図 5 街の掲示（シンガポール）

ですからシンガポールとマレーシアとではだいぶ違います。マレーシアでも 4 言語にしようという運動をしている人たちがいます。先ほどの人口比率を見てもわかるとおり、あまり必要ないんじゃないかなと私は思います。4 言語になると看板とか全部大きくなってしまいますからね。シンガポールは国が小さいので作るものはそんなにないんでしょう。そして経済力もありますしね。ただ、マレーシアでやろうとすると国の大きさが全然違いますし、経済力も違うので、シンガポールと同じことをマレーシアでやるには無理があります。

2.4 母語

今までは国語と公用語の話をしました。国語と公用語だけが話されているかというと、それ以外に母語というものがあります。母語は母国語とは違って、国はどこの国であっても関係ありません。「母国語」というと国が入ってきてしまいます。政治と言語の話が一緒になってしまうことが多いんですが、言語学では政治の話は切り離して言語の部分をきちんと見るということをします。

マレーシアの話からです。50%いるマレー系ですが、うちではほとんどマレー語を話しています。マレー語が第一言語です。華人は華語ですが、英語の人たち

もいます。だいたい華語か英語です。この場合の華語は主に福建語です。福建語というのは台湾とその対岸の福建省で話されている言葉です。ですが、マレーシアの福建語と、台湾や台湾対岸の中国の福建省で話されている福建語はかなり違うと言われています。広東語というのは香港のあたりです。ただ、ペナン島では福建語が強いとか、クアラルンプールには広東語の人がたくさんいるとか、あとサバ州サラワク州には客家語の人たちがたくさんいるとか、国の中でいろいろなものが併存しています。最近では北京語が増えていて、これは中国の影響だと思えます。政治的な要因です。もともとマレーシアという国は、中国の北側ではなく南側から人が来ているために北京語をしゃべる人たちはいませんでした。ただ、福建語も広東語も客家語も別の言語で互いに通じないので、何か一つ言語を決めて華人で何かやろうということになった時に、中国では北京語をしゃべっているからという政治的理由で北京語を勉強し始めたんですね。ですから、北京語が得意じゃない華人もいます。特に高齢の方たちは得意じゃありません。日本人みたいに、福建語（または広東語）+片言のマレー語しかしゃべりませんというモノリンガルの人でも高齢者にはかなりいます。若い人たちはかなりいろいろな言語ができます。「その他」の人たちはマレー語が多いと思います。それから土着の言語、イバン語とかカダザン語を母語とする人たちもいます。インド系の人たちはインドの言語、タミル語、テルグ語、マラヤラーム語などで、インドの南のほうの言語です。それから英語です。インド系はシンガポールとだいぶ違ってまして、マレー語を第一言語にしている人たちもいます。つまりインド系をやめてマレー語にシフトしているわけですね。あるいはインド系の言語をやめて英語にしようという流れもあります。マレーシアではこの2つの流れがあります。

シンガポールは状況が少し違います。シンガポールは小さな国なので異常なことが発生してしまっていて、シンガポールに行くとみんな英語指向になります。華人は華語または英語が母語です。ただマレーシアと違うのは、華人が北京語をうちで話し始めていることです。マレーシアの若い華人が流暢に話す福建語や広東語や客家語は、シンガポールの若い華人は話せなくなってきました。ですから言語が失われてきています。マレー系はマレーシアではほぼ100%マレー語を母語としますが、シンガポールでは英語に流れる人たちがいます。インド系の言語は危ういです。インド系の言語を母語にする人たちもいますが、インド系の人たちはかなりの確率で英語に流れてしまっています。話されているインド系の言語や華語諸語はマレーシアもシンガポールも一緒なんですけど、ただシンガポールでは

シフトがかなり進んでしまっているという感じです。シンガポールでややこしいのは、「母語」という概念がもう一つあって、「教育言語」として「母語」という科目があるんです。Mother Tongue あるいは Mother Language という「教科」があるわけです。何がややこしいかというと、シンガポールの一部の人たちは一つの言語、英語しかしゃべれないんです。では、母語というのは何かというと、英語ではなくてアジアの言語ということになっています。ですから、選べるのは、華語、マレー語、タミル語の3つです。うちで英語しかしゃべれない人たちににとっては、この3言語は全くの外国語であって、全然母語じゃありません。ただ、教科の名前としては「母語」なんです。自分の本当の言語学的な母語は英語なんです。シンガポールというのは、非常に複雑です。小さな国ですが、言語事情や一人一人の言語生活の仕方は非常に複雑です。先ほど華人が英語しかしゃべれなくなっていると言いましたが、ここに資料があります。1960年頃はほとんどの人が福建語をしゃべっていましたが、1990年代には30.1%の人が北京語をしゃべるようになって、2010年になると北京語が約50%になってしまいました。ですから、マレーシアでまだ元気な福建語や広東語は、シンガポールでは19.2%になってしまっています。シンガポールに留学するということは北京語に触れるということになります。シンガポールの町では北京語とシンガポール英語がよく使われています。母語がシンガポール英語の人も増えてきています。もともと自分たちがしゃべっていた先祖の言語がなくなってくるんですね。子供は英語しかしゃべれない、北京語しかしゃべれない。おばあちゃんは福建語しかしゃべれないから、お父さんお母さんを通じてコミュニケーションする事態が生じています。このような状況は嘆くべきことである一方、それを通じてシンガポール英語という新しい言語が誕生していることを忘れてはなりません。新たな言語は以前の言語とは呼び名は異なるものの、以前の言語の特徴は色々な形で引き継がれているんです。このような肯定的な側面は、否定的な側面の影に隠れて、注目されることがほとんどありませんが、大切なことだと思います。

2.5 シンガポール英語

シンガポールの英語ですが、NHKの英語講座で教えているような英語をシンガポール人がしゃべっているわけではありません。シンガポール人の英語ははつきり言って何をしゃべっているかわかりません。私はシンガポールに行った時はわかるようになるまで数ヶ月かかりました。ですので、シンガポール人の英語と

いうのは外国人には通じません。2つの種類があります。「標準シンガポール英語」というのは、普段みんながしゃべっている英語というよりは、「これが正しい英語です」という、ニュースや役所でしゃべっているような英語です。道端で聞くのは「口語シンガポール英語」です。シングリッシュ (Singlish) という言葉を聞いたことがありますか？それです。シングリッシュでは何を言っているかわかりません。そんな状態では企業は太刀打ちできません。国際都市でビジネスができるはずなのに、来てみたらシングリッシュで何を言っているかわからないというのではうまくいかないで、きちんとした英語をしゃべりましょうというキャンペーンを政府がやっているわけです。町中でキャンペーンバスを走らせてたりしています。

東京外国語大学に「27 言語モジュール」というのがありまして、その中に英語の変種というのがあります。英語の変種というの、英語で言うと variety ですが、一つの言語でも違うしゃべり方があって、場所によって違ったりします。標準シンガポール英語と口語シンガポール英語は同じシンガポール英語でも違う話し方でして、こういうのを variety 「変種」と言います。世界のいろいろな地域変種を英語の先生が集めて作ったものがありますので、これを聴いてみます。「シンガポール英語」というものです。

シンガポール英語モジュール「15：能力についてたずねる」

http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/en-sg/dmod/class/ja_15_1.html

これはオフィスでの会話なので比較的わかりやすいシンガポール英語ですが、ところどころシンガポールっぽい部分が出てきます。字幕を追って聴いてみるとわかると思いますが、華語の話をしているんですね。

シンガポール英語モジュール「25：提案する」

http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/en-sg/dmod/class/ja_25_1.html

ちょっとわかりにくいモジュールを見てみます。口語シンガポール英語です。何語なんだろう？と思います。これが多分普通の人たちの会話です。シンガポール人と仲良くなりたければ、こうやってしゃべらないと自分だけ浮いちゃうわけですね。ただ、これをどうやって勉強すればいいかというと、手立てはないです。以前、NHK で「アジアの英語」みたいな番組を放送したので興味があったので見たんですが、こういうものはさすがに教えません。みなさん、別にできるよう

になる必要はないと思いますが、しゃべれなくてもいいですから何を言っているのか聞いてわかればいいと思います。相手に好きにしゃべらせてあげて、相手の言っていることがわからないと会話が成り立たないので。こういうコンテンツは文字もついていますので、シンガポールを旅行する前に耳を馴らすためにもお使いいただければいいと思います。今お見せしたのが口語です。

シンガポール英語モジュール「21：順序について述べる」

http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/en-sg/dmod/class/ja_21_1.html

標準のほうにも同じ人が出てきます。ただ、家、職場、友達の家などの場所によって話し方が変わります。今の口語は友達みたいにしゃべっています。標準のほうの設定はスポーツクラブのメンバーシップの更新で、知らない人と敬語を使ってしゃべるようなシーンです。こういうシーンではさっきのようにはしゃべらないわけです。一人の人の中でも話し方が変わるということですね。ここに登場するおじさんは完璧にどこの国に行っても通じる英語をしゃべっています。これが標準シンガポール英語です。ただし、ちょっと訛りみたいなのがあります。細かい発音とかイントネーションとかもありますね。銀行とか空港とか公的な場所での会話です。というわけで、口語と標準、普段のシンガポール英語と公的なシンガポール英語とはだいぶ違います。皆さんがシンガポールに行った場合、標準のほうは空港とか公的な場所で使うでしょうが、シンガポール人と友達になったりした場合は標準でしゃべると堅苦しいです。シンガポール人の友達にとっては「いつまでも敬語だなあ」と受け取られます。外国人と会話をする場合は「です」「ます」なんだろうが、いつまでたっても敬語ですと相手も構えてしまいます。それと同じことで、これが言語の実態です。

次はマレー語です。英語に口語と標準と、場面により使い分けがあったり、シンガポールの英語とアメリカの英語とあるように、マレー語にも変種というものがあります。マレー語というのはかなり広い地域で話されていて、タイの南部ではマレー語が話されています。それからマレーシアでも話されています。マレーシアで話されているマレー語をマレーシア語と呼んだりします。シンガポールでもマレー語は話されています。ブルネイという小さな国がありますが、ここはマラヤ連邦には入らずに独立国として存在していて、ここはマレー語です。それからインドネシアもマレー語です。インドネシアというのは前は存在しなかったもので、オランダから独立した時にインドネシアという国を作って、その時にマレ

一語をインドネシア語と呼ぼうということになったのです。というわけで、インドネシアという国ができたので、インドネシア語という言葉ができました。東チモールはもとはインドネシアだったので、インドネシア語が使われていますが、インドネシアから独立してしまったので、これをインドネシア語と呼ぶべきかどうか不明です。言語学者はマレー語でいいんじゃないかと言っていますが、やはりもとはインドネシア語と呼びならわしてきているので、現地ではまだインドネシア語と呼んでいるようです。そういうわけで、マレー語はかなり広い地域で話されていて、インドネシア語を勉強すればある程度マレーシアでも通じます。ただ、タイのほうはちょっと難しいです。マレーシアと違ってタイはタイ政府のやり方ですが、あまりマレー語が許される環境ではないので、タイは状況がちょっと特殊です。その他の国はマレー語がきちんと認められてしゃべられているので、だいたい通じます。マレー語には変種があって、マレーシア・インドネシアはお互に通じます。ですが、インドネシアとタイはおそらく全然通じません。インドネシアのジャカルタ方言とスラウェシ島のマナド方言になると全然違います。パプア・ニューギニア島にはパプア・マレー語というのがあります。マレー語というのは交易によって広がったので、香辛料が取れる場所には独自のマレー語が発達していったわけです。スマトラあたりにもマレー人がたくさんいます。

2.6 言語の系統

系統というのは何かというと親族関係です。祖先を辿って行くとどこに行き着くかということです。日本語の場合はよくわからないんですが、英語とドイツ語は同じグループだということを言いますね。英語とドイツ語の古い語を遡っていくと、同じ祖先になるのです。共通の祖先を持つものを同じ語族に入れます。この地域は基本的にオーストロネシア語族です。地域固有の諸言語です。オーストロネシアというのはフィリピンもそうですし、台湾の原住民語もそうですし、日本語の隣の語族です。それからオーストロアジア語族というのがあります。さっきお話しなかったんですが、半島マレーシアというのは実はマレー人が最初にいたわけではなくて、数千年辿っていくと実はここは、今カンボジアあたりにいる民族がいたと考えられています。そこに北のほうからマレー人、オーストロネシアの人たちが入ってきたと考えられているので、本当の昔にいた人たちは、カンボジアと同じ語族であるオーストロアジア語族の言語をしゃべっています。シナ・チベット語族は華語です。それからドラヴィダ語族というのはインドの言語、

タミル語、インド・ヨーロッパ語族は英語です。そういう4つの語族の言語がこの狭い地域で話されるというのはあまりありません。ちょっと異常な状況です。異常な状況というのは、一番最初にお話したような歴史的状況があつて、人が移動してきたと同時に言語も一緒に移動してきて、しかも同化せずにそのまま行ってしまうということがあるので、非常におもしろい状況が生じています。こういう状況はなかなかないと思います。ここまでが言語状況です。個々の言語はどんなものかということは一切お話しせずにここまでお話ししてきました。こういう話は言語学の分野では社会言語学でお話する内容です。これは一番親しみやすいところです。言語の細かいところにくくとみんな頭が痛くなってしまうので、私が1年生の授業で話すのはこれだけです。

資料の Ethnologue (<http://www.ethnologue.com/country/MY/maps>)の地図の説明をします。地図のオレンジ色のところはオーストロアジア語族です。Aslian と書いてあるところです。マレー半島の海側からマレー人が入ってきたので本当に最初に住んでいた原住民は今でも山奥に住んでいます。一部の人たちは現代文明に接したくないようで、電気もガスもない自分たちの昔の生活を浸食しないでくれというようにまだ続けている人たちがいます。それから、マレー半島とボルネオ島はちょっと違うわけです。ボルネオ島の西側のサラワク州はマレー半島のマレー語とだいたい同じような特徴を持っている言語です。それに対して、ボルネオ島のサバ州は違います。言語のことを考える場合、国境のことを考えてもしかたありません。言語は国境を乗り越えて渡ってしまいます。サバ州の言語はすぐ北方のフィリピンと言語構造が似ている言語です。では本当にフィリピンの言語かというところもそういうわけでもありません。マレーっぽいものもあればフィリピンっぽいものもあるという感じですが、マレー語からみれば明らかに語順が違う言語です。半島マレーシアに言語はあまりありません。言語がたくさんあるのはボルネオ島です。ボルネオ島にはオランウータンがいます。オランウータンはマレー語です。英語では一綴りですが、マレー語では orang hutan と書きます。orang=人、hutan=森で、「森の人」という意味です。マレー語は後ろに修飾語がきます。聞いた時に H の音は非常に小さいので「オランウタン」になってしまったんですね。ですから英語では orangutan と表記します。オランウータンの保護施設があるのがボルネオ島で、ほとんどが森です。日本向けの紙の原料もここが産地です。森がたくさんあつて地形が厳しいところには言語がたくさんあります。人の行き来がないので、小さな言語がお互いに他の言語の影響を受け

ずに残りやすいです。ですから、ボルネオにはたくさん言語がありますが、このうちどれくらいの言語が研究されているかよくわかりません。サバ州の一部は危険で、最近外務省から渡航注意の警告が出ています。サバ州にはフィリピンから人が来るんですが、あまり良くない人も来るんですね。現地に住んでいる人たちにとっては実際には国境はない状態です。言語は政府が統制できない問題です。で、勝手に国境を越えて行き来しますが、人は国境を越えてはいけません。国境を越えると違法になりますが、違法労働者がサバ州には大量にいます。ですから、サバ州の人口の 10%はフィリピン人じゃないかと言われています。そのフィリピン人たちが、本当に出稼ぎに来ている人たちか、違法労働者なのか定かではありません。また、違法に来ている人たちの中には、自分たちはフィリピンに属していないと思っている人たちもいます。国や国境の意識がないわけです。また、一部に国籍のない人たちもいます。ここに国境を引いてしまったために国が分かれています。民族的には一緒なので、親戚を訪ねるためにマレーシアに来る人たちもいます。彼らは海に住んで海上生活をしているので、海上を移動するのは道を歩くようなものです。なにがまずいかというと、フィリピンの南のほうはイスラーム圏です。ここが独立運動をしているので武装闘争をしている人間が混じっていたり、マレーシアから人を誘拐して身代金を要求したりということがあります。

マレーシアの言語状況というのは、一般に語られる「英語、マレー語、華語、タミル語」よりはだいぶ複雑です。シンガポールはそれで片がつくんですが、マレーシアというのは実はかなりたくさんの言語があります。その中でマレー語の話をします。

3. マレー語の言語構造

3.1 音素(1)：(単) 母音

いきなり「音素」と書きましたが、音素は音の単位ぐらいに考えてください。母音は「a, i, u, e, o」のことで、音を出す時にどこも邪魔されない音です。口を開けたまま音を出せる音を母音と言います。音素は意味の区別、弁別につながるような最小単位です。日本語の例です。

iki eki eki aki oki oki uki
 息 駅 駅 秋 沖 沖 雨季
 /i/ | /e/ | /a/ | /o/ | /u/

口の開きが違います。iki に対し uki では口がすぼまります。7つ全部「ki」がついていて物理的には音は7つありますが、意味が7つあるわけではありません。言語としては区別されてはいません。音素というのは物理的な区別ではなくて言語上の区別です。日本語の場合は5つだけ区別しますが、英語は大量に区別しますから非常に難しいわけです。英語ではもっとたくさん区別しますから全部使いわけないといけません。マレー語は母音6つで、日本語の5つの母音+*/ə/*です。ですから、勉強が簡単です。*/ə/*は「あいまい母音」と言います。がんばっちゃいけない怠けた音です。舌の位置も口の開け方もいい加減な感じです。マレー語の母音は、文字は5つしかありません。なぜかという、*/ə/*の音は「e」を使うので、「e」の文字を見たら、*/e/*の場合と*/ə/*の場合があるということです。それは日本語の「は」と一緒です。「は」の文字を見た時は、*/ha/*の場合と*/wa/*の場合があります。

3.2 音素(2):子音

子音は音を出すときに邪魔が入るやつです。唇を閉じたり、歯がどこかについていたり、舌がどこかについていたりするものです。マレー語の子音は表1の通りです。

表1 マレー語の子音

	両唇音	唇歯音	歯茎音	後部歯茎音・硬口蓋音	軟口蓋音	口蓋垂音	声門音
破裂音	p b		t d		k g	q	(ʔ)
鼻音	m		n	ɲ	ŋ		
弾き音			r				
摩擦音		f v	s z	ʃ	x ɣ		h
破擦音				tʃ ɟʃ			
側面（接近）音	w		l	j			

※イタリック体：借用子音

表で用いている文字は「国際音声字母 (IPA)」と言います。IPA は International Phonetic Alphabet の略です。q はアラビア語からの借用子音です。鼻にかかる鼻音の ɲ は「にゃ」です。日本語の「なにぬねの」の「な」は舌が上の歯の裏についています。「に」では舌の先が上の歯の裏についていない人がいますが、舌の先が上の歯の裏についていない形の「にゃ」です。書く時は「ny」と書きますが、音は n + y ではありません。「歌う」という単語 nyanyi がありますが、これは「ny」という 2 つ文字を使っていますが、音的には 1 つの ɲ です。こんなのはキーボードにはないので、しかたなく「ny」で書いています。日本人がこれを見ると「にゃ」と言いたくなるんですが、「nya」は「にゃ」ではないんですね。字のとおり読んではいけないんです。日本人は「eki」も「ɛki」も「駅」なんですが、言語によっては違う単語なんです。また、言語によって「i」と「e」の区別がなかったりしますが、日本人にとって「iki」と「eki」は「息」と「駅」であって異なる単語なんです。言語を勉強するときにこういうシステムを知っておくといいです。ŋ は最近の 18 歳 19 歳の学生は発音できません。「がぎぐげご」と言うんです。あるいは「んが」と言うんです。ʃ は「しゃ」です。x はアラビア語で「は」という音です。ɣ はぞんざいに「あがる」という時の「が」の音です。うがいをする時の「が」です。tʃ は「ちゃ」行です。dʒ は「じゃ」行です。j の文字は何かというと、「や」と発音します。以上がマレー語の音です。非常に簡単です。音が簡単というのがオーストロネシア諸語、マレーシア、フィリピン、インドネシアあたりの言語の特徴で、ハワイに行くと母音の数が 3 つとかですのもっと簡単になります。マレー語にあって日本語にないのは「にゃ」行です。あと、日本人は l と r の音の区別がよくできません。l と r の区別のある言語がほとんどだと思います。アラビア語からの借用子音のほとんどは、日本語にはありません。日本語にあってマレー語にないのは、詰まる音です。小さな「つ」の音です。多くの外国人は詰まる音ができません。日本語では詰まる音も 1 カウントですが、マレー人が発音するとカウントしません。例えば「せっちゃん」が「せちゃん」になってしまいます。以上が音の話です。

3.3 語形成

単語がどのように作られているかというのは「語形成」と言います。「語根」というのがありまして、そこに「接辞」という飾りをつけます。こうして単語ができる特徴を「膠着的」と言います。膠は「にかわ」です。糊でぺたぺたくつつ

けていくようにして言葉ができていく言語ということです。日本語ですと後ろに
 どんどんつけていきます。「接尾辞」です。

食べさせられなかった

食べ（語根）-させ-られ-なかつ-た

マレー語は、語根の前、後ろ、ときどき中にもついてきます。基本的には「接
 頭辞」です。頭につくものがけっこうあります。マレー語の単語はけっこう長く
 なります。日本語も長いですが、ローマ字ではなくひらがなで書いたり漢字を使
 ったりするので短くなります。以上が単語の作り方です。

3.4 語順

逐語訳 (gloss) を手がかりにして、次の文の意味とマレーシア語の語順を考
 えましょう。

1. Ali tinggal di Melaka.
 アリ（人名） 住む に マラッカ（地名）

Ali（アリ）はマレーシアでは男性の名前です。「マラッカにいるアリさんは住
 んでいます」という文ではありません。「マラッカにいるアリさんは住んでいま
 す」はそれはそれで面白いです。難しい話で、これは理論言語学ですが、そうい
 う言語が存在するかどうかです。人間の言語でそういうことがはたして可能かと
 いうことです。同じ概念というものは言語上でも隣同士で出てくるわけです。た
 だ、同じ概念なのに言語でばらばらなところに出てきてしまう言語は、人間の言
 語として可能なのか、世界に一つでも存在するのかということは理論言語学上の
 問題です。そして存在します。オーストラリアの言語でそういうものが出てきま
 す。なぜ存在するのか、なぜそのようなことが可能なのかは大きな問題です。ど
 ういう仕組みになっていたらそういう言語が可能なのかです。

この文は Ali=主語、tinggal=述語です。英語ですと、主語にあわせて動詞が
 形を変えなければいけないのですが、マレー語はそれはないです。全部同じ形を
 使います。文の意味は「アリはマラッカに住んでいます」です。でも、「アリは

マラッカに住んでいました」かもしれませんし、「アリはマラッカに住みます」かもしれません。時制はありません。現在でも過去でも未来でもいつのことでも全部動詞は同じ形です。

それから、前置詞句。「前置詞句」は前置詞と名詞句から成っていて、「マラッカに」というところだけ取り出してみると、「に マラッカ」となって、日本語の語順とは逆になります。自動詞句も、動詞のあとに前置詞で、日本語とは逆です。日本語は「マラッカに住んでいる」となって、動詞が後に来ます。マレー語は「住む に マラッカ」です。マレー語は後ろから前に訳せばいいです。英語の場合、例えば「good morning」のように形容詞は名詞の前で、この場合は左から訳しますが、マレー語は「morning good」です。

2. Dia sedang mem-baca se-buah buku tentang bahasa Jepun.
彼 [進行] 能動-読む 1-冊 本 について 言語 日本

[進行]は、「～している」です。se=数字の1です。buah=冊です。日本はJepunと言います。このJepunはおそらく福建語から来ていると思います。証拠はないんですが、日本との接触は中国のほうが早いはずなので、そこからマレー語に入ったのではないかと推測します。インドネシア語では、日本=Jepangです。Jepangはどこから来たのかわかりません。ちなみにマレー語のnとngは意味が違います。hutan=森ですが、hutang=負債の意味で全く違う単語になります。マレー語のJepunは、福建語の「日本」がnで終わるので、福建語から来ているのかなと思います。訳は「彼は日本語についての本を読んでいます」です。これも全部右から左へと読みます。

3. Bahasa Jepun adalah mata pelajaran yang paling
言語 日本 である 教科 [関係詞] 最も
di-suka-i-nya.
受動-好む-他動化-彼

adalah=～である、mata pelajaran=教科、です。mataは目、pelajaranは学習です。「学習の目」と書いて「教科」です。「科目」と書けばよかったかもしれませんが。yangは英語のthatのような関係詞です。マレー語では代名詞ではな

いので「関係詞」と書きました。日本語には yang のようなものはありません。paling=最も。di-suka-i-nya の di-は受動のマーカース。suka は語根で「好む」、-i は他動詞にするものです。-nya は「彼」です。

「関係節」は英語、ドイツ語、フランス語と同じです。adalah 「～である」という be 動詞のようなものが出ています。文法は英語がわかっているれば全然難しくありません。マレー語は単語を覚えるんです。この文の意味は、「日本語は彼が最も好きな教科です」です。マレー語文では「彼に最も好かれている」と受動態が用いられています。これは、関係節中の動詞の形がマレー語では日本語よりも強く制限されているためです。

4. Dia fikir (bahawa) lelaki tinggi itu orang Jepun.

彼 考える と 男 背が高い その 人 日本

bahawa=that です。lelaki tinggi で「背の高い男」。名詞＋形容詞の語順です。英語の that 節のように、bahawa 節は動詞の後に続きます。全体では、「彼はその背の高い男は日本人だと考えている」という意味です。

語順をなんとなくわかっていただけたと思います。英語がわかる人でしたら、ぱっとわかります。英語のつもりで読めばわかります。むしろ、フランス語やイタリア語やスペイン語がわかる人でしたらそのままです。それをマレー語の単語に置き換えればいいだけです。ですから、マレー語の語順はほぼフランス語なんですね。イントネーションもフランス語と似ています。そして、マレー語というのはけっこうぼそぼそしゃべります。インドネシア語は口を大きく開けてはつきりしゃべりますが、マレーシア語は早くぼそぼそしゃべります。

3.5 句構造

ちょっと難しい話をします。「句構造」について話します。「句」とは何かというと、単語がいくつかあるものを「句」と言います。その中で一番大切なものを句の「主要部」と言いますが、句の主要部の品詞が○○だったら○○句、となります。名詞が中心だったら名詞句、となります。「赤い花」というのは名詞句です。なぜかという、赤い花というのは花の一種であって赤の一種ではないからです。動詞が中心であれば動詞句です。「ご飯を食べる」というのはご飯の扱い方ではなく、食べる行為についての句なわけです。何を食べるか？→ご飯を食べ

る、ということですから動詞が中心です。そういうのを動詞句と言います。「ご飯を」という部分は「補部」と言います。これは言語理論上の用語です。名詞句というのは日本語とマレー語は正反対です。

buku tentang bahasa Jepun

日本語についての本

前に置くものは前置詞句、後ろに置くものは後置詞句と言います。日本語は後置詞を使う言語で、マレー語は英語と一緒に前置詞を使う言語です。名詞句だったら名詞、動詞句だったら動詞、前置詞句だったら前置詞、「〜と」というのが左に来るのがマレー語の性質です。日本語は逆なわけです。マレー語や英語のようなものを「主要部先行型の言語」と言います。マレー語、英語、フランス語、スペイン語、あと東南アジアの国語はビルマを除いて全て主要部先行型の言語です。日本語のタイプは全く正反対で、主要部が後にくるタイプで、主要部末尾型の言語です。主要部が先にくるか後にくるかという違いがあります。以上が今日の内容です。

4. むすび

最後に、ネイティブがマレー語をしゃべるとどうなるかというのを聴きます。ヤスミン・アフマッド監督の『タレントタイム』(2009年)というマレーシア映画を見ます。なぜこの映画をお見せしたいかということ、マレーシアの言語状況がよくわかります。いろいろな言語が飛び交うんです。みなさんがいくつの言語を区別できるかわかりませんが、とにかくいろんな言語が飛び交って、英語があったり華語(広東語)があったり、タミル語も出てきます。学生にタミル文字を見せると「これマレー文字ですか?」と言われますが、マレー文字なんてありません。

それから、マレー人と華人がマレー語をしゃべっているシーンがあります。このときには、マレー人はマレー人同士で用いるマレー語とは少し違った話し方をしています。映画の中に、今日お話したマレーシアの言語が出てきます。字幕がないので、私自身も何を言っているのかよくわかりません。でも、これがマレーシア人の状況でしょう。すべての人がすべての人の言葉をわかるわけではありません。わからない言語がけっこうあるわけです。マレーシア人がこの映画を見ても、わからないものはわからないんです。人間には自分がわからないものに対し

て、敵意のような感情を抱いて、それを排除したがる特性があるようです。それは言語についても同様で、日本人は、わからない言語をしゃべっていると敵意を持つことがあります。マレーシア人は、わからないものはわからないので、それでいいんです。そういう言語状況です。以上で終わります。(了)



マレーシア（左）、インドネシア（右）のハラールマーク

… * ◆ ————— ◆ * …

マレーシアと関わる上で必ず心得ておかねばならないのが、イスラームに関する事柄だ。イスラームの実践のされ方は国や地域、また個人によって異なり、厳密なあり方から名ばかりのムスリム（イスラーム教徒）までさまざまだ。その中で、マレーシアは一般的に言って、最も厳格な部類に属するのではないかと思う。信教の自由は保証されているものの、イスラームが国教だ。そして、人口の約半数を占めるマレー人はすべてムスリムだ。信じがたいかもしれないが、「ムスリムであること」がマレー人の定義の一つとなっている。しかも、これは不文律の慣習などではなく、憲法でそう決まっている。

イスラームは、日本人にとって長く馴染みの薄いものだったが、昨今、この状況が大きく変わりつつあることは誰にも感じ取れることだろう。主に、観光や国際ビジネスの分野で話題に上がることが多い。人口3億人を有する大国、インドネシアは新たな巨大マーケットとして日系企業の進出先として注目の的だ。（余談だが、外国語学習・教育の世界ではこの動きに呼応する、インドネシア語への意識変革はほとんど見られない。そのことに関する私見はここでは控えることにしたい。）インドネシア人の大半はムスリムだ。インドネシア、マレーシアや他のイスラーム諸国からの観光客をどう「おもてなし」するかを考えると、必然的に食事に関する戒律に話が進む。

「ハラールフード」ということばはどこかで耳にしたことがあるだろう。ムス

リムにとって許された―「ハラール」な食べ物そう呼ぶ。大雑把に言えば、豚肉やアルコールを含んではならない。ただ、事はそんなに単純でなく、調理や輸送の過程や食事を提供する際に用いる食器類にまでこだわらなければならない。「ハラールフード」には、このように目の行き届かない部分が多く関与する。そこで生まれたのが、「ハラール認証」とそれを行う機関だ。認証を行う機関は世界で共通ではなく、複数ある。例えば、マレーシアではマレーシア・イスラーム発展庁 (Jabatan Kemajuan Islam Malaysia、通称 JAKIM) が、インドネシアではインドネシア・ウラマ評議会 (Majelis Ulama Indonesia) がハラール認証を取り仕切っている。日本にも、日本ハラール協会というのが存在する。数あるハラール認証の中で、マレーシアの認証は最も厳しく、そのため、信頼のおけるものと考えられている。ハラール認証を受けた製品には写真のようなハラールマークが付される。

ハラールマークが付いていれば、基本的にハラールであることが証明され、問題が起これないかという、そうではない。認証機関が複数あるので、例えば、A 国の認証機関は基準が緩いので、実はハラールではない、のように考える人たちが出てくる。ところで、ハラールではないものの、ハラールを目指しているという意味合いで「ハラール推奨」という用語が存在する。A 国の「ハラール」は B 国の基準からしたら、「ハラール推奨」に過ぎないだろうという理屈だ。それから、同一国の認証機関によるものでも、マークに疑念が寄せられるケースがある。「偽ハラールマーク」の問題だ。紙幣と違い、ハラールマークは単純なものが多く、誰でも偽造できてしまいそうだ。では、どのように本物と偽物を見分けるかだが、マレーシアで実際にあった説は、色によって見分けられるという説だ。(実際には、色は商品に合わせられるようだ。)最後に、認証は受けていても実際にはハラールではないのではないかと疑われるケースもある。認証に従うのには、コストがかかる。だから、問題にならないだろうと思われる細かい点で、ハラール基準への準拠を省いてしまっているケースも実際にあるという。また、単に消費者がそう思っているだけというケースもある。後者の場合、風評被害にもつながりかねない。

日本に在住していたり、日本を訪問するマレーシア人ムスリムの行動を観察していると、ハラールフード問題で肝心なのは結局、「知識」と「信頼」だと言ってよさそうだ。かなり事細かにハラールに気をかけていて、外食もほとんどしないような人が、ある特定の確実にハラールではない商品を扱っている店に頻繁に

通っていることがある。その人は、その店の決まった商品には信頼を寄せていて、安心して食べることができるのだろう。非ムスリムの日本人がムスリムを食事に誘ったり、食べ物のお土産をあげるときにも「知識」と「信頼」の2つが重要だ。まず、どのような物がハラールでないかを知ること。例えば、料理酒やゼラチン、ショートニングは見落としがちのところだ。それから、自分が相手の食べ物を気にかけていることを積極的に伝えること。「この店は大丈夫か？」とか、「このお菓子の原料は～だ」のようなことを話すだけでも違う。私は、食べ物をプレゼントするときには、なるべく説明が簡単なものをあげるようにしている。スーパーの棚にある9割以上は材料的に無理で、その中には「あげたい！」と思わせる魅力的な食べ物もあるわけだが、相手が疑って食べてくれず、ゴミ箱行きになってしまつては、元も子もない。

マレーシアとマレーシアの言語を知るための3冊

・ * ・ ... † ... ・ * ・ * ・ ... † ... ・ * ・ ... † ... ・ * ・ ... † ... ・ * ・



今井昭夫（編集代表），東京外国語大学東南アジア課程. 2014.
『東南アジアを知るための50章』明石書店.

マレーシアに関する概説書としては、水島司（編）『暮らしがわかるアジア読本 マレーシア』（河出書房新社、1993年）、綾部恒雄・石井米雄（編）『もっと知りたいマレーシア』（弘文社、第2版、1994年）があります。これらは良書ですが、政治・経済・言語の最近の動向を知ることにはできません。ですので、マレーシアに特化した書籍ではありませんが、『東南アジアを知るための50章』の関係する章と各国概要のマレーシアの部分をお奨めします。

... * * ◆ ◆ * * ...

宇高雄志, 2008. 『住まいと暮らしからみる 多民族社会マレーシア』南船北馬舎.

著者は建築学者で、住まいという観点からマレーシアの人々の日常の生活を描き出しています。



... * * ◆ ◆ * * ...



ファリダ・モハメッド, 近藤由美. 2005. 『CD エクスプレス マレー語』白水社.

本学教員のファリダ先生が執筆した教科書です。マレー語を初めて勉強する人にはこれがお奨めです。同著者による『ニューエクスプレス マレー語』（白水社、2010年）はこれよりレベルが高く、2冊目の教科書として、あるいはかなりできる人の補助教材として有用です。

... * * ◆ ◆ * * ...

平成 26 年度 東京外国語大学オープンアカデミー

東京外国語大学語学研究所 企画

『言葉とその周辺をきわめる -3- 』

2014 年 10 月 14 日（火） 第 2 回

「中国語好み」の表現 一名詞的表現と動詞的表現」

東京外国語大学教授

加藤 晴子

0. はじめに

第 2 回を担当する加藤晴子です。よろしくお願いします。

今日は、名詞的表現と動詞的表現というタイトルをつけましたが、全体の大きな枠組みとしては、日本語と中国語の対照研究の一部をなすことになろうかと思います。

対照言語学というのは、言語の系統に関わりなく、つまり、親戚関係の有無に関わらず、任意に複数の言語を取り上げて比べ、その間の相似・相違を探究しようという分野です。比べるのは言語に関する様々な分野、音声、語彙¹や文法²、まとまった談話の構成の仕方³、語用や言語行動⁴など、それぞれについて対照研究のテーマになり得ます。

今日は、その中でも、文法的に間違いとまでは言えないが、あまりそうは言わない、どちらかというこのように言う、といった表現の選択の違いについて取り上げます。少し微妙な点もありますので、個別の例については、あるいは人により意見の分かれるものがあるかもしれませんが、選択の傾向を見たときに、日本語は名詞的表現を多用し、中国語は動詞的表現をより選択する、といえるのではないか、というお話です。

この、タイトルにも掲げた、名詞的表現、動詞的表現は、それぞれ以下のようなものを指します。

¹ 親族名称で父方母方、年上南下を区別するか否かや日中同形語の異同について、特定の副詞、接続詞について、など。

² “了 le”と「タ形」の関係についてや受け身の表現の違い、など。

³ 主語の省略の仕方、人称代名詞、指示代名詞による指し方の違い、など。

⁴ 誘いに対する断り方や話題の選び方、など。

(1) a 名詞的表現 富士登山

b 動詞的表現 富士山に登る〔こと〕

厳密には「こと」がつけば全体を名詞性フレーズとしていることになりませんが、ここでは(1a)との違いを重視して、(1b)を動詞的表現とします。このほか、名詞的表現には、連体修飾節を持つ名詞フレーズや「体言止め」を含め、動詞的表現には、連用修飾節を持つ動詞フレーズなども含めます。

今日のお話の主旨は、これら2種の表現のうち、日本語では名詞的表現が多用されるのに対し、中国語では動詞的表現が多用されることを示し、この違いを、日本語と中国語の、類型論的タイプや基本語順の異なり、動詞の性質の違い、その他の要因と関連づけて考えるところにあります。私自身の発見を述べるというよりは、主に先人のご研究の成果をご紹介しますということになるかと思いますが、いくつかの研究成果をまとめて見渡すことで、浮かび上がってくるものがあると考えます。

さて、中国語において、日本語よりも動詞的表現を多用するという時、そこには、日本語では不要と思われる動詞を追加する場合と、日本語とは全く異なる表現をする場合とが含まれます。

以下ではまず、動詞の追加について見ることにします。

1. 動詞の追加

1.1. 好き嫌いなど

以下の日本語に相当する中国語では、通常、日本語には現れない動詞が使われます⁵。

(2)中華料理が好き→喜欢吃中国菜〔中華料理を食べるのを好む〕

(3)ピアノを練習する→练习弹钢琴〔ピアノを弾くのを練習する〕

(4)授業を始める→开始上课〔授業をするのを始める〕

(5)中国語が上手→汉语说得很好〔中国語を話すのが上手〕

⁵ 中国語の例文には〔 〕内に直訳に近いものを示しました。追加された動詞など動詞的表現と直訳内のそれに相当する箇所の下線を引いたほか、必要に応じてポイントになる名詞的表現に破線の下線を引きました。また、文法的に成立しない例に「*」を、文法的に間違いとまでは言えないがそうは言わないという例には「?」をつけました。これ以降の例文も同様です。

(6)彼はおしゃべりだ→他爱说话〔彼は話をするのを好む〕

(2)～(5)は、日本語では「中華料理」「ピアノ」「授業」「中国語」などの名詞が直接、「好き」「練習する」「始める」「上手」の主語または目的語⁶になっているのに対し、中国語では、あいだに「食べる」「弾く」「する」「話す」などの動詞が加わっています。加えずとも間違いとは言えませんが、何か物足りない感じがすると言われます。また、考えようによっては、「中華料理が好き」と言っただけでは、「食べるのが好きなのか」「作るのが好きなのか」わからない、といった理屈も成り立ちますね。

(6)は慣用句で「話好きだ」に近い表現ですが、やはり「話をする」というような動詞性フレーズが使われています。

中国語でこれらの表現に頻繁に動詞が加わるのには、中国語の文法上の特徴が関わります。つまり、中国語では、動詞性フレーズがそのままの形で主語や目的語になりうるのです。朱 1985 から例を挙げてみることにします。

▶ 中国語では動詞性フレーズがそのまま主語・目的語になる【朱 1985】

英 語：To fly a plane is easy. (to 不定詞)

Flying a plane is easy. (ing 形)

中国語：开飞机容易。

开	飞	机	容	易。		は	やさ	しい
┌——主——┐ ┌ 述 ─┐					↑			
└動┘ └ 目 ┘						飛行機を操縦する〔の/こと〕		

上の例では、図示をつけ加えました。四角い枠を作って、その中に「飛行機を操縦する」をはめ込むような形で示しています。「飛行機を操縦する」は“开飞机”ですが、「飛行機を操縦するのはやさしい」の中の「飛行機を操縦する」も“开飞机”で、形の上での変化はありません。英語では動詞性フレーズを主語の位置に置く場合、to 不定詞にしたり、ing 形にしたりする必要があるのとは異なることがわかります。

⁶ ここでの「主語」「目的語」という呼び方は、中国語的な見方をしたものとして使っています。

喜欢吃中国菜。(=(2))

喜欢 吃 中 国 菜。

「動」 「——目——」

「動」 「目」

□を好む

↑

中華料理を食べる〔の/こと〕

同様に、「中華料理を食べる」は“吃中国菜”ですが、「中華料理を食べるのを好む」の中の「中華料理を食べる」も“吃中国菜”で、形の上での変化はありません。英語では、動詞性フレーズを目的語の位置に置く場合にも、to 不定詞にしたり、ing 形にしたりする必要があるのとは異なることがわかります。(2)～(6)を通して、〔 〕内の直訳で「～の」が動詞に後接している通り、動詞性フレーズを主語や目的語の位置に置く場合、「～の」や「～こと」が必須となる日本語とも、中国語は異なることがわかります。このような性質が、中国語で動詞を追加しやすくしているものと考えられます。

1.2. 変化

次に、変化の表し方における違いを見てみましょう。以下の日本語に相当する中国語では、通常、日本語には現れない動詞が使われます。

▶ 変化の表し方の違い【井上 2006, 2012】

日本語：「～なった」という言い方で「結果」のみを言って変化を表す。

中国語：「動作」と「結果」の組み合わせで変化を表す。

(7)きれいになった→洗干净了〔洗ってきれいになった〕

(8)お腹が一杯になった→吃饱了〔食べてお腹が一杯になった〕

(9)酔っ払った→喝醉了〔飲んで酔っ払った〕

(7)～(9)は日本語では「きれいになった」「お腹が一杯になった」「酔っ払った」と変化の結果のみを言うのに対し、中国語では「洗って」「食べて」「飲んで」と、どのような動作をした結果そのように変化したのかを言っています。井上 2006, 2012 によれば、日本語では「～なった」という言い方で結果のみを言えば変化を表すことができるが、中国語では、動作と結果をつな

げて提示することで、変化を表す必要がある、そしてこの違いは、時制を言語形式で表現し、時間軸との関わりを有する日本語と、そうでない中国語⁷との違いであると述べています。日本語の方はアニメを見ているような感じですね。アニメでは、服の汚れが段々薄くなって消えていく様子を直接見せることができます。服がきれいになったということがアニメーションでわかるわけです。中国語の方は、一コマずつ動画のコマを見せるような感じでしょうか。洗濯をしているところのコマがあって、その次にきれいな服のコマを見せて、それによって服が汚れていたから洗濯してきれいになったという変化を理解させるのです。

ただし、井上 2006, 2012 も指摘するように、濡れているモノがいずれ乾くように、放っておいても勝手にそうなるとなるような変化の場合は、結果のみでも表せるようです。

(10)衣服干了〔服が乾いた〕＝衣服晒干了〔服が干して乾いた〕

井上 2006, 2012 が述べる、日本語が時制を表現し時間軸との関わりを有するとは、動詞で言えば、日本語の動詞はそれ自身に時間の推移がセットされていて、動作の初めから終わり＋結果までを含んでいるということです。中国語の動詞は日本語の動詞とは異なり、時間的推移や結果を含みません。そのため、(11)のような表現が可能であると指摘されています。

▶ 動詞の性質の違い：中国語では動詞に結果が含まれない【荒川 1982】

(11)买了，但是没买到〔?買ったが買えなかった〕

(11)で“买了”は、とにかく「買う」という動作を抽象的に言うのみで、何かしらの経過があって最後に商品と金銭の交換が実際に行われたということは意味しません。(11)は買おうと思って店に入ったが、品物がなくて、あるいは、お金が足りなくて買えなかったことを表現できるのです。日本語では「買った」と言えば、お金を払って商品を手に入れたことになりますね。

⁷ 中国語は過去形・未来形がありません。ただしそれは、明示的に時制を示す形式を持たないというだけであって、時間を表せないということではなく、必要がある時には昨日とか、来週とか、時間を表す言葉を添えて、いつのことかを表します。

つまり、日本語では、動作は動作のみで完結し、結果は結果のみで完結するので、必ずしも両者がセットにならないのに対して、中国語では、動作のみ、結果のみでは完結しないので、常にセットであることを念頭に使われるということなのです⁸。

時間的推移や結果を含まないという、このような中国語の動詞の性質は、中国語の動詞が、抽象度が高い、パターン化された動きを表すことにつながります。

▶ 動詞の性質の違い：中国語の動詞は抽象度が高い→パターン化された動きを表す

(12)吃饭〔ご飯を食べる→食事する〕, 走路〔≠道を歩く→歩行する〕

(13)きる：モノが二つ以上に分離されているという結果を重視

→切（包丁で）、剪（はさみで）、斩（剣で）、砍（斧で）、割（鎌で）、
锯（のこぎりで）

(14)擦：平面に沿って行き来させるという動きを重視

→（窓を）磨く、（汗を）ぬぐう、（油を）塗る、（黒板を）消す、
（テーブルを）拭く、（大根を）おろす

(12)は、「ご飯を食べる」「道を歩く」といった具体的な動作を表すというよりは、より抽象的な「食事をする」「歩行する」といった意味を表します。そのことは例えば、相原他 1992 が指摘するように、“走路”が道路上でない場所を進む場合にも使われることから推測できます。

また、(13)と(14)は、一見正反対の様相を呈しているように見えます。つまり、(13)では日本語の 1 つの動詞に中国語の複数の動詞が対応しているのに、(14)では日本語の複数の動詞に中国語の 1 つの動詞が対応しています。

(13)と(14)の違いは、日本語では、動作によって意図される結果ごとに 1 つの動詞をあてるのに対し、中国語では、同じ動きに見える動作を 1 つの動詞にまとめる、という違いに起因すると考えられます。日本語の「意図される結果ごとにまとめる」とは、最終的にモノが二つ以上に分離されていれば、そこにいたるのが、手先の前後動か、全身の上下動か、など、どのような動

⁸ このことが中国語文法でいう「補語」を発達させたものと考えられます。

きかは問わずに1つの動詞「切る」で表すということを意味しています。

一方、中国語の「同じ動きに見える動作をまとめる」とは、例えば「窓を磨く」と「黒板（に書かれた字）を消す」とをパントマイムで表現しようとすると、どちらも、体の前で手のひらを広げ平面に沿って行き来させる、同じような動きになるものと予想されます。この動きをしながら前にかがみ、垂直の面でなく水平な面に対しての動作にすれば「テーブルを拭く」になりますね。このような場合1つの動詞“擦”にまとめてしまうということです。

1.3. 移動

移動の表し方にも日本語と中国語で違いが見られます。以下の日本語に相当する中国語では、通常、日本語には現れない動詞が使われます。

▶ 移動の表し方の違い【高橋 2006】

日本語：移動物が人間であれば、特に必要がない場合、どのように移動したかは言わない。

中国語：移動物が人間であっても、移動の「方法」と「方向」の組み合わせで移動を表す。

(15)誰かが洞窟から出てきた

→有人从山洞里面走出来了〔?誰かが洞窟から歩いて出てきた〕

(16)瓶が洞窟から流れ出てきた

→有一个瓶子从山洞里面流出来了〔瓶が洞窟から流れ出てきた〕

(15)では、日本語では「出てきた」のように、移動の方向「出る＋くる」のみ言うのに対し、中国語では「歩いて出てきた」のように、移動の方法「歩く」と方向「出る＋くる」を合わせて言っています。一方、(16)では日中どちらも移動の方法「流れる」と方向「出る＋くる」を合わせて言っており、違いが見られません。高橋 2006 によれば、それは、(15)が自ら動くことができるモノの移動を言うのに対し、(16)が、通常、自らの力では動くことができないモノの移動を言うためであるとのこと。確かに、「?誰かが洞窟から歩いて出てきた」というと、本当は這って出てくると思ったのに歩いて出てきた、など、独特のニュアンスが入り込むような感じがします。「誰かが

洞窟から這って/走って出てきた」ならばそれほど奇妙でもないで、「歩く」が人間の移動としては通常で、「這う」や「走る」はそうではないという事情も絡むのでしょうか。一方「?瓶が洞窟から出てきた」というとどうでしょうか。私の感じでは、何か、瓶から手足が生えて、擬人化された瓶が自分で歩いて出てきたような、これも奇妙な感じがしますが、いかがでしょうか。

1.4. 感情表現

中国語では、感情を表現する際も、感情を表す形容詞のみを使うのではなく、「～と感じる」という意味を表す動詞をとともに使うことが多いという指摘があります。

▶ 感情の表し方【大河内 1997】

(17)お役に立てれば嬉しいです

→如果多少有用的话，我将感到非常高兴。[…とても嬉しく感じます]

(18)仕事をしている方が遊んでいるより楽しいです

→工作比玩儿更感到愉快。[…ずっと楽しく感じます]

ここでも、中国語では、通常、日本語には現れない動詞が使われることになります。

また、中国語で動詞が優勢であることを示すこととして、大河内 1997 は、中国語には感情を表現する形容詞がもともと少ないという指摘もしています。

▶ 中国語には感情を表現する形容詞が少ない【大河内 1997】

日本語：悲シム、楽シム、喜ブ、苦シム、痛ム（動詞）

悲シイ、楽シイ、ウレシイ、苦シイ、痛イ（形容詞）

中国語：怕，恨，怪，愁，喜欢，怀念，想念，讨厌（目的語を取る）→優勢

苦，闷，急，高兴，愉快，欢喜，舒服（目的語を取らない）

大河内 1997 によれば、日本語では、様々な感情・感覚について、動詞と形容詞の両方がペアをなして存在するが、中国語では、目的語を取る、つまり動詞タイプの“怕〔恐れる〕”“恨〔憎む〕”“怪〔怪しむ〕”“愁〔憂える〕”“喜欢〔好む〕”“怀念〔懐かしむ〕”“想念〔懐かしむ〕”“讨厌〔嫌う〕”など

のほうが、目的語を取らない形容詞タイプの“苦〔苦しい〕”“闷〔鬱陶しい、気がふさぐ〕”“急〔慌てる、焦る〕”“高兴〔嬉しい、楽しい〕”“愉快〔楽しい〕”“欢喜〔楽しい〕”“舒服〔気分がいい〕”などより優勢であるとしています。

また、動詞的表現が本来的である現れとして、動詞に助動詞をつけて形容詞としたものが少なくないことを挙げています。

▶ 動詞に助動詞をつけて形容詞形にしたものも多い【大河内 1997】

可怜，可笑，可爱，可怕，好受，好过，难过

中国語の“可怜〔かわいそう〕”“可笑〔おかしい〕”“可爱〔かわいい〕”“可怕〔こわい〕”などは、“怜〔憐れむ〕”“笑〔笑う〕”“爱〔いつくしむ〕”“怕〔恐れる〕”など、もともと動詞であるものに“可”がついて成立したものです。“好”や“难”をつけるものもあり、“好”は「好む」ではなくて「～しやすい」という意味，“难”は逆に、「～しにくい」という意味です。“好受”は、文字通りだと〔受けやすい〕ということですが、「気分がいい、気持ちがいい」という意味です。“好过”は、“过”が「過ぐす」という意味ですので、〔過ぐしやすい〕というところから、やはり「気分がいい、気持ちがいい」というような意味で使われます。“难过”は「過ぐしにくい」ということですが、「辛い」とか「苦しい」という意味の形容詞になっています。このように、中国語では感情表現をするにも、動詞を使うのが優勢であり、更に、感情を表す形容詞がそもそも少なく、動詞由来のものが多いのです。

2. 全く異なる表現

2.1. 修飾節を動詞性フレーズの連続に

日本語では連体修飾節に動詞が含まれることがしばしばありますが、そのままではうまく中国語にできないこともあります。例えば(19)(20)です。

(19) 着る服がない

→a*没有穿的衣服

→b 没有衣服穿〔服がない、着るための〕

(20)映画を見に行く時間がない

→a?没有去看电影的时间

→b 没有时间去看电影〔時間がない，映画を見に行くための〕

(19b)(20b)の中国語の表現は、いわゆる「後ろから前の名詞を修飾している」とされるもので、構造的には、動詞性フレーズの連続となります。
(19b)(20b)は次のように分析されます。

▶「後ろから修飾」＝動詞性フレーズの連続

(19)b=没有衣服〔服がない〕＋穿〔着る〕

(20)b=没有时间〔時間がない〕＋去〔行く〕＋看电影〔映画を見る〕

(19b)は2つの動詞性フレーズの連続、(20b)は3つの連続になります。

日本語の小説を中国語に翻訳する際も、そのままの表現ではうまく翻訳できないことがあります。日本語にしばしば見られる、長く複雑な連体修飾節は、その1つです。「長く複雑な連体修飾節」とは、修飾節内に動詞を含み、その動詞が被修飾語と何らかの意味的関係を持つようなものを指します。

(21)近所の店で買ったお菓子を持っていく

→在附近的商店里买一些甜品带走〔近所の店でお菓子を買って持っていく〕

(22)私は昨日街で買い物をしている王君を見かけた。

→a?我昨天在街上看到了在买东西的小王。

→b 我昨天在街上看到了小王在买东西。〔…王君が買い物をしているのを見かけた。〕

(23)お寺の外には紅葉を見に来たたくさんの人がいる

→寺庙的外边有很多人来看红叶〔お寺の外にはたくさんの人がいて紅葉を見に来ている〕

(21)の日本語は「近所の店で買った」が「お菓子」を修飾し、「買った」は「お菓子」との間に「お菓子を買った」という関係を持っています。そして「近所の店で買ったお菓子」全体が「持っていく」の目的語になっています

が、対応する中国語では、「近所の店でお菓子を買う」という動詞目的語フレーズをまず述べ、その後に「持っていく」という動詞性フレーズを連続させています。

(22)の日本語は「買い物をしている」が「王君」を修飾し、「買い物をしている王君」全体が「見かけた」の目的語になっていますが、対応する中国語(22b)では、「王君」を「見かけた」ことをまず述べ、その後に「買い物をしている」という動詞フレーズを連続させています⁹。

同じように(23)の日本語は「紅葉を見に来た」と「たくさんの」が「人」を修飾し、全体が「いる」の主語になっていますが、対応する中国語では、「たくさんの人がある」と先に述べておき¹⁰、その後に「紅葉を見に来る」という動詞フレーズを連続させています¹¹。

中国語でこのような表現を使うのは、中国語では基本語順の制約から、長く複雑な連体修飾節が使いにくいためであるという理由が考えられます。

▶ 長く複雑な連体修飾節は中国語では使いにくい【木村 1996】

(24)基本語順が SOV, 修飾語が前の言語：

主語 + ……修……飾……語…… + 目的語 + 動詞
 └───近接───┘

(25)基本語順が SVO, 修飾語が後ろの言語：

主語 + 動詞 + 目的語 + ……修……飾……語……
 └──近接──┘

(26)基本語順が SVO, 修飾語が前の言語：

主語 + 動詞 + ……修……飾……語…… + 目的語
 └──────────隔たり──────────┘

木村 1996 が示す通り、(24)のように基本語順が SOV で、修飾語が被修飾語の前につく言語の場合、O の前に長い修飾語がついたとしても、O の直後に V が来ることになり、動詞と目的語との関係を捉えるのにそれほどの労力

⁹ 中国語文法では、(22b)は、“小王”が“看到”の受動者と“在买东西”の動作者とを兼ねている「兼語文」であると説明されることがあります。

¹⁰ 中国語では存在を表す時、存在する人・事物は存在を表す動詞の後に置かれ、目的語として扱われます。

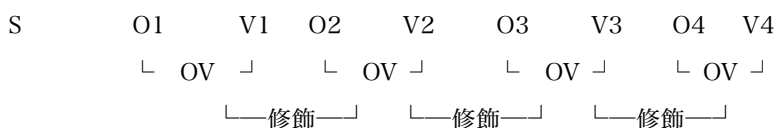
¹¹ (22b)と同じように(23)の中国語の文も、“很多人”が“有”の動作者(構文的には“有”の目的語とされる)と“来看红叶”の動作者とを兼ねていると説明されることがあります。

は必要としません。日本語はこのタイプの言語です。

一方、(25)のように基本語順が SVO で、修飾語が被修飾語の後につく言語の場合、O の後に長い修飾語がついたとしても、O の直前に V があり、これも動詞と目的語との関係を捉えるのに特に労力は必要としません。

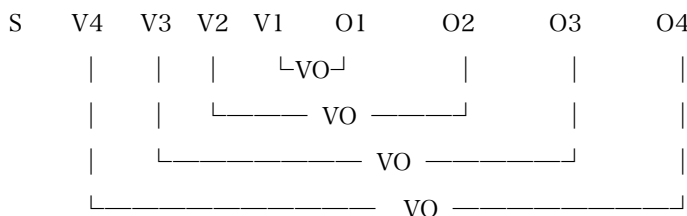
ところが、中国語は上のいずれでもなく、(26)のように基本語順が SVO で、修飾語が被修飾語の前につく言語です。そのため、O と V との間に修飾語が割り込むことになり、修飾語が長くなると、O と V との距離が離れ、関係を捉えるのに大きな労力が必要となります。(27)も木村 1996 からの例です。

(27)子供たちは、自転車を盗んだ教師を捕まえた学生を殴った警官を見つ



け出した。

→*孩子们 找到 揍 抓住 偷 自行车 的 教师 的 学生 的 警察。



(27)の日本語の文では、「自転車を盗んだ」「教師を捕まえた」「学生を殴った」「警官を見つけ出した」がそれぞれ近接しており、その理解から「自転車を盗んだ教師」「教師を捕まえた学生」「学生を殴った警官」と、順を追って理解していくことができます。

一方(27)の中国語の文では、“找到”“揍”“抓住”“偷”と動詞だけが4つ並んだ後に、“自行车”“教师”“学生”“警察”の4つの名詞が連体修飾節をマークする“的”を挟んで羅列されています。内側から順に外側に向かって動詞と目的語の関係が展開されていき、その関係を理解するのはほぼ不可能です。これを何とか理解できる文にするためには、例えば(28)のように、動詞と目的語の4セットをバラバラにし、それぞれ主語を補った上で、時系列

に沿った動詞性フレーズの連続として表現することになるでしょう。

(28) 教师偷了自行车，学生抓住了那个老师，警察揍了那个学生，孩子们

S2 V1 O1 S3 V2 O2 S4 V3 O3 S

找到了那个警察。

V4 O4

〔教師が自転車を盗み，学生がその教師を捕まえ，警官がその学生を殴り，子供たちがその警官を見つけ出した。〕

(27)は極端な例であるとしても，実際の中国語の小説にも，(29)のような例がないわけではありません。

(29)a 他无法见她希望他见的她的班上的同学。【惶惑 13】

〔彼は彼女が彼に会うことを希望した彼女のクラスの生徒に会うことができない〕

→b 她希望他见她班上的同学，但他无法见他们。〔彼女は彼が彼女のクラスの生徒に会うことを希望したが，彼は彼らに会うことができない〕

(29)は，人称代名詞が多用されている点でもわかりにくいのですが，(29a)では，「彼女が彼に会うことを希望した彼女のクラスの」という長い複雑な修飾節が「生徒」を修飾しています。理解に労力を要する，「悪文」といっていいものでしょう。作者が文学的効果を狙って意図的にこのようにしたものと思われます。(29b)のように，修飾節を動詞性フレーズに分解してつなげれば，多少は関係がわかりやすくなりそうです。

(30)のように，日本語の小説の中国語訳に，複雑な修飾関係が捉えきれず，結果的に誤訳となってしまうものも見受けられます。

▶ 誤訳も

(30) 竹籠を背負って山をこえる女たちに会うのがいやだったのだ。【越前竹人形 106】

→喜助不愿意背着背篓，与赶山路的女人相遇。〔喜助は竹籠を背負ったまま(では)，山をこえる女たちに会いたくなかった〕

(30)の日本語原文では、「竹籠を背負って山をこえる」が「女たち」の修飾節になり、「竹籠を背負って山をこえる女たち」全体が「会う」の目的語になっています。「会うのがいやだ」の主体は、省略されたこの小説の主人公「喜助」です。ところが、中国語訳文では、「竹籠を背負っ」ているのは「喜助」となり、「山をこえる」のみが「女たち」の修飾語になってしまっています。

2.2. タイトル・見出し、掲示物など

中国語の書名や論文のタイトル、見出しなどには動詞的表現が見られることが少なくありません。対する日本語のそれらは、名詞的表現であることが多い。特に新聞の見出しや広告などでは「体言止め」¹²が多用されます。

(31)『日本人の間違いやすい中国語』

「二重目的語文の構造と意味」

(32)《汉语可以这样教》〔中国語はこのように教えればよい〕

〈论汉语词重音〉〔中国語の語ストレスを論ずる〕

〈由拟声语看日中辞典〉〔擬声語から日中辞典を見る〕

(33)混乱抱え 見切り 発車 LED を使って 省エネ

健やかな毎日を サポート まじめなモノづくり

(31)は、「日本人の間違いやすい」「二重目的語文の」が修飾節で、その後「中国語」「構造と意味」という名詞および名詞性フレーズがついた、名詞的表現になっています。それに対し、(32)は、それぞれ、連用修飾語「このように」＋動詞「教える」、動詞「論ずる」＋目的語「中国語の語ストレス」、動詞「見る」＋目的語「日中辞典」と、動詞的表現になっています。(33)は、日本の新聞などの見出しによく見られる体言止めの例です。

この傾向には、1.2 で見たような、動詞の性質が関わるものと考えられます。日本語の動詞には時制形式・敬語レベルなどがついてまわるため、動詞で言い切りにしようとする時、「～する」「～した」「～している」「～していた」のいずれにするか、どの程度の丁寧にするか、などを、決めてから使わざるをえなくなると考えられるのです。

¹² ここでは特に、スル動詞の「～する」を取り去った形で終始しているものを指しています。

- ▶ 動詞の性質の違い：日本語の動詞は時制形式・敬語レベルと切り離せない

(34) a 富士登山を記念する

b 富士山に登るのを記念する

c 富士山に登ったのを記念する

d 富士山にお登りになられたのを記念する

このような時制の形式や敬語のレベルにあまりこだわっていると、タイトルや見出しはちゃんとしたものになりませんね。

掲示物などでは、見る者にある行為を禁止したり奨励したりすることが多いですが、日本語の動詞は、時制の形式や敬語レベルを考慮しなければならないことに加え、1.2 でも述べたように、抽象度が低いため、ある行為全般を指して奨励、禁止の対象とする掲示物には馴染まないものと考えられます。



北京の地下鉄「新街口」駅にて

- ▶ 動詞の性質の違い：日本語の動詞は抽象度が低い

(35) a? 火災が起ったらエレベーターに乗らないでください

b…エレベーターは使わないでください

c…エレベーターはご利用なさらないようお願いいたします

d 火災発生時はエレベーター使用禁止

→发现火情 禁止乘电梯〔火事の状況を見つけたらエレベーターに乗るのを禁止する〕

(36) a? 煙草は吸わないでください

b お煙草はご遠慮ください / 禁煙

→ 禁止吸烟〔煙草を吸うのを禁止する〕

(35a)(36a)に使われる「エレベーターに乗る」「煙草を吸う」は、かなり具体的な動作のイメージを喚起するのではないのでしょうか。(35a)に「?」をつけたのは、「乗る」というのが具体的すぎるのではないかと感じたからです。「エレベーターに乗らないでください」というと、具体的に、今ここで「乗るな」と制止していて、エレベーターの利用全体を制止する表現とは異なるのではないかと思います。一方で、「使う」という動詞を使うと、それをどの程度丁寧に表現するかも問題になりますね。(35c)のように丁寧に表示しているところもあるのではないのでしょうか。文字数が増え、緊迫感は薄れますね。そのような事態を避けるためには、(35d)のように、名詞的表現を採用して、「使用禁止」とするのが無難な選択となりそうです。また(35d)は、「火災発生時」と、こちらも名詞的表現にしています。

(36)も同様ですね。このように、禁止の伝達には、「エレベーター使用禁止」「禁煙」などのほうが、より適切であると考えられます。



某カメラ店内にて

(37) 免税カウンター

→ 办理免税手续〔免税手続きを行います〕

(37)は、免税手続きを行う場所を示すものですが、中国語では、動詞「行

う」＋目的語「免税手続き」と、動詞的表現が使われています。

2.3. 日中同形語

いわゆる「日中同形語」でも、日本語は名詞優勢、中国語は動詞優勢であることが伺える例があります。

▶ 同形語でも日本語はモノ、中国語はコト【中川 2005】

(38)a 唱歌(しょうか) 唱歌(chàng gē)

b 迷路(めいろ) 迷路(mí lù)

c 説話(せつわ) 说话(shuō huà)

(38a)(38b)は中川 2005 が挙げている例で、日本語の「唱歌」と中国語の“唱歌”は日中同形ですが、日本語の「唱歌」は「文部省唱歌」というように、歌うための歌という名詞になるのに対し、中国語の“唱歌”は「歌を歌う」という動詞＋目的語フレーズになります。「迷路」も日本語だと、うろうろ歩きまわって出口を探すあの名詞の迷路になりますが、中国語ではこれも「道に迷う」という動詞＋目的語フレーズになります。(38c)は私が見つけた例で、漢字の字形が違っていますが、一応同形です。日本語の「説話」はお話、物語のことで名詞ですが、中国語の“说话”は、「言葉を話す」という、やはり動詞＋目的語フレーズということになります。

中川 2005 によれば、中国語の基本語順は SVO、日本語は SOV、(38)の並びはすべて VO という並びで、いずれも中国語の SVO の順に合っています。そのため、その通りに理解して、「歌を歌う」「道に迷う」「言葉を話す」のように、動詞＋目的語としての意味に取るのが優勢になるのに対し、日本語の SOV の順には合っていないので、動詞＋目的語とはすぐには理解されず、どちらかというと、「歌うための歌」「迷うための道」「説くための話」というように、修飾構造のように理解するのが優勢になるのではないかということです。

次の(39)は、日本語では名詞の違いで乗用車を指す場合と自転車を指す場合を区別していますが、中国語では、動詞の違いで区別をしています。これも、一見、日本語で名詞を重視し、中国語で動詞を重視することの現れとも見えますが、類似の例がみつからない上に、(40)のように日中いずれも名詞

の違いで区別する反例もありますので、保留とすべきでしょう。

▶ 名詞重視と動詞重視の現れか？

(39)駐車, 駐輪 → 停車〔駐車する〕, 存車〔駐輪する〕

(40)録音, 録画 → 录音〔録音する/録音〕, 录像〔録画する/録画〕

3. おわりに

以上, 日本語は名詞的表現を多用し, 中国語は動詞的表現をより選択する, ということについて, 様々に観察される現象を取り上げ, 可能な限りその裏にある日本語と中国語の違いについて, 主に先行研究を紹介しながら検討を加えてきました。はじめにも述べたように, 中にはご納得いただけない例もあったかもしれませんが, いくつかは, そう言われてみれば, という例もあったのではないのでしょうか。

日常何気なく使っている言語について意識して考え直す機会はそう多くはありません。また, あるものの特徴は他のものと比べてはじめて明らかになります。言語の対照研究は, 無意識の領域を意識にのぼらせ, 新たな気づきにつながるきっかけを与えてくれるのです。

今日のお話は以上です。ありがとうございました。(了)

用例出典

北京日本語学研究センター編.2003.『中日対訳コーパス』

水上勉『越前竹人形』, 対訳: 吴树文訳『越前竹偶』, 【 】内数字はコーパス内段落番号

王蒙.1984.〈惶惑〉, 《木箱深处的紫绸花服》, 上海文艺出版社, 【 】内数字はページ数

※上記以外のものは作例または下記参考文献より一部改変して引用, []内は加藤訳。

参考文献

相原茂, 木村英樹, 杉村博文, 中川正之.1992.『中国語入門 Q&A101』, 大修館書店, pp.136-138

荒川清秀.1982.「中国語の語彙」, 『講座日本語学 12 外国語との対照Ⅲ』, 明治書院, pp.62-84

- 荒川清秀.2003.『一步すすんだ中国語文法』, 大修館書店
- 井上優.2006.「日本語から見た中国語」, 『日本語学』 25(3), pp.26-33
- 井上優.2012.「テンスの有無と事象の叙述様式 日本語と中国語の対照」, 影山太郎・沈力編『日中理論言語学の新展望 2 意味と構文』, くろしお出版, pp.1-26
- 大河内康憲.1997.「感情表現と使役動詞」, 『中国語の諸相』, 白帝社, pp.149-160
- 加藤晴子.2014.「2.動詞・形容詞」, 沖森卓也ほか著『日本語ライブラリー 中国語と日本語』, 朝倉書店, pp.11-18
- 木村英樹.1996.『中国語はじめの一步』, ちくま新書 066
- 朱德熙.1982.《语法讲义》, 商务印书馆〔杉村博文・木村英樹訳.1995.『文法講義—朱德熙教授の中国語文法要説—』, 白帝社〕
- 朱德熙.1985.《语法答问》, 商务印书馆〔中川正之・木村英樹編訳.1986.『文法のはなし—朱德熙教授の文法問答—』, 光生館〕
- 中川正之.2005.『もっと知りたい! 日本語 漢語からみえる世界と世間』, 岩波書店
- 高橋清子.2006.「日本語から見たタイ語—タイ語・中国語・日本語三つ巴の楽しさ—」, 『日本語学』 25(3), pp.26-33
- 来思平・相原茂著, 喜多山幸子編訳.1993.『日本人の中国語—誤用例 54 例』, 東方書店



愛車のナンバープレート 左隅に写っているのは自転車免許証

・・・＊ ●－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－＊ ●・・・

いまやすっかり自家用車の波にとってかわられ、すっかり見られなくなってしまったが――そして、必ずぼんやり灰色がかった空がセットになるのが大変残念なのであるが――かつて中国北京の風景といえば、自転車の洪水というのが定番であった。

80年代末に留学した頃は、まだまだ自転車の時代だった。街中を流しているタクシーはまだなく、地下鉄は、市内の中心部の環状線と西に延びる路線の2路線のみ。バスの路線も今より少なく、常に混んでいて運転は乱暴、切符を売る車掌は不機嫌であった。というわけで、留学中はどこに行くにも自転車だった。滅多に市内には行かないという北京大学の先生も、行く時は約15km離れた王府井にも自転車で行く、と話していた。

北京の道路は碁盤の目状でわかりやすい。主要な通りにはすべて自転車専用レーンがあり、乗用車と同じく右側を通行する。一見、無秩序と思われる交差点にも、入り込んでみれば、それなりの流れがあった。やがて、いくつ

か、お気に入りのカーブや並木道もできてくる。難点は、体の左側ばかり日に焼けることだった。何しろ、自転車だと、北西郊外にある北京大学から、街の中心に行って帰るのは一日仕事だ。朝、宿舎から市内を目指すと、太陽は東側、つまり南に進む自転車の左側にある。午後、帰る時には、北に進むので、西に沈む太陽はやはり左側にあることになる。また、午後になると西風が吹くことが多く、帰りは風に向かって漕ぐことになった。

90年代、2000年以降と、ほぼ10年ごとに長期に滞在する機会があり、北京の発展の様子も眺めて来たが、その間自転車の立場はどんどん弱くなった。自転車専用レーンもいつの間にか乗用車に占領され、やむを得ない結果として歩道の走行や逆走も増え、秩序がなくなった。

件の北京大学の先生も、いまやマイカーで通勤、学内に駐車スペースが少なくて困るとこぼしている。

中国語と日本語の違いを知るための3冊

・*・...✚...・*・...✚...・*・...✚...・*・...✚...・*・



荒川清秀, 2009/2014. 『中国語を歩く一辞書と街角の考現学』/『中国語を歩く一辞書と街角の考現学 パート2』 東方書店.

街に出て、掲示物や看板を写真に撮り、その言葉について、古今の文献・辞書に抛りながら、考察を加える。様々な工具書も紹介、その記述内容に深く切り込んだかと思えば、字体の違いにも言及する。身の回りの言葉が気になって仕方なくなること必至である。

...・*・ ————— ・*・...

井上優, 2013. 『そうだったんだ！日本語 相席で黙って
いられるか一日中言語行動比較論』 岩波書店.

著者夫人は中国人で、家庭内で絶えず文化摩擦が起きる。しかし著者はそれを楽しみ、更に研究のネタにもしてしまう。どこでしゃべり、どこで黙るかなど、日本人と中国人の行動様式の違いにも言及する。著者夫妻の掛け合いが楽しい。



...・*・ ————— ・*・...



中川正之, 2005. 『もっと知りたい！日本語 漢語からみえる世界と世間』 岩波書店.

本編でも取り上げた日中同形語に加え、漢語と和語、音読みと訓読みの違いについて深く掘り下げる他、ドアに頭をぶつけた際の「痛っ！」はそのまま中国語では言えない、日本人は独り言が多い、など、普段気づかない指摘が満載の書。文庫版(岩波現代文庫[学術]294)もあり。

...・*・ ————— ・*・...

平成 26 年度 東京外国語大学オープンアカデミー

東京外国語大学語学研究所 企画

『言葉とその周辺をきわめる -3- 』

2014 年 10 月 21 日 (火) 第 3 回

「ハンガリー語：日本語と似ているところ、違うところ」

東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所研究員

大島 一

こんばんは。「言葉とその周辺をきわめる -3-」の本日は第3回です。私は大島と申します。ハンガリー語を担当します。タイトルにあるとおり「日本語と似ているところ、違うところ」を観点として話します。なぜ「日本語と似ているところ、違うところ」にしたかという、私は日本語とハンガリー語の対照研究をしていまして、これは単にハンガリー語だけではなく日本語からみたハンガリー語の文法像を明らかにするという研究です。今日はハンガリー語が日本語とどのように似ていてどのくらい違うかということをお話していきたいと思います。ちなみに私は東京外国語大学でもハンガリー語を教えています。

0. はじめに

皆さんはハンガリーを知っていますか？もちろんご存知だと思いますが、ハンガリーに行かれたことのある方はいらっしゃるでしょうか？何人かいらっしゃるんですね。ハンガリーはどういうところかを簡単に話します。

まず、ハンガリーは中央ヨーロッパに位置しています。北はスロヴァキア、西はオーストリア、南はセルビアやクロアチア、スロヴェニア、そして東はルーマニア、ウクライナにも接しています。これは裏を返せば、このように国境を接している国々には少なからずハンガリー人が住んでいることでもあります。ですから、ルーマニアにもハンガリー人は住んでいますし、ウクライナにも多少ながらハンガリー人が住んでいます。また、オーストリアにも住んでいます。第一次世界大戦前は、オーストリア・ハンガリー二重君主国といいまして、かつてはオーストリアとハンガリーは同じ国でした。そういうわけで、周辺諸国もハンガリー領だったところがあるので、今でもハンガリー人が住んでいるというわけです。オーストリアに住んでいるハンガリー人については、これも私の研究対象なので、

後ほど詳しく説明します。

ちなみに、「ハンガリー」という呼び名は他称でして、ハンガリー人自身は「マジャル」(magyar)と呼んでいます。ですから、ハンガリーに行って「ハンガリー」と言っても通じないわけですね。人種的には白人種です。そして、かつて自殺率が世界ナンバー 1 でした。そういう国です。その昔、『暗い日曜日』というシャンソンがありまして、同名の映画もありますが、このシャンソンを作詞作曲したのがハンガリー人です。だからといって自殺率ナンバー 1 という理由にはならないのですが。

また、ルービックキューブもハンガリー人の発明品です。我々は英語読みで「ルービック」と言いますが、ハンガリー語では Rubik (ルビック) で、ルビックさんという人が発明しました。ちなみにおもちゃを発明しようとして発明したわけではなくて、ルビックさんは数学者であって、数学の研究上、立方体の研究過程であるような立方体を作り出したということです。ハンガリーというと日本ではルービックキューブが一番有名かもしれません。

その他に「ピアノの魔術師」と称されるリストが知られていますが、日本では「フランツ・リスト」と言いますが、ハンガリー風に言えば「リスト・フェレンツ」(LISZT Ferenc)となります。ハンガリー語では日本語と同じように名字が先、名前を後という語順で呼ぶからです。ちなみに「リスト」というのはハンガリー語では「小麦粉」の意味です。ハンガリーのスーパーに行くときたくさんの「リスト」が置いてあります。他に日本で知られているハンガリー人としては、写真家のロバート・キャパがいます。この人もハンガリー生まれです。本名はフリードマン・エンドレ・エルネーと言います。ハンガリー語の発音に即せば、「キャパ」という発音ではなく「ツァパ」です。また、野菜のパプリカも有名です。ビタミン C を発見したのはハンガリー人のセント＝ジェルジ・アルベルトですが、彼はパプリカからビタミン C を抽出したということです。

ハンガリー料理の写真も後ほどお見せしますが、基本的にほとんどの料理にパプリカが使われます。他にも食べ物で知られているものとしてフォアグラがあります。ハンガリー語では「ガチョウの肝臓」の意味で「リバマーイ」(libamáj)と言います。語順が日本語と同じで、「リバ」がガチョウ、「マーイ」が肝臓の意味です。フランス産に比べて値段は安いので、日本のフランス料理店で出てくるフォアグラの中にはひょっとしたらハンガリー産があるかもしれません。ガチョウの肝臓が有名ですから、当然ガチョウ本体の羽も有名です。いま羽毛布団を買

うとたいいハンガリー産ですが、これは意外に知られていません。

そして、ハンガリーと言えば、やはりお酒、ワインですね。ハンガリー・ワインで特に有名なのはトカイワインです。ハンガリーの、スロヴァキアに近い北東地域にあるトカイ (Tokaj) というところで作られるワインです。特に貴腐ワインが有名でして、トカイ・アスーという貴腐ワインは世界的にも有名です。フランスのルイ 14 世がそれを飲んで「王のワイン、ワインの王」と言ったという逸話があります。

さきほど話したビタミン C を発見したセント＝ジェルジ・アルベルト、アメリカに渡ってコンピューターを発明したジョン・フォン・ノイマン (ノイマン・ヤーノシュ)、ボールペンを発明したビーロー・ラースロー、数学者のボーヤイ・ヤーノシュなどが、有名なハンガリー人です。クラシック音楽関係では、作曲家のバルトークやコダーイ、指揮者のショルティが音楽世界で活躍しています。

以上、ハンガリーについての簡単な紹介でした。

1. ハンガリー語とは？

ここで、ハンガリー語の文法と全体像を簡単にご説明します。アメリカに渡った歴史学者のハンガリー人ジョン・ルカーチが書いた本の中にハンガリー語について記述した部分があります¹。要約すると、ハンガリー語のイメージはヴァイオリンのような高い音程のイメージではなく、チェロのような低い音の響きを持つ言語であって、それがハンガリー語のイメージである、というものです。ハンガリー人の話すハンガリー語は、大変低く暗い感じがします。あまり高い音程でわいわい話すという感じではありません。もちろん人によりますが、基本的には暗い響きのあるのがハンガリー語の特徴です。

そして、ハンガリー語はハンガリーにおける公用語です。ハンガリーは人口が 1000 万人近くいましてその 9 割以上がハンガリー語話者です。それ以外に、国外に 300 万人ほどハンガリー語話者がいます。全世界で 1300 万人の話者数ということになり、それほど多くないですが、それほど少ないとも言えません。所属であるウラル語族の中で最も多い話者数を持っているのがハンガリー語です。また、ハンガリー語の文字はラテン・アルファベットです。読むにはさほど問題がない、簡単に入りやすい言語です。ただ、ハンガリー語がヨーロッパの言語の大

¹ ジョン・ルカーチ著、早稲田みか訳『ブダペストの世紀末:都市と文化の歴史的肖像』白水社。

多数であるインド・ヨーロッパ語族に属していないために、ヨーロッパの人々からハンガリー語は大変難しい言語だとよく言われます。

ハンガリー語が所属しているウラル語族はいくつかの階層に分かれています。まず、大きくサモイェード語派とフィン・ウゴル語派に分かれます。フィン・ウゴル語派はさらにバルト・フィン諸語とウゴル諸語に分かれていて、フィン・ウゴル諸語にはフィンランド語やエストニア語などが属します。もう一つのウゴル諸語にハンガリー語が属しています。ハンガリー語からみて語族的に最も近い言語は、このウゴル諸語の中のハンティ語、マンシ語ということになります。これら 2 つの言語はウラル山脈のかたあたりにあつて現在のハンガリーとは地理的にも言語的にも非常に遠い位置にあります。したがって、お互いの言語話者がお互いのことばで話をしてもコミュニケーションは成立しません。それよりも遠い関係にあるフィンランド語とも残念ながら意思疎通は不可能です。ハンガリー語を学んで他の言語話者の人とコミュニケーションがとれるかいうと、そうではないというところがハンガリー語学習のメリットと言えないところです。ハンガリー語が属するウラル語族とインド・ヨーロッパ語族を地図で見ると、ハンガリーは周囲をインド・ヨーロッパ語族に囲まれていて島のように存在していることがわかります。

先ほど触れたハンガリー語の名前ですが、日本語と同様、名字と名前の順で綴ります。バルトクであれば、バルトク・ベーラ (BARTÓK Béla)であつて、ベーラ・バルトクではありません。日本にいるハンガリー人としては大変有名ですが、数学者であり大道芸人として来日したピーター・フランクフルは、フランクフル・ペーテル (FRANKL Péter)です。また、住所の書き方や日付の書き方も日本語と似ていて、大きい単位から小さい単位へと書きます。外国に郵便や小包を発送する時、小さい単位から書くということになんとも違和感があるかと思いますが、ハンガリーに送る場合は日本と同じように大きい単位から小さい単位へと書いてください。また日付も大きい単位から小さい単位、つまり年→月→日の順に書きます。この「大きい単位→小さい単位」という原理は、名前でも同様で、名前と名字で考えるとやはり名前より名字のほうが大きい単位であるわけです。ですから、これとは逆さまのケース、たとえば英語などでは、名前も日付も住所も小さい単位から先に綴ります。意外に我々の身近な部分の表現は言語的な規則が反映した結果であるということがわかります。

ハンガリー語はいろいろな要素を後ろに付けていて、とても長い単語にするこ

とが可能です。よくあるハンガリー語のジョークで、「最も長いハンガリー語」としてこんなものがあります。「megszentségteleníthetetleniségeskedéseitekért (接頭辞-「聖なる」-「性」-なしの-「～する」-可能-なしの-「性」-形容詞化-自動詞化-名詞化-所有 (2 人称複数) -「～のための」)」というものがあります。直訳すると「聖なるものを汚すことはできない君たちの振る舞いのせいで」で、意味はない単なる言葉遊びです。このようにハンガリー語はいろいろな要素を付けて長くつなげていくことが可能です。後ろに様々な言葉を付けてつなげていける言語を「膠着語」と言います。先ほどの語族の話とは別の話なのですが、「膠着語」というのは類型論という言語学における言語タイプの一つです。膠着という名前のとおり、いろいろな要素を後ろにくっつけていくことによって一つの単語を作ります。膠着語のタイプに入る言語としてよく言われるのが、トルコ語、ハンガリー語、日本語、韓国語です。日本語の例として、「行かせられなかった」((行く)・セ・ラレ・ナカッ・タ)は、動詞「行く」に使役(セ)、可能(ラレ)、ナカッ(否定)、タ(過去)と多くの言葉がくっついています。同じ膠着語のタイプに属する日本語とハンガリー語ですから似ているところは少なからずあります。ということで、一般的なハンガリー語としての話をしましたが、2章では日本語と違うところについてお話します。

2. 日本語と違うところ

2.1 音声的特徴

上で触れたとおり、ハンガリー語の文字はラテン・アルファベットです。また、原則、書いてあるとおりに読めばよい言語なのですが(ローマ字読み)、以下で挙げるようにいくつか日本語の発音にはないものや現象が見受けられます。

2.1.1 発音に関して

母音は「a, i, u, e, o」で日本語とほぼ同じものですが、その中にも、日本語とは違う「a」という短母音があります。短母音の a は日本語の口を大きく開けて発音する「ア」とは異なり、唇を丸めて発音します(円唇母音)。a 以外の i, u, e, o は日本語と同じです。逆にハンガリー語の長母音の á は唇を丸める必要はありません(平唇母音)。短母音 a は唇を丸める、長母音 á は唇を拡げないといけないうところが、ハンガリー語の学び始めは苦勞します。短母音 a は唇を丸めて発音するために、暗く物悲しい響きとなり、これが歴史学者ルカーチの言う、

ヴァイオリンではなくチェロの低音の響きと言われる一つの理由であると考えられます。

続いて、日本語と違う発音としては、ウムラウト母音 ü, ö があります。ちなみに、ウムラウト母音を長母音として長く伸ばす印として使われるのがダブルアキュートアクセント (¨) で、û, ô という音です。このダブルアキュートアクセントが使われる言語というのは世界中で限られています。したがって、ある文章の中にダブルアキュートアクセントが見つければ、そのテキストはハンガリー語であると言えるでしょう。

子音では特徴的なものとして、ty[c]と gy[j]という硬口蓋破裂音があります。ハンガリー語は子音の連続を嫌います。これは日本語と似ているかもしれません。子音の連続は2つまでと原則決められていて、3つになると音をどれか1つ消すというのがハンガリー語の発音規則です。例えば、ハンガリーにある世界遺産の一つである鍾乳洞の名前 Aggtelek 「アクテレク」ですが、ggt と3つの子音が並んでいます。ですが、連続する子音3つをハンガリー人は発音できませんから、1つ子音を落として[gt]となります（さらに、濁る音[g]は後ろの濁らない音[t]に影響を受けて、[k]となる）。地名の読み方としては「アクテレク」となります。決して「アックテレク」と詰まったりはしません。

また、これも日本語と似ているのですが、他のヨーロッパの言語と比べて、母音が多いというのも特徴です。よくある笑い話なのですが、井手さんと織田さんという人がハンガリーに行ったら、「イデイデ」「オダオダ」というようにやたら周りから名前を呼ばれる。ide (イデ) は「ここへ」、oda (オダ) は「あそこへ」という意味なのですね。「ここへ」や「あそこへ」は普段でもよく使う言葉ですから、井手さんと織田さんはハンガリーに行って大変びっくりした、という笑い話です。日本語と似た音では「部屋」という意味の szoba (ソバ) という言葉もあります。蕎麦屋の部屋ではありません。また、Jókai 「ヨーカイ」という名字を持つ大変有名な JÓKAI Mór (ヨーカイ・モール) という作家がいました。日本語と似た音なので皆さんにとってもおもしろく聞こえてしまうのではないかと思います。

2.1.2 母音調和

ハンガリー語には母音調和という現象があります。これは例えばトルコ語などにもある現象でして、簡単に言うと、ある単語の中には同じグループの母音が現

れないといけないという音声規則のことです。この母音グループは3つあって、「後舌母音」グループ、「前舌母音」グループ、「円唇母音」グループです。後舌母音は舌が後ろのほうに盛り上がって発音する音で、u, o, a。前舌母音は舌が前のほうで盛り上がって発音する音で、i, e。円唇母音は唇を丸めて発音する音で、俗にいうウムラウトの ü, ö です。それぞれ別のグループの母音などをわけて1つの単語を作ってははいけません。後舌母音の asztal「机」という単語があればその複数の接尾辞は -ok を使わなければいけない (asztal-ok「机-複数」)。前舌母音の szép「きれいな」という単語を複数にする場合は接尾辞は -ok は使えず、前舌母音用の複数接尾辞 -ek を使います (szép-ek「美しい-複数」)。このように同じグループの母音が入った接尾辞を使わなければいけません。これは母音調和がない日本語からすると大変面倒です。しかし、これをきちんと覚えないうといつまでも間違った使い方をしてしまいます。

また、日本語と違うところとして、冠詞があります。冠詞の使い方は英語の冠詞の使い方とほぼ一緒です。

2.2 形態的特徴

ハンガリー語は特に動詞の活用が豊富なことで有名です。以下で見る動詞の不定・定活用はハンガリー語の最も大きな文法的特徴とも言えるでしょう。また、ハンガリー語学習においても最初に味わう難所とも言えます。

2.2.1 動詞の不定・定活用

ハンガリー語の動詞の活用には1つではなく2つの活用があります。それが「不定活用」と「定活用」です。どういう区別で活用があるかということによって選択される活用です。名前のとおり、不定活用は不定冠詞を伴った目的語を取るときの活用、定活用は定冠詞を伴った目的語を取るときの活用です。また、不定活用は、目的語が1人称もしくは2人称の目的語を取るときにも使われます。例えば「私を」「君を」です。「私を愛する」というときは不定活用となります。それに対して定活用は3人称の目的語および固有名詞を取るときにも使われます。例文を見てみましょう。

- (1) a. Egy könyvet olvas-**ok**.
不定冠詞 本を 読む-不定活用 (1 単)

私はある本を読んでいる。

- b. A könyvet olvas-**om**.

定冠詞 本を 読む-定活用 (1 単)

私はその本を読んでいる。

例文(1a)は不定冠詞がついた目的語「本を」ですので、「私はある本を読んでいる。」という意味ですが、不定冠詞がついているので不定活用の -ok という語尾をとります。それに対して例文(1b)は定冠詞 a がついているので、主語は同じ「私」であっても -om という活用語尾をとります。

- (2) a. Szeret-**sz** engem.

愛する-不定活用 (2 単) 私を

君は私を愛している。

- b. Ő szeret- $\emptyset$ téged.

彼 (女)² 愛する-不定活用 (3 単) 君を

彼 (女) は君を愛している。

- c. Szeret-**ed** őt.

愛する-定活用 (2 単) 彼 (女) を

君は彼 (女) を愛している。

- d. Ő szeret-**i** Gábort.

彼 (女) 愛する-定活用 (3 単) ガーボルを

彼 (女) はガーボルを愛している。

例文(2)は「愛する」という動詞で、誰が誰を愛するかというケースで考えてみました。(2)の a と b は不定活用です。目的語をみてもらうと、(2a)は「私を」で 1 人称単数が目的語なので不定活用です。(2b)は「君を」で 2 人称単数が目的語なのでこれも不定活用です。(2c)は「彼もしくは彼女を」なので 3 人称が目的語なので定活用です。(2d)も「ガーボルを」という固有名詞であるハンガリー人男性名が目的語なのでこれも定活用でとなります。すなわち、ハンガリー語では主語だけでなく目的語の情報も動詞の活用に組み込むことによって、動詞だけで目

² ハンガリー語の 3 人称代名詞には性差がない。したがって、3 人称単数の ő は「彼」もしくは「彼女」の意味であり、その判別は文脈上で判断する。3 人称複数 ōk も「彼ら」も同様。

的語が誰かを推測することが可能と言えます。ですから例えば(2c)「君は彼(女)を愛している。」という例文では、目的語 *öt* がなくても動詞 *szereted* だけで誰を愛しているかを推測できます。他の場合でも、例えば自分と相手が二人きりになった時に相手が私に向かって „Szeretem.” と言ったら、相手は私のことが好きじゃないのです。*szeret-em* は 1 人称単数の定活用で (例文(1b)の *olvas-om* も 1 人称単数の定活用)、定活用は 3 人称の目的語 (「彼(女)を」) を取るので、相手は今この場にはいない他の誰かが好きであることになります。ですから、„Szeretem.” と相手に言われたら自分としては大変に残念だと思うわけですね。その時に自分が欲しい言葉は、次の例文(3)にある言葉です。

(3) *Szeret-**lek**.*

愛する-1 人称単数《主語》→ 2 人称《目的語》

(私は君を) 愛している。

これは主語が「私」で目的語が「君」です。ということで、二人きりになったときに „Szeret-lek!” と言われたら私は嬉しいのですが、„Szeret-em.” と言われたら私は悲しいわけですね。動詞 1 語だけでその場の状況がわかってしまうところに、不定活用・定活用という 2 つの活用の存在意義があると言えるでしょう。

2.2.2 受動形態素

その他に日本語と違うところとして非常におもしろいのは、日本語でよく使われる受身表現がハンガリー語では使われないところです。例えば例文(4)は「ガーボルはエーヴァに殺される。」という日本語をそのまま記述したものです。

- (4) *?Gábor megöl-**etik** Éva által.*
 ガーボルは 殺す-受動 (3 単) エーヴァ へによって
 ガーボルはエーヴァによって殺される。

しかし、この文は現代ハンガリー語ではまず使われません。「-etik」部分は日本語の「れる、られる」に相当する部分なのですが、現代ハンガリー語においては受身を表す言葉はもうすでに古い形になってしまっていて、使う人はいません。た

だ、使う人がいないというだけであって、文法的には間違っていない。この受身の形式で受身の状況を言わないというだけです。

では、受身的な状況をどのように表すかという、実は能動文で表現します。

- (5) a. *Gábor* *megöl-i* *Éva*. 【意味的に受動】
 ガーボルを 殺す-定活用 (3 単) エーヴァは
 ガーボルは、エーヴァが殺す。
- b. *Éva* *megöli* *Gábor*. 【能動文】
 エーヴァはガーボルを殺す。

(5a)のとおり、殺される相手 (Gábor「ガーボルを」) を文頭に、殺す人を文末に配置します。主語は文頭 (で目的語は文頭ではない) というのがハンガリー語でも一般的な語順ですが、そうではない語順にする、すなわち、目的語を文頭に持ってくることでそれを意味的にハイライトするという考えをとっているとされます。ですから、Éva が文頭にくる (5b)は、「エーヴァがガーボルを殺す。」という意味的にも通常の能動文になるわけです。

ハンガリー語は、このように語順を入れ替えることによって、受身を擬似的に表していると考えられます。ハンガリー語には受身 (の形式) が (使われ) ないという状況は日本語からみると大変不思議な感じに思っていますが、動詞は能動形のまま変わらず、語順の位置を変えるだけで能動と受動を表現仕分ける方法はなかなか経済的であるような気がします。以上、日本語と違うところでした。

3. 日本語と似ているところ

3.1 後置詞型言語

ハンガリー語の格の接尾辞は、これまでに見た「エーヴァは」の「は」や「ガーボルを」の「を」にあたります。同じようなものがハンガリー語では名詞の後につきます。例えば「ガーボルを」の「を」に相当するのは *Gábor-t* の「t」が表しています。日本語と同様、名詞の後ろにつけることによって見た目も大変わかりやすいでしょう。主語には何もつけませんので、その点は日本語と異なります。ハンガリー語における格の接尾辞というのは、日本語では助詞「てにをは」に相当すると考えていいと思います。

また、ハンガリー語は後置詞というものを持つ言語です。後置詞は英語の前置

詞と反対のもので名詞の後ろに置く言葉です。ház **alatt** で「家の下に」という意味で、ここでは alatt が後置詞です。ház は「家」という単語です。日本語からみると全く同じ語順ですので、簡単に覚えることができます。そして、名詞の後ろにつくという意味では、先ほどの格の接尾辞もそうです。hajó**ban**「船内で」は hajó が「船」、そして、-ban が「～の中に」という意味を表す場所の格接尾辞です。英語ですと全く逆の語順で覚えなければなりません。日本語は名詞の後に助詞を置くので、「家に」「家で」「家を」…となり、ハンガリー語は全く同じ語順です。

また、修飾語は被修飾語の前に立つので、形容詞などは必ず名詞の前に来ます。形容詞 szép (きれいな) + 名詞 alma (リンゴ) の語順になります。ハンガリー人の 10 人中 10 人が好きな料理にロールキャベツがありますが、ロールキャベツは töltött káposzta と言います (töltött「詰めた」+ káposzta「キャベツ」)。

3.2 語順規則

日本語に比較的似ているといえるものにはハンガリー語の語順規則も挙げられるかもしれません。ハンガリー語では動詞の直前に言いたいことを置かなければならないという語順の大原則があります。例えば疑問文で最も重要なのは疑問詞ですから疑問詞 (および返答文における疑問詞に対する答えのことば) は動詞の直前に置く必要があります。

- | | | | | | |
|-----|--------------|---------------|-----|--------------|-----------|
| (6) | Ki | dolgozik itt? | - | Endre | dolgozik. |
| | 誰が | 働く | ここで | エンドレが | 働く |
| | ここで誰が働いているの? | - | | エンドレが働いている。 | |

疑問詞 ki「誰が」は動詞 dolgozik「働く」の直前に来ないといけません。この疑問文の答として、伝えたいことは「誰が」に対応する人の名前、すなわち Endre (エンドレ。ハンガリー人男性名の一つ) ですので、これが動詞の前に来て Endre dolgozik. となります。これがどうして日本語と似ているかと言うと、日本語は SOV 語順 (主語+目的語+動詞) ですので、一般に動詞の直前の要素として目的語が来るために似たような語順が散見されるということが考えられます。例えば、以下の例(7)のように日本語の語順と大変似たものがハンガリー語でも言えることがわかったと思います。

- (7) Az egyetemet 1995-ben fejeztem be. Utána
 定冠詞 大学を 1995 年に 終えた 接頭辞 その後
 Budapestre költöztem, jelenleg is ott élek.
 ブダペストへ 引っ越した 現在 もそこに 生活する
 私は 1995 年に大学を卒業しました。その後ブダペストへ引っ越しまし
 て、現在もそこで暮らしています。

4. 「～たち」の用法

最後に、ハンガリー語と日本語でともに似ているようで似ていないものの例として、「～たち」の用法について日本語とハンガリー語で見たいと思います。

- (8) a. *tanár-**ok***
 先生-複数
 先生たち
- b. *Péter-**ék***
 ペーテル-結合の複数
 ペーテルたち (=ペーテルとその家族、または友人など)

日本語では「先生たち」「ペーテルたち」は同じ「～たち」で表現しますが、ハンガリー語では「先生たち」と「ペーテルたち」は違う文法要素となっています。「先生たち」の複数 *-(o)k* は一般的に我々が考えている通常の複数形です。専門的に言うと「累加の複数」と言います。もう一つ「結合の複数」という複数形があります。この複数形が今からお話する複数形です。この、ハンガリー語の Péterék「ペーテルたち」というのはどういう意味かというと、Péter (ペーテル。ハンガリー人男性名の一つ) が複数いるわけではありません。「ペーテルとその家族、または友人など」のことです。例えば誰でも知っているイギリスの児童小説『くまのプーさん』はハンガリー語で Micimackó と言います。主役である子ぐまの“くまのプーさん”は複数いるということはないので、Michimackó-k のような累加の複数はありません。くまのプーさんは一匹だけです。ですが、Michimackó-ék のように結合の複数は「くまのプーさんとその仲間たち」とい

う意味で言うことが可能です。これが通常の数と結合の数との違いで、これらをハンガリー語では2つの数の形で表し分けています。日本語では「～たち」（または「～ら」）という言い方しかできません。

ハンガリー語の「～たち」の用法ですが、他にもいろいろありまして、「ペーテルたち」というのは、仲間であって敵ではありません。

- (9) a. *Péter-ék együtt érkeztek.*
 ペーテル-結合の数 一緒に 到着した
 ペーテルと（彼の仲間）たちは一緒に到着した。
- b. *Péter-ék különböző időben érkeztek.*
 ペーテル-結合の数 異なる 時間に 到着した
 ペーテルと（彼の仲間）たちは異なる時間に到着した。

例文(9a)の「ペーテル（と彼の仲間）たちは一緒に到着した。」は、ペーテルとその仲間で、ペーテルの敵にはなりません。また、このグループの構成員はいつも同じ行動を取る必要はなく、その証拠に(9b)のように「ペーテル（と彼の仲間）たちは異なる時間に到着した。」と、ばらばらに到着しましたという言い方もできます。このあたりは日本語の「～たち」と使い方が違って来るのかもしれませんが。

そして、ハンガリー語の「～たち (-ék)」の最も大きな特徴は、一般に「人」にしかつかないということです。生物や非生物には決してつきません。**kutyá-ék* 「犬たち」、**szemüveg-ék* 「メガネたち」は非文法的な表現となります。日本語では「メガネたち」は言えませんが、「犬たち」は言えないこともなく、文法的に許容範囲内と言っても良いかもしれません。この点もハンガリー語と異なるところです。

4.1 ブルゲンラント方言

ただし、そうではないこともあるということで、ここでブルゲンラント方言の言語資料を紹介します。ブルゲンラント方言というのはどこで話されているハンガリー語の方言かと言うと、以前はハンガリー領であったが第一次世界大戦後にオーストリア領になったブルゲンラント州というところに住んでいるハンガリー人のハンガリー語方言です。オーストリアの言語はドイツ語ですから、ブルゲ

ンラント州に住んでいるハンガリー人は普段はドイツ語を話していて、家庭内では自分の母語であるハンガリー語を話すという、ドイツ語・ハンガリー語の二言語使用（バイリンガル）状況にあります。そういうわけで、ドイツ語からの影響強く受けたハンガリー語であるとも言えます。ブルゲンラントの位置ですが、ブルゲンラント州はオーストリアの東端でハンガリー西部と国境を接しています。このブルゲンラント州内、南部ブルゲンラントにあるオーバーヴァルト（Oberwart）という町があるのですが、私はここに住んでいるハンガリー語話者たちのハンガリー語、すなわちブルゲンラント方言を調査しています。

4.2 非人間への付加

ハンガリー語の結合の複数 *-ék* について、私のブルゲンラントでの調査結果と標準ハンガリーとの対比が以下の表 1 です。

表 1 標準ハンガリー語とブルゲンラント方言における結合の複数

	単語	標準ハンガリー語	ブルゲンラント方言
固有名		<i>Péter-ék</i>	<i>Ernő-<u>iek</u></i>
親族	<i>anya</i> 「母」	<i>anyám-ék</i>	<i>anyám-<u>iek</u></i>
人	<i>barát</i> 「友人」	<i>barátom-ék</i>	<i>barátom-<u>iek</u></i>
生物	<i>kutya</i> 「犬」	<i>*kutyá-ék</i>	<i>kutyám-<u>iek</u></i>
非生物	<i>szemüveg</i> 「眼鏡」	<i>*szemüveg-ék</i>	<i>szemüveg-<u>iek</u></i>

なお、ブルゲンラント方言での *-iek* が標準ハンガリー語の *-ék* にあたります。このように、ブルゲンラント方言では生物・非生物にも結合の複数 *-iek* がつけられることがわかります（標準ハンガリー語における生物と非生物にある *マークのものは結合の複数 *-ék* が付けられないことを意味します）。

ブルゲンラント方言における人以外の生物・非生物への結合の複数 *-iek* の付き方の特徴ですが、原則的に身体部位や所有物に限ります。髪とか手とか目とかの身体部位や、身体部位の延長である靴とか服です。例えば、「犬」は自分が所有しているものです。必ず所有形「私の犬」という形にしないと結合の複数 *-iek* はつけられません。ですから、上の表でも、*kutya* 「犬」だけでなく、*kutyám* 「私の犬」という所有形式になっています（*-m* は「私の」）。非生物の *szemüveg-em* も「私の眼鏡」という意味で同様です。

これらのことをまとめると、今は私の仮説段階ですが、自分の所有物について言えるということから、「私の（かわいい）～たち」という意味合いで使っているのではないかと推測します。日本語でも、「私のかわいい～たち」と考えると、なんとなく許容範囲が広がりそうな気がしてきます（「眼鏡」も擬人化して「私のかわいいメガネたち」なら言えるかもしれません）。実際にブルゲンラント州にいるハンガリー人たちにいろいろ話をしてもらったのですが、自分の周りにあるものを指して「私の～たち」と使っているそうなので、あながちこの考えは間違っていないのではないかと思います。

以上のように、「私の（かわいい）～たち」という意味で使用できるということとを標準ハンガリー語のほうに適用すると、もしかしたら標準ハンガリー語の言い方でもそういう言い方もできるのではないだろうかとは私は考えています。これを調べるために、ハンガリー科学アカデミー言語学研究所が作成の『ハンガリー語ナショナルコーパス』³から結合の複数 -ék の用例を集めまして、現在それを分析中です。

5. まとめ

ちなみにブルゲンラント州におけるハンガリー語話者ですが、今はオーストリア領ですから周りは全てドイツ語話者です。現地の研究所⁴による人口推移のグラフで見るとおり⁵、第一次大戦後の1920年以降はハンガリー系住民の数が減っていき、現在、その次の世代にはハンガリー語が継承されていないという事実があります。彼らの住んでいる場所はドイツ語を使うオーストリアですから、わざわざオーストリアでハンガリー語を話す理由がないのです。生活するにも仕事をするにもドイツ語は必須ですが、ハンガリー語は必要ではありません。その結果、自分たちの子供にドイツ語だけを教えれば良いことになります。祖父母の世代の話者がいなくなればこのハンガリー語話者はいなくなるであろうというのがブルゲンラント州のハンガリー語話者の現在の状況なのです。

³ http://corpus.nytud.hu/mnsz/index_eng.html

⁴ オーバーヴァルトの近隣のウンターヴァルト (Unterwart)にあるハンガリー語およびその文化資料を保存する「ハンガリー・メディア情報センター (UMIZ)」のこと。(<http://www3.umiz.at/>)

⁵ <http://www3.umiz.at/hu/index.php/ueberuns/ungarn-im-burgenland/demografie>



ブルゲンラント・ハンガリー文化協会でハンガリー語を学ぶ子どもたち

この写真は、ブルゲンラント州のオーバーヴァルトにあるハンガリー文化協会⁶でハンガリー語を学ぶ子供たちの写真です。彼らはハンガリー系家族の子供として生まれてきていますが、母語はドイツ語です。家庭内ではほとんどドイツ語なので、こういう子供たちはいくらハンガリー系といっても母語はドイツ語です。ですが、それだと自分のルーツがわからなくなるというので、このように現地の文化協会でハンガリー語を学ぶ機会を設けています。とはいっても、やはりドイツ語が母語ですので、彼らにとってどれだけハンガリー語が身につくか分かりません。それでもハンガリー語を守ろうという動きは現地でもいくつかおこなわれています。ハンガリー語とドイツ語で授業が受けられる高校「二言語ギムナジウム」⁷もあります。

本日の話は以上です。どうもありがとうございました。（了）

⁶ <http://www.bukv.at/>

⁷ <http://www.bg-oberwart.at/>

コラム †

「グヤーシュとペルケルト」



写真1 ペルケルト (pörkölt)



写真2 グヤーシュ (gulyás)

... * ◆ ————— ◆ * ...

パプリカをたくさん使うハンガリー料理ですが、世界的に知られているハンガリー料理といえば、「グヤーシュ」であることは言うまでもありません。日本でもずいぶん知られた存在で、ハンガリーに旅行に行かれた方なら一度は食べたことがあるでしょう。

ですが、私がハンガリー料理で一番のご馳走だと思うのは、ペルケルト (pörkölt) という料理です。ペルケルトはいろいろな肉で作られるのですが、一般には牛肉のペルケルトが有名です (写真 1)。すなわち牛肉のパプリカ煮込み (シチュー) です。ちなみに、ペルケルトは諸外国ではドイツ語の「グーラッシュ (Goulasch)」として知られているものです (すなわち、ハンガリー語の「グヤーシュ (gulyás)」をドイツ語読みしたもの)。私が調査に行くオーストリアのブルゲンラント州にあるハンガリーレストランのメニュー表にはドイツ語の Goulasch のハンガリー語訳にはしっかり pörkölt と書かれてあります。

しかし、ペルケルトという料理がなぜ“グーラッシュ”として知られてしまったのでしょうか？実はグーラッシュの語源となったグヤーシュという料理は別にあります (写真 2)。グヤーシュは gulyá (牛飼い) + s (～の) + leves (スープ) で、「牛飼いのスープ」という意味です。ペルケルトはシチューというだけあってとてもこってりして大きな肉がごろごろ入っています。それに比べると、グヤーシュはさらさらしたスープで (写真にもありますがスプーンで頂きます)、具も小さめに切られた肉とジャガイモとニンジン程度でお粗末な感じです。いろいろな説があるのですが、名称が間違っ外国に伝わってしまったこの 2 つのハンガリー料理、皆さん、ハンガリーに行かれた際には、(グヤーシュも美味しいのですが) ペルケルトを是非とも召し上がってくださいだと思います。

ハンガリーを知るための3冊

・ * ・ ... † ... ・ * ・ * ・ ... † ... ・ * ・ ... † ... ・ * ・



大島 一, 2006. 『ハンガリー語のしくみ』 白水社.

寝転んで読める語学書『ことばのしくみ』シリーズのハンガリー語版。初心者ターゲットではあるが、簡単に文法をおさらいするのに適しているのでは是非ご一読を。

... * * ————— * * ...

早稲田みか文, チョマ・ゲルゲイ写真, 2001. 『図説ブダペスト都市物語』 河出書房新社.

美しい写真とともにブダペストの様々な歴史が詳細に分かってしまう、ブダペスト好きなら必須の本。



... * * ————— * * ...



モルナール・フェレンツ作, 岩崎悦子訳, コヴァーチ・ペーテル絵, 2015. 『パール街の少年たち』 偕成社.

舞台は19世紀末のブダペスト。パール街 (Pál utca) にある“原っぱ”をめぐる少年たちの戦いを描く。最後の結末はいかにもハンガリー風だろうか。ブダペストではパール街のほど近くにあるプラーター通り 11 番 (Práter utca 11) に行くとよい。きっと彼らに会えることだろう。

... * * ————— * * ...

平成 26 年度 東京外国語大学オープンアカデミー

東京外国語大学語学研究所 企画

『言葉とその周辺をきわめる -3- 』

2014 年 10 月 28 日 (火) 第 4 回

「フィリピンの言葉は繰り返す」

東京外国語大学講師

長屋 尚典

0. はじめに

東京外国語大学の長屋尚典と申します。よろしくお願いします。今日は「フィリピンの言葉は繰り返す」というタイトルでタガログ語と呼ばれる言語の文法的特徴であるとか、どういうところで話されているだとか、そういうことについてお話したいと考えています。簡単な自己紹介なんですけれども、私はフィリピンやインドネシアのオーストロネシアと呼ばれる言葉の研究をしています。オーストロネシアというのが何なのかご存じない方もいらっしゃると思いますが、そのことは後々お話します。東京外国語大学ではフィリピン語と言語学の授業を担当しています。よろしくお願いします。

今日は、フィリピンとフィリピン諸語の全般的な概略を簡単に紹介した上で、フィリピンの言葉には繰り返すことによって意味を表現するさまざまな手段があるので、それについて少しだけ詳しく見てみたいと思います。世界の他の言語にはあまり見られない特徴なので、それを「こんな言語もあるんだなあ」というふうに思っただければと思います。今日お話する内容は全てハンドアウトに書いてありますが、お話自体はスライドに沿って進めていくので、スライドをみてください。

実際のお話に入る前に一つお断りしておきたいことがあります。言語名です。みなさんの中には「タガログ語」という名称を聞いたことがある方もいらっしゃると思います。また一方で「フィリピン語」というのを聞いたこともあるし、「フィリピン語」というのも聞いたことがある方もいらっしゃると思います。この3つの名称、実は基本的には同じものです。タガログ語というのはマニラ首都圏およびその近郊で話されている地方語としての名称で、その地域の人の母語です。そして、フィリピンが独立したときに、国家を統一する言語があればいいなとい

うことで、国語あるいは公用語として採用されたのがタガログ語で、この公用語としてのタガログ語をフィリピノ語と呼びます。タガログ語とフィリピノ語は違うと言う人もいます。たしかに理念的には違うんですけども、言語学的にはほぼ同じです。さらに、フィリピン語という名前もありますが、これはフィリピノ語を東京外国語大学ではそう呼んでいるというだけの話で、基本的にはフィリピノ語、あるいはタガログ語といます。今日の授業ではタガログ語と呼ぶようにしたいと思います。言語学で議論する際には中立的なタガログ語という名称を使うことが多く、フィリピノ語という政治的な名前は避けることが多いからです。

1. フィリピン共和国とフィリピンの言語状況

まず、最初に第1節では、フィリピン共和国とフィリピンの言語状況というものを少しお話しておきたいと思います。ご存じの方もいらっしゃるかと思います。フィリピン共和国の基本データです。

さて、まず国名です。フィリピンの正式名称は Republika ng Pilipinas。これはフィリピノ語での名称です。あるいは英語で Republic of the Philippines と呼ばれます。首都はご存じの通りマニラです。地理としては、7,000 を超える島々からなる大きな、日本と同じような島国です。人口は今は大体 9,400 万人ということで、世界 12 位です。どんどん増え続けているので、日本を人口で追い越す日も近いと思います。現在の国家元首は大統領で、Benigno Aquino 大統領です。政治体制としては共和制、通貨はフィリピン・ペソです。ペソというのはスペインの植民地であったところの通貨の名前としてよく使われていて、他にもメキシコ・ペソとかあるんですけど、フィリピンではフィリピン・ペソです。換算するときはフィリピン・ペソを 3 倍にすれば大体日本円という感じです。時間帯としては UTC+8 なので日本よりも一時間遅いことになります。シンガポールや北京とかバリとか、そのあたりと同じ時間帯です。宗教上はキリスト教徒が 90% を占めます。これはアジアの国としては珍しいです。ただ、イスラム教徒の人々もいて、特に南の方のミンダナオ島ではイスラム教徒が多いです。歴史としては、植民地の歴史が長く続いていました。スペインやアメリカ、そして日本に支配されていました。

フィリピンの地理の確認をしたいと思います。フィリピンは縦にたくさんの島が並んでいるような構造をしていて、大きく 3 つの地域にわかれます。まず一番北の大きい島をルソン島と呼ぶんですけども、ルソン島を中心とするルソン地

方が一つの大きなグループです。ルソン島には首都のマニラがあります。マニラは政治の中心で、タガログ語が話されています。次にミンダナオ島という大きな島です。ここにダバオという都市があつて、かつて戦前にはここに日本人が移民していて、大きな日本人コミュニティがありました。地図を見ればわかるようにミンダナオ島はマレーシアとインドネシアに近いです。昔から人の行き来が盛んにあつて、イスラム教徒も多いです。ですので、少し他とは毛色が違う地方です。最後に、ルソン島とミンダナオ島という2つの大きな島に挟まれたたくさん島々があるところ、これをビサヤス地方と呼びます。ここにセブという街があります。マクタン島があるところですね。ビサヤス地方は、日本企業もたくさん進出している、経済的にはかなり先進的な地域です。このあたりではセブアノ語という別の言語も話されています。

次に、言語です。フィリピンはこのような島国ですので、予想がつくように多言語国家です。そもそも土着の言語、オーストロネシア諸語と言いますが、そういう土着の言語が200くらいあります。全ての言語が若者によって活発に話されているわけではないですが、全部で200くらいあります。先ほど触れた、真ん中の方にあるビサヤス諸島というところではセブアノという言語がかなり有力です。あるいは、ルソン島の北の方ではイロカノ語というのがかなり強力です。しかもアメリカによって政治や教育のシステムが作られたので、英語もかなりよく話します。日常会話レベルならほぼ全ての人が英語を喋ると言ってもいいくらい喋ります。もちろん、うまい人と下手な人がいるんですけど、一般的に「英語が通じる国」といっても支障はありません。あと、中国からの移民も多くて、中国語諸方言も話されます。今はMandarinが非常に強いんですけど、以前はHokkienが盛んに話されていました。東南アジアにはたくさん中国系の人がいますが、その中でも特にHokkienという方言が強いです。

このようにフィリピン共和国は多言語国家なんですけど、そのような中でタガログ語がどういう位置にあるかというと、このような多言語国家の公用語という位置にあります。先ほど地理のところで申し上げましたが、タガログ語というのはスペインの植民地支配時代以来の政治の中心であつたマニラで話されています。ですので、スペイン人がここを中心にしようと思ったところでたまたまタガログ語が話されていたので、結果としてタガログ語が公用語として選ばれたということです。たまたまという側面があります。実際、公用語としてきちんと法律で定められたのは遅く、1987年です。

このような事情からも察することができますが、タガログ語が公用語であることを嫌と思っている人も結構いて、たとえば先ほど申し上げたように、経済の進んでいるビサヤスと呼ばれる地方、特にセブではタガログ語のことが嫌いな人が多くて、タガログ語を話そうとしません。

一応、政府もその事実気づいていて、ちょっと頑張っています。Pilipino「ピリピノ語」という言葉を耳にした方もいらっしゃると思うんですけど、実は Filipino 語、もともと Pilipino って呼んでたんです。でも、Pilipino だとタガログ語であるという印象が強いので、フィリピンの土着の言葉には存在しない [F] を利用して、「架空の言語だよ」ということで Filipino という名前になっています。それでも依然としてセブの人はフィリピノ語・タガログ語のことが嫌いですね。なので、公用語なんですけどあまり安定していません。

さらに、さっきも言いましたが、それに輪をかけて英語の重要性というものがあります。英語は公用語として依然使われていて、科学用語とかコンピューター用語、それは日本でもそうですけれど、そういう用語は基本的に英語です。政治経済の用語も英語、新聞も英語。よく語学を勉強する動機として、現地の言葉で新聞を読みたいとか、そういう夢を抱くこともあるんですけど、フィリピンの場合はいい新聞というのは基本的に英語で書かれているんですね。ですので、タガログ語の新聞というのはほとんど読むことができない。あと、法律も英語で書かれているので、タガログ語だけできても弁護士にはなれない。そういうようなところがあります。フィリピンは英語だけで大丈夫という話をときどき聞きますが、それはある程度までは事実です。

ということで、一人の人がいろいろな言語を話すフィリピンの言語状況が浮かび上がってくると思います。そもそも地方で話されている現地語あるいは地方語、そして公用語としてのフィリピノ語、そして公用語としての英語。少なくとも3つくらいはフィリピン人は喋ることができます。

2. タガログ語のプロファイル

そろそろタガログ語自体の話に入って行きたいと思います。まず一つ目ですけど、先ほど出てきたように、タガログ語というのはオーストロネシア語族と呼ばれる言語の一つです。ではそのオーストロネシア語族というのは何なのかというと、1,200 もの言語を擁する世界最大級の言語グループのことです。世界の語族としてはインド・ヨーロッパ語族というのが有名で、英語などヨーロッパで話さ

れているほとんどの言語とインド・イランの言語などをまとめた言語グループのことを指しています。タガログ語の場合はオーストロネシア語族と呼ばれていて、台湾の原住民語や、フィリピンやインドネシア、マレーシア、そういうところで話されているほとんどの言語、あるいはマダガスカル島で話されている言語とか、ニューギニア島の沿岸部で話されている言語とか、ハワイ、ニュージーランド、イースター島、フィジー島とか、いろんなところで話されている言語、これを含めてオーストロネシア語族といいます。そのなかの一つです。

オーストロネシア語族が話されている地域は、西はマダガスカル、北は台湾、南はニュージーランド、東はイースター島まで、かなり広い範囲です。これらの言語が一つの語族をなすということは、この地域で話されている言語は全てもともと一つの言語だったということです。それをオーストロネシア語族といいます。フィリピンの言語はその中のひとつです。たとえば、ジャワ島で話されているジャワ語というのは、水のことを「ワイ」と言います。距離としてはかなり離れているんですけど、ハワイ語でも水を「ワイ」と言います。ワイキキと言いますよね。ワイキキビーチ。ワイキキというのは「湧き出る水」、水がワイなんですね。そのワイがハワイでも使われているし、インドネシアでも使われている。フィリピンでももちろん使われています。タガログ語には出てこないんですけど。そういうふうに、これらの言語はひとつのグループをなしています。そういうスケールの大きい言語を今日はひとつ勉強するということです。

もちろんこういうお話をすると、そもそもオーストロネシアの人々はどこから来たんだというのが気になると思うんですけど、今のところ言語学、人類学、あと生物学的ないろんなデータを集めると、だいたい以下のように推定できます。そもそも、現在のフィリピン、インドネシア、ニュージーランド、ニュージーランドと言ってもマオリ族のことですけど、あとフィジーとか、そこらへんに住んでいた人々は、もともと台湾にいたと考えられています。台湾からフィリピンに渡って、西インドネシアに入ってから、東インドネシアを経て、ニューギニアを経て、そこら辺の島々に進出して行ったと考えられています。こういう経路ですので結構スケールの大きな話です。タガログ語はその中の一つです。

文字はどうかと言いますと、文字は非常に簡単です。アルファベット 26 文字が余くらい簡単です。そのまま読めばいいです。ローマン・アルファベットで表記されて、たとえば “Para po sa inyong...” のようにそのまま読めばいいので簡単です。タガログ語はそのまま書かれます。ただ、もともとローマン・アル

ファベットで書いていたかというそうではなくて、昔はインド系の文字が存在していて、バイバイン (Baybayin) という文字が使われていました。今でも大学の卒業式とか、大学のシンボルとかでは使われているんですけど、日常生活ではほぼ使われてはいない。そういう文字です。

次は語彙のお話です。さっきフィリピンの歴史をちょっとだけお話したんですけど、そのことからわかるように、いろんな文化がフィリピンには流入しています。その結果、当然のことながら、タガログ語の語彙にもいろいろな言葉が入っています。もともとオーストロネシア系の、つまりもともと先祖伝来の言葉に、マレー語から入ったサンスクリット語の単語とかも入っています。今でいうマレーシア・インドネシア経由で入っています。たとえば、顔のことを mukha って言うんですけど、これはサンスクリットです。あるいは、中国人商人との商売を通して、Hokkien とかの中国語系の言葉も入りました。たとえばお兄さんのことを kuya、お姉さんのことを ate と言うんですが、これは中国語系の単語だと言われています。更に、スペインの植民地だったので、当然スペイン語も入っています。ただ意味がちょっと変わっている場合があって、たとえば siyempre だと「もちろん」という意味になっています。あるいは、英語系の語彙ももちろんあって、gr<um>aduate だと「卒業する」、graduate に<um>というのが入っているんですけど、このことは後で説明します。もちろん、日本語からも少しずつ入っていて、タガログ語で「麻薬」は shabu っていうんですね。これ冗談で書いてるわけではなく、あるいは、一部の人だけが使っているとかそういうことではなくて、ニュースで「麻薬」と言う時に shabu って言います。本当です。なぜか悪い言葉はよく日本から来ています。他にいいのを紹介できないんですけど、shabu というのはよく使われます。ニュースでも、一週間に一回は shabu って聞きます。

そういうことなので、タガログ語を話すときには、いろんな言語、言葉を使つて、混ぜながら話します。たとえばこれ実際のタガログ語の例文なんですけど、“So, nag-log-off ako sa Facebook.” (だから、私はフェイスブックからログオフした。) みたいな感じで、log off とか Facebook とか、so とか英語を混ぜて実際に使っている。あるいは、“Mag-boyfriend si Mike at si Joy”のように、boyfriend というのを動詞として使うと「付き合っている」という意味になるので、「Mike と Joy が付き合っている」とか、そういうふうに英語とタガログ語を混ぜながら話しています。このようなスタイルを特に Taglish と呼ぶことがあり

ます。Tag(alog) + (Eng)lish ということです。このように、この国の言語というのは、いろんな言語を混ぜ混ぜして使っている、そういうところがあります。

3. タガログ語の音声の特徴

これまでで社会的な背景というのをご説明しましたが、次からもう少し言語学的な内容のある話をします。まず、タガログ語の音声的な特徴です。日本人にとってのタガログ語の音声的な第一の特徴は、簡単ということです。日本人が外国語を勉強すると、この発音が難しいとか、この発音が苦手だとかあると思うんですけど、タガログ語の場合、大体聞き取ってもらえるというか、簡単です。子音もほぼ日本語にあるものですし、母音も a, i, u で、英語だと狭い e とか広い ε とか、面倒くさいことをやらなければならないんですけど、タガログ語の場合、日本語の母音 5 つも要らない感じで 3 です。潔いですね。しかも声調もない。中国語のように mā, mà とかやらなくていいんですね。

ただ、もちろん気をつけなくてはいけないこともあって、l と r の発音だとかです。これは日本人が外国語を学ぶ以上、どこでもぶち当たるんですけどね。あと声門閉鎖音。声門閉鎖音というのは日本語にもあって、二回「あ、あ」という時に「あ」と「あ」の間にポーズが勝手に入りますよね。あるいは、「あーっ」って言って急に息を止めると喉が閉まりますよね。この閉まるのが一つの音なので、それを使ったりします。あるいは、子音で終わる音節とか、いろいろ発音としてはこだわらなくてはいけないところは多少あるんですけど、これで大体終わりという感じですね。実のところ、東京外国語大学でひと通りの文法を終えるのに 2 年かかるんですけど、発音は一週間で終わります。正確に言うで一週間もかけません。1 回で終わるくらいで、あとはずっと文法をやっています。

もちろん一筋縄ではいかないところもあって、アクセント、強勢があります。英語のように強勢の位置で意味が変わる言語なので、そこは少し気をつけなければいけません。たとえば、「いも」というのは gábi って言うんですね。「夜」だと gabi になって、gábi, gabi、気をつけなきゃいけないんです。「午後」だと hápon になるんですけど、「日本人」だと hapón というふうになってきます。「犬」だと áso、「煙」だと asó というふうになります。この区別は非常に重要で、たとえば挨拶の言葉として「こんばんは」というのに “Magandang gabi.” という表現があるんですね。“Magandang gabi.” というのは、「美しい」maganda というのに gabi 「夜」、「美しい夜」で「こんばんは」という意味なんですけど、

gabi というのは発音を間違えると「いも」になるので、“Magandan gabi.” っていうと、「こんばんは」って言いたかったのに「美しいいも」っていうふうになって笑われてしまいます。

4. タガログ語の文法の特徴

では次はタガログ語の文法の特徴の話に入っていきたいと思います。

タガログ語は、今まで音が簡単だということを何度も繰り返してきたので、あたかも2-3ヶ月でマスターできるとか、そういう印象を与えてしまうかもしれませんが、実は文法がちょっと厄介です。他の言語とかなり変わっています。今年度の公開講座で出てくる言語の中で多分最も日本語と変わっています。まず何が変わっているかというと、動詞が最初に来ます。語順が変わっています。最初に動詞が来るというのはなかなかショッキングな事実で、時々言語学のことを、あるいは、言葉のことを何も知らない人に「タガログ語はどんな言語ですか？」と聞かれて、「動詞が最初に来るよ」と教えてあげることがあるのですが、それがなかなか信じてもらえないんです。でも、本当に動詞が最初に来ます。

逆に言うと、動詞が最後に来る日本語と語順が全く逆です。たとえば、「昨日アドボを子どもが食べた。」という文です。アドボというのはフィリピンの代表的な料理なんですけど、そのアドボを子どもが食べた、と言いたければ、“Kumain ang bata ng adobo kagabi.” っていうんです。kumain「食べた」、ang「が」みたいなものですね。bata「子ども」、ng「を」、adobo「アドボ」、kagabi「昨晚」。“Kumain ang bata ng adobo kagabi”、「食べた」「が」「子ども」「を」「アドボ」「昨晚」で、なんか宇宙人の言葉みたいなんですけど、これを右から読むと、「昨日アドボを子どもが食べた」というふうになって、ちょうど日本語と真逆です。なので、全然発想が違うというか、反対なんですね。変わっています。そういう言葉を話す人々がこの太平洋を挟んだ島々に1億人くらいいるわけですね。結構驚きです。

確かにこの事実は変わっています。みなさんご存じかもしれないんですけど、人間の言語の語順について調べた人がいて、その結果、人間の言語の語順は圧倒的にSOV型とSVO型が多いことがわかっています。つまり、日本語みたいに「太郎が花子を褒めた」みたいなSOV型、あるいはSVO、これは英語みたいに「太郎が褒めた花子を」みたいな語順、そういうふうなのが圧倒的に多いんですね。ですので、日本語みたいなタイプ、日本語、ヒンディー語、韓国語、ビルマ語、

モンゴル語、トルコ語などの言語は SOV で、そういう言語がかなり多くて、その次に、英語、中国語、あるいはインドネシア語みたいな言語が来ます。タガログ語のような VSO 言語というのは世界の言語の 10% 以下なんです。そういうふうな珍しい特徴をこのタガログ語は持っています。

さらに不思議なものがいっぱいこの言語にはあります。たとえば、「リンカー」という要素があります。普通、日本語ですと、「美しい花」とか「おいしい料理」というふうに、あるいは英語でも、“beautiful flower” の beautiful と flower みたいに、形容詞と名詞の間に何も入れないんですけど、タガログ語はリンカーというものが、形容詞や名詞を結びつける際に使われます。たとえば、おいしい料理と言いたければ、masarap 「おいしい」、pagkain 「料理」の間にリンカーを入れて、“masarap na pagkain” っていうふうに言います。リンカーというものを必ずはさみます。しかも語順が自由なので、「おいしい料理」って言うために、“masarap na pagkain” って言ってもいいんですけど、“pagkain na masarap” って言っても意味が同じ。そういうようなおもしろい特徴を持っています。あるいは、名詞と関係節も同じです。ここでいう関係節は英語の関係節みたいなものです。それで「Tom が修理した家」と言いたければ、bahay 「家」、na リンカー、“ipinaayos ni Tom” 「Tom が修理した」というふうな構造になるんですけど、名詞と関係節をそのままくっつけるんじゃなくてリンカーを使います。さらに、“bahay na ipinaayos ni Tom” とか、語順をひっくり返して、“ipinaayos ni Tom na bahay” と言ってもいい。そういう特徴があります。更には、数字と名詞をくっつける時にもリンカーというものを使って、“apat na aso” だと、「4 匹の犬」。このように、他の言語には見られない、リンカーという要素もあって、そこが少し変わっています。勉強しようとする、そういうところも覚えなきゃいけないし、結構いろいろ面倒くさいなという面があります。

文法的特徴はまだまだありまして、これは結構おもしろいところなんですけど、接辞がいっぱいという特徴も持っています。接辞というとちょっとわかりにくいかもしれませんが。もしかしたら英語の授業で出てきたこともあるかもしれないんですけど、接頭辞とか、接尾辞、そういうものを合わせて「接辞」といいます。英語の授業で出てきたのは接頭辞ですよね。install に un- をつけると、uninstall となって意味が変わる。その un- のことを接頭辞といいます。こういうふうに語根の前につく接辞を接頭辞といいます。あるいは接尾辞、install から installer で、-er をつけると別の意味の単語ができる。その -er のことを接

尾辞といいます。これらに加えてタガログ語は「接中辞」というのも持っています。接中辞というものは、語根の中に割り込む。後で例をお見せしますが、語根の中に割り込みます。これ、びっくりなさってる方がいるかもしれないんですけど、びっくりなさるのは当然で、かなり珍しいです。あとさらに「接周辞」というものもあります。接周辞というのは、語根を取り囲むように接辞がつく、そういうふうなものです。世界に言語はたくさんあるんですけど、タガログ語やフィリピン言語のようにこの 4 つが全て一つの言語で出揃うというのはかなり珍しいことです。なので、ちょっと例を見てみてください。

まず一つ目です。接頭辞。これはどこの言語でもあるので、そんなにびっくりすることではないんですけど、たとえば、maN-。これ音がころころ変わるので大きい N で書いています。ここでは無視してください。動詞を作ります。「魚」isda といいます。それに maN- をつけると、mangisda「漁をする」っていうふうな意味の動詞が出来ます。語根 isda の前に maN- が出てきてます。これはまあよくあることです。

あと接尾辞。-an というのがあります。場所名詞を形成します。kain「食べる」なので、それに -an をつけると、kainan「レストラン」っていうふうな意味が出てきます。これも別にそんな驚くことはありませんね。

接中辞にいきます。接中辞 <in> っていうのがあります。接中辞は <> で示すことが多いんですけど、この接中辞を使うと、動詞の完了相を形成することができます。「終わった」ということです。たとえば、kain「食べる」っていう語根に <in> を入れます。kinain「食べた」です。これどこに入ってるかわかりますか？ kain の途中に <in> が入ってるんです。kain の k と ain の間に <in> を入れているんです。結果として kinain という形が出来ます。今、東京外国語大学の一年生はこのあたりをやってるんですけど、「先生、どうしてこの位置に入るんですか」「意味が分かりません」とかね、色々聞いてくるんです。でも、言葉がそうになっている以上、私はどうしようもない。語学にはそういう側面があります。

次は接周辞です。たとえば抽象名詞を作るときには語根を ka- と -an ではさみます。「美しい」っていうのは ganda っていうんですけど、「美しさ」といいたいときに、ganda を ka- と -an で挟むと、kagandahan というふうになって、「美しさ」というふうになります。「美しい」という意味を抽象名詞にしようと、ka- と -an 両方使わなきゃいけないんですね。便利なのか不便なのかよく

わかりません。これも珍しいといえば珍しいです。

まだまだタガログ語の面白い特徴は続いています。タガログ語の格標識です。日本語だと、「誰かが何かをやった」ということを言うために、「が」とか「を」とか「に」とか、そういうふうな格助詞を使いますよね。「太郎が花子を褒めた」というふうに使うんですけど、タガログ語の場合はそのような文法的な関係を表現するために、名詞の前に冠詞みたいな標識、マーカーを使います。たとえば、主格「が」みたいなことを表現するためには *ang* を使います。属格、日本語の「の」にあたるのには *ng* を使います。場所格「で」ということを表現するためには、*sa* を用います。このように *ang*、*ng*、*sa*、タガログ語は3つしかありません。この3つを組み合わせることで意味を作っていくようになります。そこが変わっています。なので、日本語だと「が」「を」「に」「で」「より」「から」とか格助詞はたくさんありますが、タガログ語は3つだけなんです。簡単でいいといえば簡単でいいんですけど。

表 1: タガログ語の格標識

	主格	属格	場所格
普通名詞	<i>ang</i> [aŋ]	<i>ng</i> [naŋ]	<i>sa</i>
人名 (単数)	<i>si</i>	<i>ni</i>	<i>kay</i>
人名 (複数)	<i>sina</i>	<i>nina</i>	<i>kina</i>

ただし、他の言語とすこし違うところがあって、普通名詞か人名か、人名单数か、人名複数かで使う標識が異なっています。なので、たとえば、「犬」*aso* だと普通名詞なので *ang aso* でいいんですけど、*John* だと、*ang John* ということとは出来なくて、人名なので、*si John* と言うとか、そういう区別が存在します。なので、日本人がこだわるような「てにをは」の区別はあまり気にしないんですけど、日本人が気にしない、人か物かとか、そういうふうなことは気にしちゃう。ちょっと日本人とうまくいきそうにない、そういう言語です。

さらに、結構いろんな言語で見られるんですけど、タガログ語には「私たち」が2つあるという特徴があります。どういうことかと申しますと、「私たち」を意味する形には2つあって、「包含形」と呼ばれる形と「排除形」と呼ばれる形があります。包含形というのは、聞き手を含む「私たち」、たとえば私が今「私たち」というと、包含形を使うと、全員、聞き手を含むわたしたち。排除形というものを使いますと、聞き手を含まない私たち、たとえば、私が今この排除形を

用いますと、みなさんを含まない「私たち」という意味になります。そういう区別を一生懸命この言語はします。

たとえば、次のような場合、違いが大きく出ます。“Filipino kami.”あるいは“Filipino tayo.”という表現です。Filipino というのはフィリピン人です。どちらの表現も日本語としては「わたしたちはフィリピン人です」という訳になりますが、もしここで包含形の tayo を使いますと、つまり“Filipino tayo.”と言いますと、喋っている私と、みなさん全員がフィリピン人であるということを私が言ったことになります。ところが、一方で、ここで排除形、kami を使いますと、つまり、“Filipino kami.”と私が発言すると、聞き手は含まれていないので、みなさんはフィリピン人ではない。そういうふうな意味的な違いがあります。日本語にはそういう区別はないのですが、タガログ語にはそういう区別が存在していて、そこが日本語と異なっているということです。

次の話題に行きます。テンスとアスペクトです。ここ、少しだけ内容が難しいというか、理解しにくい部分があって、タガログ語を教える際に、何度も説明するところなので、一回できちんと説明するのは難しいんですけども、テンスとアスペクトという考え方があります。テンスというのは、ある事態が過去のものか、現在のものか、未来のものか、そういう区別です。そのことをテンスといいます。英語だと、過去だったら過去形を使って、現在だったら現在形、未来だったら未来形。ところが、アスペクトというもう一つの考え方もあるって、アスペクトは、テンスのような過去か現在とか未来とかに関わらず、事態が終わっているか、今進行中なのか、あるいはまだ起きていないのか、そういうふうな区別のことです。日本語は少なくともテンスを持っています。たとえば、「雨が降った。」と言えど過去のことですよね。ところが、「雨が降るだろう。」といえど未来のこと、ということなんです。

タガログ語がおもしろいのは、テンスのことは全然気にせずに、アスペクトの方ばかりに目を向けることです。たとえば、T<um>a-takbo ako kahapon. は「私は昨日走っていた。」というふうに、過去の文です。T<um>a-takbo ako ngayon. は「私は今走っている。」という現在のことです。T<um>a-takbo ako bukas. は未来のことで、「私はその時走っているだろう。」っていうふうなことを表しています。なのでこの3つの文というのは、過去、現在、未来というふうに、テンスの概念としては全く別の事象を表している文なんですけど、タガログ語の動詞はテンスに関心がないので、全部同じ形の動詞を使います。走っていた

時も進行していたので t<um>a-takbo という形を使って、今のことも「走っている」という日本語訳になるにも関わらず、t<um>a-takbo というふうになって、「走っているだろう」というときも、やっぱりその時走っているんだから、t<um>a-takbo っていうふうになります。もう一回言うと、日本語は過去か現在か未来ということに対して別々の動詞の形を持っています。ところが、タガログ語はそんな区別はどうでもいいんですね。起こっているのか、終わっているのか、今最中なのか、それだけに関心があるので、表す意味が進行である限り、過去だろうがいつだろうが、全て同じ動詞の形を使いつづける、そういうふうな特徴を持っています。テンス、現在とか過去とか未来、そういうのはどうでもいいんですね。明日のことか、昨日のことか、もちろん、さすがにフィリピン人も明日とか昨日とか区別できるんですけど、言語としては一切区別しません。そういう言語です。

このようにタガログ語はアスペクト、つまり進行中なのか、終わったことなのか、未来のことなのか、そういう3つの区別に非常にこだわるんですけど、その結果、複雑な動詞変化を持っています。ここで一番重要なことは、パッと見て「うわ、複雑そう」というふうに思っただけのことです。なので「これどういうふうになっているんだろう」とか、そういうふうなことは今は気にしないでいいんです。非常に複雑です。なので、私は今年一年生にはこういう表、Excelの表みたいなのを渡して、ずっと活用の練習をさせているような状態です。活用方法がいっぱいある上に、動詞によって活用のやり方が違ったりします。タガログ語を勉強している人はこの活用のあたりで「うわー、めんどくさそう」と思ってタガログ語が嫌になってしまいます。実際、真剣に取り組むとこの活用もそれほど難しいわけでもないのですが、最初はやっぱり難しいと思います。

表 2: 動詞の活用 (例)

基本形	完了形	未然形	未完了形
t<um>akbo	t<um>akbo	ta-takbo	t<um>a-takbo
mag-lakad	nag-lakad	mag-la-lakad	nag-la-lakad
ma-tulog	na-tulog	ma-tu-tulog	na-tu-tulog
bilh-in	b<in>ili	bi-bilh-in	b<in>i-bili
bigy-an	b<in>igy-an	bi-bigy-an	b<in>i-bigy-an
i-lagay	i-ni-lagay	i-la-lagay	i-ni-la-lagay

次に意図性です。タガログ語は意図性に敏感な言語です。そういう特徴もあります。これはどういうことかという、タガログ語というのは、意図的に行為を行ったかそうでないかで動詞の形を変えます。たとえば英語で “I broke John’s iPhone” 「私はジョンの iPhone を壊した。」と言った時に、これは意図的に行ったのか、非意図的に行ったのか、わかりません。英語で broke 「壊した」って言ってもそのことだけではわかりません。これよく考えると不便なことです。日本語でもそうですよね。「私は昨日足を折った」って言って、それ偶然なのか、自分で「えいっ」て折ったのかわからないですよね。結構不便なんですけど、タガログ語だとそういうことはありません。というのは、意図的かどうかで動詞の形が変わります。

(1) 意図的に起きた場合 (s<in>ira):

S<in>ira-ø ko ang iPhone ni John.
 <RL>break-PF 1SG.GEN NOM iPhone P.GEN John
 私はジョンの iPhone を(意図的に)壊した。

(2) 非意図的に起きた場合 (na-sira):

Na-sira-ø ko ang iPhone ni John.
 ST.RL-break-PF 1SG.GEN NOM iPhone P.GEN John
 私はジョンの iPhone を(意図せずに)壊してしまった。

たとえば、壊すというのは sira なんですけど、ジョンの iPhone を意図的に壊した場合は、s<in>ira-ø という形を使って、“S<in>ira-ø ko ang iPhone ni John.” 「私はジョンの iPhone を (意図的に) 壊した。」。s<in>ira-ø という形を使います。ところが、非意図的に、うっかりして、あー、落としたらいきなり煙が出てきた、とかそういうときには、na-sira-ø という形を使います。“Na-sira-ø ko ang iPhone ni John.” 「私はジョンの iPhone を (意図せずに) 壊してしまった。」。s<in>ira-ø と na-sira-ø。このように、意図的かそうでないかで動詞の形が結構違います。同じ sira というのをを使うんですけど、ちょっと違うということです。なので、ある意味便利なんですね。意図的か非意図的かというのが、動詞をちょっと変えるだけで理解してもらえる。ただし逆に言うと、間違えた時のダメージが大きいです。たとえば、ホテルに行ってシャワーを壊したときに、非意図的なのに、意図的な方で言ったら、「弁償してください」っていうふうに言われるの

で、気をつけたほうがいいですよ。タガログ語を学ぶ学生には絶対きちんと覚えてくださいと言っています。

そして、「焦点」。これが文法的特徴の最後です。かなり変わっていて、一回できちんと理解していただくのは難しいかもしれない現象です。なぜならこの現象こそフィリピン諸語の最も花形の言語現象であると同時に、学習者にとって最も障害となる現象なんです。それがタガログ語の「焦点」という現象です。あるいは「フォーカスシステム」「焦点システム」とも呼ばれます。これは、主語が何であるかによって動詞の形が変わる現象です。あるいは、別の言い方をすれば、主語がどういう意味かによって動詞の形が変わる現象です。

(3) 行為者を主語にする:

K<um>ain ang lalaki ng mansanas.
eat<AF> NOM man GEN apple

「その男の人はりんごを食べた。」

(4) 行為の対象を主語にする:

K<in>ain-ø ng lalaki ang mansanas.
eat<RL>-PF GEN man NOM apple

「そのりんごは男の人が食べた。」

(5) 行為の場所を主語にする:

K<in>ain-an ng lalaki ang pinggan niya.
eat<RL>-LF GEN man NOM plate 3SG.GEN

「彼のお皿で男の人が食べた。」

(6) 行為の受益者を主語にする:

I-k<in>ain ng lalaki ang babae.
CF-eat<RL> GEN man NOM woman

「その女の人のために男が食べた。」

たとえばどういうことかという、kain「食べる」という動詞は、何を焦点にするかで異なる形を持ちます。これは具体例を見た方がいいです。たとえば、これらの例文の動詞の形だけ見てください。まず、行為者です。食べるという事象が生じるには当たり前ですが行為をした人がいるので、行為をした人を主語に言うときには、k<um>ain という形を使います。それはそうかという感じです

ね。それで、食べるという行為には、当然食べられた物があるわけですね。今度は食べられた物を主語にします。すると、動詞の形が変わります。さっき、主語が行為者だった、何か食べた人が主語だったら $k\langle um \rangle ain$ 。でも食べられた物が主語だったら $k\langle in \rangle ain-\emptyset$ ということになります。動詞が違ふ。更に、今度は食べるということには場所がついてますから、その場所を主語にすることができます。そうすると、 $k\langle in \rangle ain-an$ という形になります。また別の形が出てきます。さらに、何かの事情で食べるべきものを食べられない人がいると、その人の代わりに別の人が食べてあげるということがありますよね。そのとき、その別の人を主語にすると、 $i-k\langle in \rangle ain$ という形になってしまいます

このように、同じ「食べる」ということを表現するのに、食べる人なのか、食べる物なのか、食べる場所なのか、その人のために食べる人なのか、あるいは、ここには書かれていないんですけど、食べさせる人だとか、食べさせる物だとか、それが何であるかによって、動詞の形が変わります。こういうふうになると、「なぜそんなことをするのかわからない」という感想を持つと思うんですけど、世界にはそういうことをする言語があつて、それがタガログ語なんですね。主語がどういう意味か、食べた人なのか、食べられた物なのか、場所なのか、利益をもらう人なのか、そういうふうなことによって動詞の形を変えるんです。かなり難しいです。なんとなく、動詞が変わっているなというところがわかつていただければそれで充分です。

ただ、一つ付け加えておくと、この「焦点」という現象を持つのは世界の言語でもフィリピンの言語だけです。とても珍しいです。接中辞も接周辞も探せばいろんな言語にあるんですけど、この「焦点」というのはフィリピン諸語ぐらいしかなくて、珍しいです。なので、言語類型論の用語で「フィリピンタイプ」という用語があつて、これはどうしてかという、フィリピン諸語が言語学的にあまりにも変わっているのと、とりあえず名前をつけてみた、そういう用語なんです。

ここまで、動詞の意図性やら活用やら「焦点」やらを見てきましたが、タガログ語の動詞がかなり複雑なことがわかったと思います。こういうわけで、タガログ語というのは動詞をやらなければとても簡単な言語なんですけど、動詞をやると非常に難しい言語になっています。どのぐらい難しいかといいますと、東京外国語大学ではタガログ語を勉強する人は4年のうち、2年文法をやります。2年のうち、1年半が動詞なんです。それくらい難しいですね。そもそも文法に2年かけるというのが例外的で、他の言語だと、インドネシア語とかマレーシア語み

たいな言語だと、一学期で文法を終えることができる。なのに、フィリピンの学生は2年間もずっと文法をやって、しかも1年半がずっと動詞なのです。「今日はこの動詞を勉強します」「こういう意味です」「活用はこれです」「覚えてください」の繰り返しが1年半続きますね。しかもフィリピンではタガログ語を使わなくても英語が通じますから、勉強するにはいい覚悟がないと出来ないですね。

5. フィリピンの言葉は繰り返す

最後のテーマに入りたいと思います。実はこれが今日の本題でもあります。フィリピンの言葉には繰り返して意味を表現するということがあるということをお話したいと思います。どういうことかといいますと、タガログ語を含むフィリピン諸語の特徴には重複というものがあります。これ普通の日本語ですよ。『じゅうふく』とも読むそうです。『じゅうふく』『ちょうふく』。私は『ちょうふく』と読んでいますけど、『じゅうふく』と読んでも構いません。重複と呼ばれる現象は、単語の一部または全体を繰り返すことで新しい単語を作る操作です。そういうことを言うと、日本語でもあるじゃないか、日本語でも複数表現する手段として、『人』から『人々』、『山』から『山々』、『国』から『国々』、『村』から『村々』というふうに作ることができるじゃないかと思われる方もいらっしゃると思います。たしかにそうです。これも重複です。

しかし、フィリピンの言語の重複というのはこんなレベルではありません。重複をたくさん使います。かなり複雑に使います。しかも、文法的な意味まで表現します。そこが変わっています。面白いです。たとえば、最初は簡単なやつですね。複数を表現する繰り返しがあります。タガログ語では、語根の最初の二音節を繰り返すことで、名詞や疑問詞の複数形を作ることが出来ます。たとえば、*bagay* 「もの」です。*bagay-bagay* というと、『もの (複数)』、これは別に大したこと無い。*ano* 「何」の複数形は *ano-ano* といいます。市場とか行って、たくさん買ったことが予想されるときに、『*ano-ano* 買ったの?』と聞けます。あと、*sino* って言うの『誰』なんですけど、*sino-sino* で『誰々』、複数。『今日のパーティーには *sino-sino* 来るの?』のように使います。あるいは『どこ』*saan* とか。*saan-saan* というと、『どこどこ』、複数です。たとえば、海外旅行に行った人がいたら『*saan-saan* 行きましたか』と聞くことができる。そういうふうな複数です。これは大したことないです。

次に、タガログ語では繰り返すことで未来が見えてきます。語根の最初の CV、

子音と母音を繰り返すことで、動詞の未然相、まだ起きていないことを表現することが出来ます。たとえば、「読む」というのは mag-basa といいます。「読むだろう」と言いたいとき、語根 basa の最初の CV を繰り返して、mag-ba-basa といいます。これで「読むだろう」。ma-tulog これは「寝る」です。これを「寝るだろう」といって、未然相を表現したいときは、ma-tu-tulog といいます。語根の最初の子音と母音を繰り返すことで、未来形ができます。kun-in 「取る」という意味です。これを未来のことについて使いたければ、ku-kun-in。「助ける」 tulung-an を未然相で言いたければ、tu-tulung-an といいます。「与える」は i-bigay といいます。「与えるだろう」といえば、i-bi-bigay となります。これはとても生産的な重複で、タガログ語の動詞が一万ぐらいあったとしたら、一万ある動詞のうち一万全部この重複が使えます。おもしろいですね。日本語だと繰り返しても数が大きくなるという意味ぐらいしかできませんが、タガログ語だと未然相ができちゃいます。

更に当たり前といえは当たり前のこともできて、「繰り返し」を表現するときにも形式を繰り返します。具体的には、語根の最初の 2 音節を繰り返すことで、繰り返しを表現することができます。たとえば、一週間の「週」を linggo といいます。スペイン語です。「毎週」って週がいっぱいということなので、linggo から linggo-linggo と言えば「毎週」です。「日」のことを araw といいます。「毎日」というのは araw-araw。日本語でも「日々」とか言えますね。あるいは、「朝」は umaga と言うんですけど、最初の 2 音節なので、つまり、最初の 2 音節は uma までなので、uma-umaga という「毎朝」という意味になります。tanghali と言うと、「昼」なんですけど、「毎昼私はスパゲッティを食べます」とか、そういうことを言いたいときは、tangha-tanghali です。繰り返すとそういう意味も出てきます。

あと isa 「ひとつ」から「ひとつずつ」だと、isa-isa とか。baso 「コップ」を用いて、「コップずつ飲みなさい」「コップずつ水を入れなさい」とかだと、basu-baso みたいな言い方ができます。そういうふうな繰り返しを表現するときに繰り返す、そういうパターンもあります。

更に、これはある意味当たり前なんですけど、強調を表現することもできます。たとえば、ang ganda というのは「美しい!」という意味なんですけど、それを繰り返すことで、ang ganda-ganda というと、「とても美しい!」という意味がでます。「強い!」というのを ang lakas と言うんですけど、この ang lakas 「強

い!」というのを繰り返すと、つまり、ang lakas-lakas と言うと、「とても強い!」。ang taas と言うと、「高い!」。ang taas-taas と言うと、「とても高い!」。ang talino 「頭がよい!」は ang tali-talino になって「とても頭がよい!」というふうに、強調も表すことが出来ます。これは、フィリピンの形容詞ほぼ全て、大体これが出来ます。このように重複は強調を表現することもできます。

最後に紹介するのが面白いんですけど弱化です。さっき、形容詞「美しい」「強い」「高い」「頭が良い」っていうのを、ang を付けた状態で繰り返すと、「とても」という意味が出ると言いました。強調です。しかし、同じ重複が「ちょっと」を表現する場合もあって、なんと、さっき、ang ganda 「美しい」を ang ganda-ganda にすると「とても美しい」になったんですけど、ma-ganda っていう場合に、ma-ganda-ganda のように、ma- を付けた状態で繰り返すと「ちょっと」というふうになります。意味が弱くなるんですね。繰り返すと逆効果というか、意味が弱化しちゃうんですね。薄くなっちゃう。なので、ma-lakas-lakas っていうと「ちょっと強い」、ma-taas-taas と言うと、「ちょっと高い」、ma-talino 「頭が良い」なんですけど、ma-tali-talino だと「ちょっと頭が良い」です。だから同じ重複でも、ma- の場合は「ちょっと」になって、ang の場合には「とても」というふうな意味がでしまいます。日本語だと繰り返すと量が多くなるだけなんですけど、この言語だとどういうふうに組み合わせるかによって、「とても」を表したり、「ちょっと」というのを表したりして、いろいろ異なってきます。

もちろん、これはフィリピンの言語を学ぶときに重要です。繰り返せば意味が強くなるだけだなと思っていて、「とても美しい」ってある人に言いたい時に、実際には「ちょっと美しい」と言ってたとか、そういうふうなことになりかねません。あるいは、学生があまり出来ないので「ちょっと頭が良いね」と言おうとした時に、間違って「とても頭が良い!」って表現を使っちゃうと図に乗ったりします。

ここではスペースの都合上、例はあまり挙げていませんが、他にもよく使われる表現があって、繰り返すことによって偽物を表すっていうものもあります。たとえば、balita というと「ニュース」という意味なんですけど、bali-balita というと「噂話」「根拠の無いデマ」みたいな意味になったりします。同じことを繰り返して話す人ってちょっと怪しいんで、そういうことがあるのかもしれませんが。

ということで、フィリピンの言葉は繰り返すことによっていろんな意味を表現することができます。ここまで重複を用いることが出来る言語ってそれほど多くはなくて、ここではタガログ語を用いてそのような言語をご紹介しました。

6. おわりに

タガログ語をはじめとするフィリピン諸語は他の言語に見られない興味深い特徴を持っています。しかも、フィリピンというのは日本の隣の国です。そういう近いところなんですけど、日本語とは全く異なる、語順や発想が正反対であるような言語が話されている。そういう言語の特徴、特に今回は繰り返して単語を作る特徴についてご紹介しました。今日のお話を通してフィリピンの言葉というのは面白いなというふうに思っていたらいいなというふうに思っています。本日はどうもありがとうございました。(了)

※ 本稿は公開講座における講演を文字起こししていただいたものに加筆修正したものである。舌足らず・不正確な部分は修正したが、講座の雰囲気伝えるため口語的表現はあえて残した。

コラム †

前髪をあげるとき



フィリピン人の大学生には前髪がない(ことが多い)

…・*・—————・*・…

東京外国語大学言語文化学部の3年生にSさんという学生がいる。本学でタガログ語と言語学を学んでいるが、2015年度は休学し国際交流基金の日本語パートナーズプログラムに参加しており、現在はフィリピンのマニラで日本語教師のお手伝いをしている。そんなSさん、フィリピンに着いたばかりのころは、学生に「先生はどうして前髪を下ろしているのですか？ フィリピンで額が前髪で隠れていると外国人に見られますよ」と言われたらしい。「前髪のあるなしなんて関係あるのかな」と怪訝に思いつつも、学生の言葉が気になって、試しに前髪をピンで留めて額を出すようにしてみたら、街を歩いても日本人として扱われることが少なくなり、フィリピン人として接してもらえる機会も増えたそうだ。変わったのは前髪だけなのである。

こうして前髪をあげてSさんは日本人からフィリピン人になったわけだが、前髪をあげることが儀礼的な意味を持つのは何もフィリピンだけではない。昔の日

本でもある。額が隠れるほどに前髪を垂らすおかっぱは現代でこそ大人もする髪型だが、昔の日本では少女の髪型で、大人の女性は髪を結び前髪をあげ額が露出した状態にしていた（江馬務『江馬務著作集 第4巻 装身と化粧』中央公論社）。そういえば、島崎藤村に「まだあげ初めし前髪の 林檎のもとに見えしとき 前にさしたる花櫛の 花ある君と思ひけり」で始まる詩（『初恋』）がある。かつて前髪をあげることは大人になることだった。

こうして、前髪をあげるかあげないかという、今の平均的日本人の感覚からすると些細に見えることに、日本人とフィリピン人、子どもと大人を分ける記号が隠れている。公開講座ではタガログ語において、「語の一部を繰り返す」という日本語ではほとんど気にとめられないような形態論的操作が、日本語では考えられないほど多様な意味と機能を担っていることをお話した。言語と文化を学ぶことはいつもこういう驚きに満ちている。

なお、日本でもフィリピンでも、成人男性が年をとるにつれて前髪が少なくなり、ついには前髪が存在しなくなり額が露出する現象が存在するが、これはまた別の話である。

タガログ語を知るための3冊

・ * ・ ... † ... ・ * ・ * ・ ... † ... ・ * ・ ... † ... ・ * ・



大上正直/ジェニー・ヨシザワ, 2013.『世界の言語シリーズ 6 フィリピン語』大阪大学出版会.

タガログ語 (フィリピン語、フィリピン語) を本気で勉強したいと思う人に手にとって欲しい本。英語で出版されている学習書を含めて世界で今もっとも文法的解説が充実している学習書です。会話的な表現についての配慮もあります。ときどき挿入されているフィリピンに関するコラムも楽しい。

... * * ————— * * ...

沼野恭子 (編), 2015.『世界を食べよう! —東京外国語大学の世界料理—』東京外国語大学出版会.

東京外国語大学で教えられている 27 言語を中心とする国や地域の料理についての本です。公開講座の講演ではほとんど触れることができなかったフィリピン料理についても書いてあります。私が担当しましたが、リトアニア語の先生に「本当はまじめなのね」と褒めていただきました。レシピ付きです。



... * * ————— * * ...

斎藤純男・田口善久・西村義樹 (編), 2015.『明解言語学辞典』三省堂.



タガログ語を知るためというよりも、タガログ語に関する言語学を知るための本です。この辞書には、今回の講座で言及した「接辞」「格」「語順」「テンス」「アスペクト」「意志性」「重複」はもちろん、「フィリピン・タイプ」についても記事があります。

... * * ————— * * ...

平成 26 年度 東京外国語大学オープンアカデミー

東京外国語大学語学研究所 企画

『言葉とその周辺をきわめる -3- 』

2014 年 11 月 11 日 (火) 第 6 回

「スペイン語のバリエーション ―接触する言語と文化」

東京外国語大学教授

高垣 敏博

東京外国語大学でスペイン語教えております高垣と申します。出来るだけ初めてスペイン語に接する方を念頭においてお話ししたいと思います。

1. スペイン語という言語

少し概説的なことからお話しします。

スペイン語はラテン語という古代ローマの言語から派生し、イタリア語やフランス語、ポルトガル語、ルーマニア語などの言語といわば姉妹関係でロマンス語と呼ばれる言語の 1 つです。

スペインの公用語であると同時に、ラテンアメリカを中心として世界の 23 の国と地域で話されているグローバルな言語です。ここで「地域」というのは、例えばアメリカ合衆国に住んでいるスペイン語系の人たちですが、一つの国をなしているわけではないので地域ということになります。ヨーロッパのスペイン、メキシコから中南米の諸国。アジアではスペインの植民地であったフィリピン、そしてアフリカの赤道ギニアなどでスペイン語が話されています。

またコロンブスがアメリカに到達した同じ年に、ユダヤ人がスペインから追放されているのですが、中東の方へ行って、ユダヤ・スペイン語というかたちで残されています。

私自身は言語調査で南米の国々の首都だけは全部網羅しました。中には治安がとても悪いので苦労しながら訪れた国もありました。数年前はベネズエラの首都カラカスと中米のコスタリカの首都サンフアンを同じときに訪れ、それぞれの大学でスペイン語方言のアンケート調査を行いました。サンフアンが安全な都市であるのと対照的にカラカスではとても注意しながら行動しなくてはなりませんでした。まだ中米のほとんどの国には行けていません。カリブ海ではキューバと

プエルトリコへ行きましたが、ドミニカ共和国は今後の訪問地ということになります。

スペイン語話者は全部で4億を超えていると思いますが、その意味でも重要な言語だといえます。それを4600万人ほどのスペインの人口と比べるといかにスペイン語が拡張してきているかがおわかりいただけると思います。アメリカ合衆国に住んでいるスペイン語系の人たちの数も少し前まで2000万とか言っていました。最近ではもう5000万台半ばになっているようです。

スペインのスペイン語はこのようにスペイン語人口の10パーセント少々にすぎません。教室ではスペインのスペイン語を教えています。疑問に思うことがあります。

2009年にスペイン王立アカデミーが『新スペイン語文法』(NGLE)を13年がかりで出版しました。その時に編集に当たったのはスペイン人の先生方だけではなく、従来とは違い、メキシコとかアルゼンチンとかのアカデミーの先生方も加わっておられます。全員の合議で内容が執筆されたと聞いています。スペイン至上主義にならないように配慮されていることがわかります。

話をイベリア半島に戻しましょう。スペイン語はカスティリア語という1地方の方言が国語になり、現在スペイン全土で話されているわけですが、実はスペインにはそれ以外に3つの地方語があり、それぞれ1つの独立した言語と考えられます。

まず、スペイン北西部ガリシア地方で話されるガリシア語、バルセロナを首都とするカタルーニャ地方のカタルーニャ語、それからスペイン北東部のバスク地方のバスク語です。これらの言語はスペイン語と両方用いられ、バイリンガルな言語状況になっています。

二言語併用ですので、例えばバルセロナに行くとスペイン語では"salida"「出口」と言うところを、カタルーニャ語では"sortida"と言います。むしろフランス語に近いですね。地下鉄のドアの上にはスペイン語で"Dejen salir"「降りる人を先に出させてください」と書いてありますが、そこにカタルーニャ語で"Deixeu sortir"とも併記されています。

バスクへ行くと例えば、市場の入口に"Merkatua"とバスク語で書かれています。が、スペイン語のmercado「市場」に似ているのでわかりますが、写真のようにまったく分からないものもあり、他の国に来た感じがするときがあります。



バスク語で書かれたバル（居酒屋）の看板

このように地方語の独自性はまた文化や制度の独立性とも関連し、政治的にもそれぞれの自律性への要求につながっていきます。ラジオ・テレビ・新聞などマスコミや大学など公共機関における地方語復権がいまスペインでは潮流となっています。

それからもちろんスペイン語（カスティリア語）自体にも方言があり、とくにスペイン南部のアンダルシア地方などの方言はよく話題にのびります。

2. スペイン語の生い立ち

ではスペイン語はどういう風にして生まれてきたか、かいつまんでお話ししたいと思います。

ローマ人は紀元前3世紀から紀元2世紀くらいの間に海を伝ってスペインの北部から入り、ラテン語をもたらしました。よく分かっていませんが、イベリア半島にはヨーロッパ北部から来たケルト人とアフリカから来たイベリア人が混ざり、ケルト・イベリア人として住んでいただろうと言われています。そこへローマの人たちが入ってきて、完全に支配し、ラテン語が話されるようになり、今に至るわけです。

フランスに入った人たちはフランス語、イタリアに残った人はイタリア語を、ルーマニアに入った人たちはルーマニア語をということで、どんどん分離していきました。こうしてスペイン語、ポルトガル語、フランス語、イタリア語、ルーマニア語などが生まれます。

少し単語の例を見てみましょう。ラテン語で FACERE 「する、作る」、はボル

ポルトガル語では fazer、スペイン語では hacer、フランス語 faire、イタリア語 fare、ルーマニア語 face となりました。それぞれ似ていますが、スペイン語だけ f がなくなって h になり、その h も発音されなくなりました。f の音が消失したのはこの音をもたないバスク語の影響だと言われています。

つぎに SCHOLAM 「学校」ですが、ポルトガル語では escola、スペイン語では escuela、フランス語 école となります。語頭に e が添加されています。一方、イタリア語では scuola、ルーマニア語では școlă です。e(s)- の有無でロマンス語が東西に分かれることがわかります。

つぎに NOCTEM 「夜」は、ポルトガル語 noite、スペイン語 noche、フランス語 nuit、イタリア語 notte、ルーマニア語 noapte。スペイン語だけ CT > ch という特徴的な音に変わります。

CLĂMĂRE 「呼ぶ」では、ポルトガル語 chamar、スペイン語 llamar、フランス語 clamer、イタリア語 chiamare、ルーマニア語 chema で、スペイン語の ll [ʎ] (「リエ」のような硬口蓋側面接近音) が特徴的です。CATELLUM 「城」も、ポルトガル語 castelo、スペイン語 castillo で、発音はいまの [ʎ] です。フランス語 châtea、イタリア語は castello (ll の l を両方とも発音します)、そしてルーマニア語では castel となります。

ロマンス語の1つ						
ラテン語	ポルトガル語	スペイン語	フランス語	イタリア語	ルーマニア語	
FACERE 作る	fazer	hacer	faire	fare	face	
SCHOLAM 学校	escola	escuela	école	scuola	școlă	
NOCTEM 夜	noite	noche	nuit	notte	noapte	
CLĂMĂRE 呼ぶ	chamar	llamar	clamer	chiamare	chema	
CATELLUM 城	castelo	castillo	chateau	castello	castel	

ラテン語から派生。ロマンス語相互の類似性とスペイン語の独自性。

ロマンス語の比較例

歴史にもどりますが、ゲルマン民族の移動によってイベリア半島にも西ゴート族という人たちが5世紀から7世紀ごろにやってきて、ほんの短期間ですがスぺ

インを支配します。戦争にまつわるような単語―「戦争」(guerra)であるとか「和平」(tregua)であるとか「兜」(yelmo)などーがだいたいスペイン語に残ります。

その後、711年に北アフリカからイスラムの人たちが攻め込んできます。そして1492年のコロンブスがアメリカに到達した年まで800年ほどの間、ずっとイベリア半島を支配するわけです。当時のヨーロッパは中世で、イスラムの文明の方がずっと高かったので、ヨーロッパにないものが入ってきました。米、オレンジ、化学や天文学、代数などイスラムの人たちが持ち込んだものを教わって覚えていったわけです。結局はスペイン語が残るわけですが、1492年になってやっとキリスト教徒がイスラムの人たちを追放して、復権することになります。

ところでイスラムの影響ですが、例えばセビリアの大聖堂にヒラルダの塔という有名なイスラム式の塔があります。これをモロッコにある同じような塔と比較すると、そっくりです。グラナダのアルハンブラ宮殿もそうですが、当時の支配のようすが伝わってきます。

言葉の面でもこの時代のアラビア語の影響が強く残っています。木綿は英語では cotton ですが、アラビア語からスペイン語に入ってきます。アラビア語の定冠詞の al をつけて、al coton のように言っていたはずですが。スペイン人はそれ聞いて alcotón と聞き取ります。そのまま残ったのが現在の algodón 「木綿」です。また英語の sugar に相当するスペイン語の azúcar 「砂糖」もアラブ語由来ですが、フランス語では sucre、イタリア語では zucchero、ポルトガル語では スペイン語と同じく a がついて açúcar です。こうしてスペイン語の辞書で、a で始まる場所を見ていくと多くがアラビア語由来ということに気がつきます。パエリアを作るのにサフランを入れますが、英語では saffron、スペイン語では azafrán です。また alcohol 「アルコール」、azul 「青い」、ajedrez 「チェス」、aceituna 「オリーブの実」、それに arroz 「お米」などもそうですね。英語の rice やイタリア語の riso、またフランス語の riz など al がつかない形式を取っているわけです。al がつかない berenjena 「茄子」や naranja 「オレンジ」などのアラビア語起源の単語ももちろんたくさんあります。

アラブ人がイベリア半島に侵入してきた711年からしばらくして722年にはキリスト教徒のレコンキスタと呼ばれる反撃が始まっています。何百年も続けてやっと1492年にグラナダで最後の王を敗北させ、イスラム教徒が出て行くと中世が終わります。このころカトリック両王がスペインを統一し、同時にスペインがアメリカへ進出することになります。

中世が 10 世紀から 15 世紀までだとすると、その最初の頃スペイン北部のレオン王国の中にあったカスティリア伯爵が力もち、それとともに 10 世紀末ごろその地で話されていたカスティリア語が、スペインの国語となっていました。中世のスペイン語が 1492 年以降中南米へと移植されることになります。この後スペインは 16 世紀 17 世紀を通じて「黄金世紀」を迎え、セルバンテスをはじめ有名な作家や画家たちを輩出することになります。

3. 新大陸のスペイン語

3.1 ラテンアメリカのスペイン語の特徴

「スペインのスペイン語とラテンアメリカのスペイン語はどう違うのですか？」という質問をよく受けます。まずラテンアメリカのスペイン語と一口に言っても一般化するのはむずかしいですが、すこし大雑把に言うと共通点をあげることはできます。

例えば発音の面では、カスティリア語で cinco 「5」の発音をするときに ci は歯間音の [θ] で発音し [θ inko]、また diez 「10」は [die θ] です。それがラテンアメリカでは s の音で発音され、cinco [sinko]、diez [dies] となります。問題は、スペインでもアンダルシアなどイベリア半島の南半分ではラテンアメリカと同じく [s] で発音します。ですからスペイン半分とラテンアメリカ全体で [s] の発音ということになります。そうすると、さきほどスペインのスペイン語を話している人は 10% を少し越える程度と言いましたが、この [θ] の発音をする人はさらに半分しかいないということになってしまいますね。

それから文法の点では、主語の人称代名詞で相手を表わすのは tú、usted ですが、親しい人に対する tú、それから初対面など距離置く相手には usted と使い分けます。複数の方は親しい相手には vosotros、初対面などの人に対しては ustedes を使い分けます。これはスペインの区別のしかたですが、ラテンアメリカへ行くと親称の vosotros が消えて、ustedes を親疎にかかわらず両方に使います。複数の相手なら誰でも ustedes ということになります。私は普段、スペイン式なので、ラテンアメリカの親しい人と単数では tú で話しているのに複数で ustedes と言われると、急にそよそしい感じがしてしまいます。同じ ustedes でも親しい相手として使っているのか、改まった相手として対応されているのかわからないわけですね。しかしこのような文法上の違いもたいした違いというわけではありません。

語彙の面ですが、これが一番大きいと考えられます。ご存知の llama「リヤマ」とか aguacate「アボカド」などはラテンアメリカの先住民語から、詳しくは、llama はケチュア語から、aguacate はメキシコのナワトル語に由来しています。tomate「トマト」や chocolate「チョコレート」なども同じくメキシコ由来です。coca「コカ」はアンデスのケチュア語ですし、tapioca「タピオカ」はパラグアイの先住民語グアラニー語に由来します。これは一例ですが、語彙の点では、スペインのスペイン語とは大きく異なると言ってもいいでしょう。

3.2 方言区画の試み

語彙の話をつづけると、ラテンアメリカの語彙も地域によって異なるものであることがわかりいただけたかと思いますが、ラテンアメリカのスペイン語には方言のような地域の違いはあるか、というのがつぎの疑問点でしょう。あれだけ広大な南北アメリカですから均質ということはありません。私たちが少し聞くだけでも、「あの人アルゼンチン人だな」とか「あ、メキシコ人だ」などとある程度察しがつきます。それぞれ特徴を持っているからです。ラテンアメリカをいくつかの区画に分けようという考え方がいくつも提案されていますが、二つ紹介しましょう。まず、大胆ですが、「高地のスペイン語と低地のスペイン語」という2つに分ける方法です。メキシコシティは 2240m の高地です。しかしアカプルコとかベラクルスとか、海岸の方へ行くとかなり違うスペイン語が聞こえてきます。しかもキューバやペルーの沿岸地域とか行くと、メキシコの海辺のスペイン語とむしろ似ているような気がします。一方、アンデス地域へ行くと、メキシコシティの高地のスペイン語に通ずるところがあるような印象を受けます。

音声の例ですが、低地では los hombres「男たち」と言うのに loxombre のように s が弱化したり消滅したりします。los fósforos「マッチ」も lofóforo と音節末の子音が弛緩し、消失します。

逆にメキシコシティなど高地に行くと、母音が落ちて子音が残ります。cafecito「コーヒー」というところが caf'cito に、entonces「そのとき」が ntons's のように子音ばかり聞こえてきます。地名の San Luis Potosí の最後の語は Pot'sí というように母音がどんどん落ちます。アンヘル・ローセンブラット (Angel Rosenblat 1962) という学者の説ですが、もちろんこの分類では、それがどこの国のスペイン語がわかるとはいえません。

もう 1 つの方言区画論は、エンリケス・ウレーニャ (Henríquez Ureña 1921)

4. 現代都市で用いられる語彙による方言区画の試み：VARILEX

『世界のスペイン語の語彙バリエーション』Variación Léxica del Español en el Mundo(VARILEX :<http://lecture.ecc.u-tokyo.ac.jp/~cueda/varilex/>)という調査研究ですが、具体例から始めましょう。乗り物の「バス」という項目の調査結果が**つぎのマトリックス**です。

「バス」のマトリックス

横軸は左から 1. ES COR, 2. ES SCO, … そして、最後の右端が 44. AR BUE となっています。これは調査地点です。ES はスペイン(España)の COR はコルドバ(Córdoba)を表わします。2 SCO は同じくスペインのガリシア地方の都市サンティアゴ・デ・コンポステーラ(Santiago de Compostela)の略号です。スペインから 15 の CU でラテンアメリカのキューバ(Cuba)に移り、カリブ海からメキシコ、そして、中米を経て、南米に下って生きます。最後は 44 AR アルゼンチン(Argentina) の首都ブエノスアイレス(Buenos Aires)に至ります。この時点では 44 の主要都市で調査を行ったことを表わします。その後現在ではさらに地点は増えています。さて表の右端、縦軸には一番上の *autobús* から、*banderita*, *bus*, *camión* と進み最後は *taxibús* まで、途中 7 番が抜けているので、計 12 種類 (*autobús*, *banderita*, *bus*, *camión*, *camioneta*, *colectivo*, *guagua*, *micro*, *microbús*, *ómnibus*, *ruta*, *taxibús*) のバスの変種がリストアップされています。

各調査地点でアンケートを行い、基本的に 4 名の被験者にどのような語形を使うのか尋ねます。マトリックス上の 4, 3 などの数字はその地点で、その語形を日常的につかうインフォーマントの数ということになります。この数字が大きいほどその語形が集中的に使用されているということですね。

「バス」にもどりますと、*autobús* が標準形で、ほとんどの地点で使用すると回答されていますが、広いスペイン語圏では地方・国・地域で用いられる変種すなわちバリエーションはなんと 12 種類もあり、同じ「バス」と言うのに、例えばメキシコへ行くと、*autobús* と言わないで *camión* と言うわけです。メキシコ留学した人は *camión* と言うようになりますし、アンデスの方へ行った人は *micro* を日常で使い、アルゼンチンとかへ行った人は *ómnibus* と言うようになります。よく観察すると同じバスでも大きさや運営のしかたなど微妙に違ったりするのですが、とりあえずバスのカテゴリーに入れて呼称が違うというように分類していきます。この変種と首都名の一覧がマトリックスというわけです。都市生活を送る上で必要になる「モノ」には地域によってこんなにも多様性があることが実感できるので



プロジェクト VARILEX のサイト

はないでしょうか。

ところで、スペイン語に接しておられない方は「そんなの、ちゃんと辞書に載っているでしょ」と思われることでしょう。しかし、実はこれが載っていないんです。アルゼンチン人は自分のアルゼンチン語法辞書のようなものを作りますし、メキシコ、ペルー、またスペインの人はそれぞれ自分の国で特有に用いられる語彙を集めた辞書を作ったりしますが、隣の国でどういう単語を使っているかにはあまり気にならないのかもしれませんが。国なり都市なりごとにどのようなバリエーションを使うのかをわかりやすくリスト化したバリエーション辞典のようなものがほとんど存在していないわけです。それはちょうど、日本の各地の方言の現代語彙をいろいろな事物ごとにリストにして一冊にまとめたような辞典が存在していないのと似ているかもしれません。

それが 20 年前の状況でした。上田氏と 2 人で、「こうなったらわれわれが作らないとしようがないな」とこのプロジェクトを始めたのがそもそもの発端でした。つぎに「どうやって作ろうか？」ということになりました。すでに出版されている各種辞書を集めるだけでは比較も難しいし、生データに基づいていることになりません。第一「ホッチキス」なんて載っていない各国語辞典の方が多いぐらいです。「バス」などはいいでしょうが、日常都会生活で使うようなものはそんなに載っていないのが現実です。まず、現地に出かけていってというのが比較の候補になりうるのか観察し、つぎにアンケート調査で信頼できる人に情報を提供してもらおうという方針を立てました。

いま述べたように、各地域（都市）の協力者 4 人（男女、世代の組み合わせ）を選んで、その人たちに答えてもらうこ

とにしました。当時はまだネットの時代ではなく、アンケート冊子を東京から郵送し、現地の信頼できる研究協力者にアンケートを実施してもらい、回収したデータを返送してもらって、蓄積していきました。いまでは、ネットでアンケート



camión「バス」の分布

協力をお願いできるようになりました。

そこで例えば *camión* 「バス」という語形は、メキシコでよく使うという予備知識どおり、調査結果でもメキシコの3都市で、4人、4人、6人（協力が基準の4人より多くなった）となりました。

さてよく話題に出てくるのですが、バスのことをキューバでは *guagua* と言います。キューバやプエルトリコ、サントドミンゴなどに集中しています。ところが私たちの個人的体験でもスペインのカナリア諸島のラス・パルマスで以前 *guagua* をバスの意味で使っているのを見聞きしたことがありました。調査結果によるとこれら2地域で使用されていることがわかりました。この調査結果が正確であることを確認できました。

私たちの調査には含まれていませんが、より一般的な語彙バリエーションについても少しふれておこうと思います。まず、「駐車場」の例を見てみます。こんな基本的な語でも広いスペイン語圏では同じではないのです。スペインではパーキング *aparcamiento*（あるいは英語由来の *parking*—ただパルキンと発音）と言います。それがラテンアメリカのメキシコシティーやペルーのリマへ行きますと *estacionamiento* と言います。ところがブエノスアイレスでは *playa* と書いてありました。これはスペイン語では「ビーチ、浜辺」という意味で驚いたことがあります。どういう由来であるのか確かめることはできていませんが、街を歩いていると、「あれこんな町中にどうしてビーチあるのかな？」と思って聞いてみたら「違いますよ、駐車場です」ということでした。驚くべきバリエーションが存在するわけですね。

「地下鉄」もそうです。どの国へ行っても「地下鉄」は *metro* だと思っていました。しかしアルゼンチンのブエノスアイレスでは *subte* と言います。これは英語の *subway* と同じ発想で *subterráneo* の略語だと考えられますが、他の国には見られないレアな変種と言えるでしょう。

メキシコへ行くと、いわゆる金物屋の看板に *tlapalería* と書かれているのを目にします。スペインでは *ferretería* というところですか。これはメキシコ先住民のナワトル語由来です。ですからラテンアメリカを旅行する人は常にこうした例に遭遇することになります。一目で違いがわかるリストがほしい、その願いが、私たちが始めた調査の原点でした。

こんな経緯で、1992年に上田氏とまず手始めにメキシコシティーをゆっくり歩いて、看板や広告、注意書きなど文字情報をくまなく探し、写真や記録にとろ

うということになりました。メキシコシティは人口 2000 万をこえる大都市です。そこでメキシコシティを南北に貫くメインストリートのインスルヘンテス通りと東西に交わるレフォルマ通りの一定の区画を 2,3 日かけて、ゆっくり歩き店ごとに立ち止まりできるかぎり記録にとりました。その記録から、まずはスペインのスペイン語との違い、他の国々のスペイン語の情報との異同をチェックしていきました。

フィールドワークで情報がたくさん集まりましたが、その途上で副産物がありました。たくさん撮った写真情報を中心に本にして、『街角で見たスペイン語』(1996、三省堂)というタイトルの本ができました(以下コラム参照)。残念ながら続編『マドリードで見たスペイン語』は実現しませんでした。

翌 1992 年、日本在住のスペイン人、メキシコ人、チリ人の 3 名のインフォーマントに都市生活でよく使う「モノ」、すなわち「ジャケット」「ヘッドフォン」「輪ゴム」「ホッチキス」「毛布」「ガラス」「バス」などの絵を見てもらって各自のスペイン語ではどう言うか答えてもらうミニ調査を行いました。従来の伝統的な方言学調査では例えば農村で使う農器具など村ごとにどう言うか聞く、ミクロな調査が中心だったとしたら、私たちの調査は、広いスペイン語圏をマクロに把握する方針を立てました。また、現代都市生活に焦点を合わせたので、例えばホッチキスなどを調査対象にしました。絵を見せて、「これはどう呼びますか？」という質問をすると、3 人のうち 1 人は *grapadora*、1 人は *engrapadora*、1 人は *corchetera* と答えました。スペインでは *grapadora* と言うのは知っていたのですが、結局、3 変種のマトリックスができました。

つぎはガラスです。スペインでは *crystal* と言いますが、ラテンアメリカの人は *vidrio* と言います。ラテンアメリカは共通していることがわかりました。

「バス」については、3 つの国の人なのに 4 つの形が出てきました。*autobús* は標準語ですから、みんな使います。そしてメキシコ人は予想通り *camión*、サンティアゴの人は *micro* も使うし、*bus* とも言います。サンティアゴでは 3 種類使い分けていることになります。メキシコでは、*autobús* は公式な言い方で、普段は *camión* を使います。スペイン人は *autobús* だけしか使いません。こうして 205 項目を選択して、初年度に調査しました。調査結果の統計処理は上田氏の役目ですが、共起回数とか相関係数などというのを出して、2 つの都市で使われている語彙にどれだけ共通性があるか調べていきます。

さらに翌 93 年調査都市数を 14 に増やして、毎年 200 語ぐらいずつ調査語彙

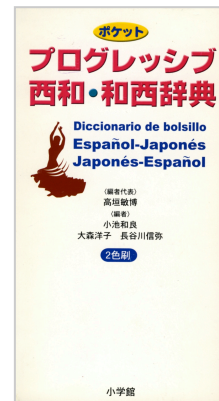
数を増やしていきました。しばらくすると例えば「ジャケット」についてでも 12 種も集まってきました。それからしばらくするとインタビューする時にはもう考えられる語形をリスト化しておいて、「この中でどれを使いますか？」という選択肢ができるようになっていきました。

アンケートは郵送で、調査地点も前述のように 44 地点から 60 地点に増えました。こうして次第に、東京に本部を置く、国際的な研究ネットワークになっていきました。またマトリックスがどんどん増えていきました。

後に上智大学のアントニオ・ルイズ・ティノコ氏もプロジェクトのメンバーとなり、蓄積されたデータを変種ごとに地図上に表わすことを可能にしてくれました。1 つの語形がどの概念語の変種であるか、またどのような分布を見せるのか検索もできるようになってきました。

ですから、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスを歩いていたときに見つけた婦人服店の看板ですが、衣類の種類と値段とかが書いてあるもののまったく分かりません。「polleras が 2 つで〇〇ペソ」「remera は〇〇ペソ」と書いてあるのですが、スペインでは聞いたことのない単語です。ところがいまでは、私たちのサイトで検索するとわかるようになっていきます。pollera はスカートのことで、スペインでは falda と言うことがわかるし、T シャツのことをスペインでは camiseta と言いますが、アルゼンチンでは remera と言うことが判明します。

さきほども言いましたように、蓄積された語形データを多変量解析で統計処理をすると似た単語が集中する地域をグルーピングしていくクラスター分析が可能になります。それを地図に表していくと、世界のスペイン語圏の区画が可能になってきます。まずスペインと赤道ギニアで 1 つの地域を形成する。それからメキシコは単独で 1 つの区画を形成する、またカリブ海諸国も 1 つグループ。中米からコロンビア、ベネズエラおよびカリブ海に面した地域でもう 1 つの区画を形成することがわかってきます。またペルーを中心としたアンデスも 1 つのグループ、そして最後に南米の南半分、すなわちアルゼンチン、パラグアイ、ウルグアイ、チリで似た語彙を共有している率が高く一つのグループをなしていることが判明します。こうして、合計 6 つの地区に分かれることがわかりました。これを改めて見てみ



語彙バリエーションが盛り込まれている

ると、さきほどふれたエンリケス・ウレーニャ(Enríquez Ureña)の先住民の言語を基準とする区分と微妙に違うとはいえ、結果的に似た方言区画になっていることがわかりました。これが言語地理学という学問への1つの貢献になればと思います。

それからこれまでいくつか辞書を作りました。例えば小学館の『ポケットプログレッシブ スペイン語西和/和西辞典』という小さな辞書に、この調査の成果を盛り込んであります。この辞書にはコラムにして「バス」autobúsの変異形として私たちが調べたcamiónとかguaguaとかのリストが使用国が示されています。上田氏は三省堂の『クラウン和西辞典』に同じような調査の成果を盛り込んでいます。プロジェクトを開始した頃の私たちの夢が少し実現されてきたと言えます。

5. 言語と文化にふれる

実はこの語彙バリエーションのプロジェクト (VARILEX) の他にも、2001 年から同じチームで文法バリエーションの調査研究という別のプロジェクトも平行して進めています。Varilex に模して Varigrama と命名しました。Variación Gramatical del Español en el Munco『世界のスペイン語の文法バリエーション』の略号です。人称代名詞にしろ、接続法の使い方にしろ、前置詞の使い方にしろ、スペインとラテンアメリカで違う点が結構あります。ふだん気になっているのですけれど、なかなかどう違うのか調べる機会がありません。このプロジェクトではスペイン語圏の都市にある大学を訪問し、学生さん 20 人ほどに文法項目にしたがって作成した、文法の議論で問題になっている 110 ほどのスペイン語文について、「A.自分でもそのように言うのか、B.自分は言わないが聞いたことがある、あるいは、C.自分は言わないし聞いたこともない」という三択に答えてもらい、そのような文が各都市でどのような使われ方をしているかを考察するものです。

まずメキシコの大学に行ってアンケート調査しました。現地の研究者のお世話で、学生さん 20 名に集まってもらい、100 余問の文の適否を答えてもらいました。その後調査地点を増やし、ラテンアメリカで 14 箇所、スペインでは 10 箇所で実施しました。現在総計 500 人ぐらいの人に聞いたことになり、少しずつ知られるようになっていきます。

両プロジェクトを平行して進め、定期的にスペイン語圏をフィールドワークす

るので私自身南米の国の首都を全部訪れたことになります。中米は危険度が高い国が多く、コスタリカを除いてほとんど未調査です。スペインでは10箇所カバーしましたが、まだまだ足りません。スペインでもラテンアメリカでも現地の研究者とまずコンタクトを取って研究への理解を求め、アンケート調査のセッティングをお願いします。アンケート当日の一定の時間に学生さんに集ってもらうのですが、これがなかなか大変です。約束した時間にまとまって来てくれないこともあり、まる1日かかってしまいます。反対に先生の号令でぱっと集ってきてくれるところもありました。調査に先立って日本のことを話す講演が条件になるところもありました。日本から20数時間飛行機に揺られて到着後、1時間日本のことを話して（これはとても有意義なことですが）、それからやっとアンケートが実現するわけですね。

副産物も色々ありました。ボリビアの首都ラパスにあるサン・アンドレス(San Andrés)大学ではスペイン語しか離せない学生が学んでいます。ここで調査をお願いした先生がそれならもっといい大学がありますよ、ということでエル・アルト(El Alto)大学へ連れていってもらいました。

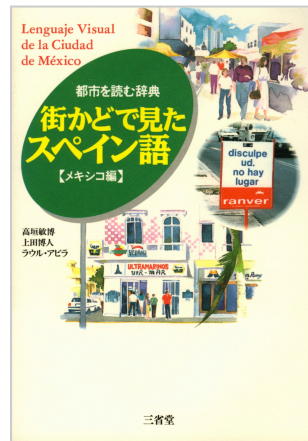
ラパスは標高3500メートルのところにあって、結構息苦しいのですが、エル・アルトはさらに高く4000メートルのところにあります。ここにラパス空港があります。この大学には父母が先住民の言語であるケチュア語ないしはアイマラ語を話し、学生さんもこのいずれかの言語あるいは両方、それにスペイン語が話せる子息だということです。校舎の階段を歩いて上がっていきただけでも胸苦しいのですが、とても有意義な調査になりました。結果を見てみると、確かに他のラテンアメリカの国々と少し違う結果が出ています。パラグアイの首都アスンシオンへ行った時も、グアラニー語との2言語併用の国ですから似た先住民言語の影響があるかもしれません。これは今後慎重に調べてみようと思っています。

スペイン語圏をこれだけ「フィールドワーク」していると、私たちも現地の生活を体験します。特に食は欠かせません。スペイン語という言語のバリエーションを調べるのですが、同時に食などについても地域色があることがわかってきます。メキシコからカリブ海沿岸のコロンビア、ベネズエラ、キューバやプエルトリコなどではどこでもお米料理があること、トウモロコシ、インゲン豆など共通の素材が使われていることがわかってきます。南米アンデス地域のボリビアやエクアドルではジャガイモが増えてきて、肉も量を少なく薄く延ばして、胃に負担がかからないようにします。ボリビアなど高度の高いところは、もう夕方になる

とできるだけ食べないようにしていると聞きました。またマスなどの魚料理が出てきます。さらにアルゼンチンやウルグアイの方へ行くと、肉をたっぷりと食べます。パラグアイへ行くと、タピオカで作ったパン（チパ）などめずらしいものが出てきます。今後チャンスがあればもう少し詳しい食の分布なども調べてみたいと思っています。（了）

コラム †

都市を読むーメキシコシティー



『都市を読む辞典：街かどで見たスペイン語【メキシコ編】』

・・・＊ ◆—————◆ ＊・・・

共同研究している上田博人氏も私も、学生時代メキシコ政府の交換留学制度のおかげで1年間メキシコに暮らすという共通体験をもっている。ずいぶん年数が経ち、いまではスペイン、ラテンアメリカの多くの国々を対象にスペイン語を観察しているが、1993年に何年かぶりでメキシコを訪れ、メキシコシティーの顔を改めてつぶさに眺めるチャンスを得た。言葉を観察するというと音声言語や書かれたテキストもあるが、私たちが日常見過ごしがちの多くの「言葉」があることに気づく。街角の広告、交通標識、看板、公園の注意書き、空港や駅の表示、案内板などが発する言葉がシャワーのように浴びせかけられているのだと思う。これはどこの都市でも多かれ少なかれあることで、メキシコシティーでもこのような声なき声を受け止めようと考えた。

こうして、メキシコシティーを街歩きし、「都市を読む」ことを企てることになった。人口2000万を越え、さらに拡大し続けるこの大都会のすべてを見るわけにはいかない。日数も限られているので、観察を市内の巨大なチャプルテペック公園、東西に市を貫くレフォルマ通り、それと交わり南北に走るインスルヘン

テス通り、それが交差するあたりの商業地区ソナロサ、そして、旧市街にある中央広場ソカロの5つに照準を絞り、その範囲もそれぞれ数時間で踏破できる範囲に限定して歩いた。店の前に三脚を据えたり、ズームにしたりして写真を取り、メモ帳を埋めていった。スーパーマーケットで商品の写真を撮っていて叱られることもあった。

いまと違って、デジタルカメラもないし、ポータブルのPCもない時代で、すべてメモ帳であった。撮った1500枚の中から300枚ほどを選び、ABC順に並べ、わたしたちの友人であるEl Colegio de México（メキシコ大学院大学）の言語学者ラウル・アビラ（Raúl Avila）氏の解説（翻訳したもの）を添えて本にしたのが本文でもふれた『都市を読む辞典：街かどで見たスペイン語メキシコ編』（三省堂、1996年）である。いまでもページを繰ると、20年以上も前の街歩きが懐かしく思い出される。

スペイン語を知るための3冊

・ * ・ ... † ... ・ * ・ * ・ ... † ... ・ * ・ ... † ... ・ * ・



寺崎英樹他編, 1999. 『スペイン語の世界』世界思想社.

スペイン語の構造のほか、スペイン語の歴史や方言、ラテンアメリカのスペイン語などについても記述されている。

... ・ * ・ ————— ・ * ・ ...

高垣敏博監修, 2015. 『スペイン語学概論』くろしお出版.

スペイン語学の主要なトピックを 18 章で初心者向けに解説している。スペイン語史やスペインの諸言語についても論じられている。



... ・ * ・ ————— ・ * ・ ...



高垣敏博, 2010. 『食のスペイン語』東洋書店.

主としてスペインの食を通してスペイン語を学び、そのスペイン語を使ってスペインでグルメを楽しむように意図されている。ラテンアメリカの食についても少しふれている。

... ・ * ・ ————— ・ * ・ ...

本講座の実施概要は次のとおりです。

掲載データは講座開講時のものです。

東京外国語大学オープンアカデミー 2014 年度後期開講講座

「言葉とその周辺をきわめる -3-」

日時：2014 年 10 月 7 日～11 月 11 日、毎週火曜日、全 6 回、19 時～20 時半

会場：東京外国語大学 本郷サテライト 7 階

日時：2014 年 10 月 7 日

第 1 回 「シンガポール・マレーシアの言語」

講師：野元裕樹（東京外国語大学講師）

日時：2014 年 10 月 14 日

第 2 回 「「中国語好み」の表現－名詞的表現と動詞的表現」

講師：加藤晴子（東京外国語大学教授）

日時：2014 年 10 月 21 日

第 3 回 「ハンガリー語：日本語と似ているところ、違うところ」

講師：大島 一（東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所研究員）

日時：2014 年 10 月 28 日

第 4 回 「フィリピンの言葉は繰り返す」

講師：長屋尚典（東京外国語大学講師）

日時：2014 年 11 月 4 日

第 5 回 「ロシア語と日本語の出会い」

講師：匹田 剛（東京外国語大学准教授）

日時：2014 年 11 月 11 日

第 6 回 「スペイン語のバリエーション－接触する言語と文化」

講師：高垣敏博（東京外国語大学教授）

東京外国語大学オープンアカデミー 2014 年度後期開講講座

「言葉とその周辺をきわめる -3-」

発行 2016 年 3 月 20 日

編集・発行者 東京外国語大学語学研究所

代表者 成田 節

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

Phone : 042-330-5407

東京外国語大学オープンアカデミー 2014年度 後期開講講座
言葉とその周辺をきわめる -3-

東京外国語大学 語学研究所
2014年10月7日(火)～11月11日(火)
東京外国語大学 本郷サテライト